

国道 474 号 (飯喬道路)

埋蔵文化財発掘調査報告書 1

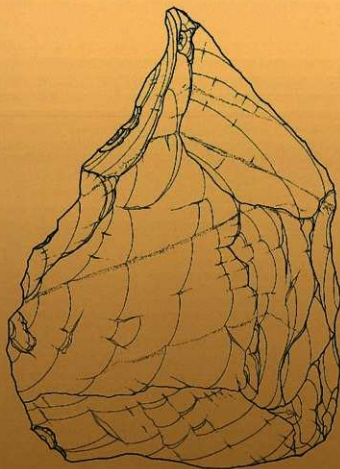
—飯田市内その1—

長野県竹佐中原遺跡における

旧石器時代の石器文化

Nagano, TAKESA-NAKAHARA SITE

Industry of the Japanese Palaeolithic Age



2005.3

国土交通省中部地方整備局

Ministry of Land, Infrastructure and Transport Chubu Regional Bureau

長野県埋蔵文化財センター

Archaeological Research Center of Nagano Prefecture

国道 474 号 (飯喬道路)
埋蔵文化財発掘調査報告書 1

—飯田市内その1—

長野県竹佐中原遺跡における
旧石器時代の石器文化
Nagano, TAKESA-NAKAHARA SITE
Industry of the Japanese Palaeolithic Age

2005.3

国土交通省中部地方整備局
Ministry of Land, Infrastructure and Transport Chubu Regional Bureau

長野県埋蔵文化財センター
Archaeological Research Center of Nagano Prefecture



竹佐中原遺跡の位置



◀ 出典：国土交通省 国土画像情報（カラー空中写真）



▲ 西上空から遺跡を臨む

竹佐中原遺跡と天竜川の間には、城山・水晶山といった山々が並び、盆地状の地形が形成されている。

東上空からみた竹佐中原遺跡▶



竹佐中原遺跡の地形と地点



▲ A・B地点の間、丘陵中央の平坦面を道路(写真中央)が通る。



A地点では2ヶ所の遺物集中(ブロック)が確認された。

竹佐中原遺跡の層位と石器出土層準



▲基本土層 A-B土層断面



▼R-S土層断面で確認された御岳のテフラ

御岳第1軽石
(On-Pm1)御岳上垂テフラ
(On-Km)

▲竹佐中原遺跡の基盤を構成する礫

- ①片状ホルンフェルス ②花崗岩
③球質ホルンフェルス ④濃飛流紋岩



▲A地点の遺物出土状況

表土から40cmほどの深さで石器は発見された。



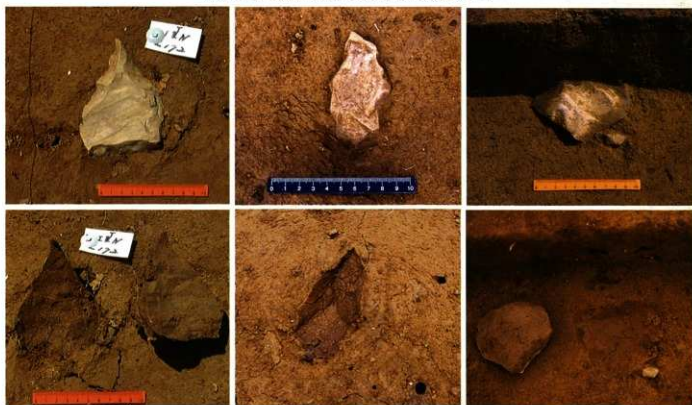
◀B地点の遺物出土状況

A地点と同じ4層から遺物は出土したので、5層まで掘り下げると、出土地点は土柱になる。

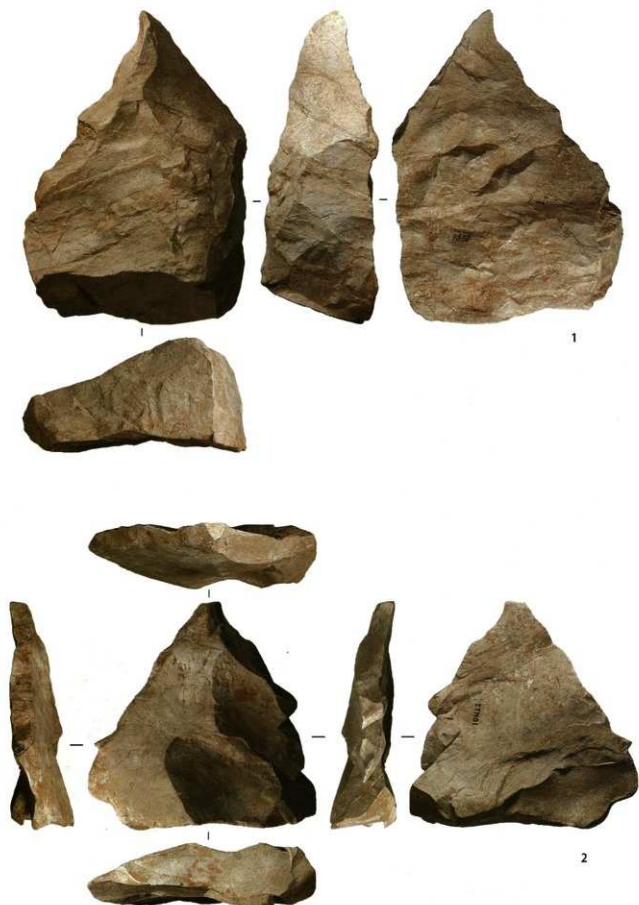
竹佐中原遺跡 石器の出土状況

A 地点2号ブロック
遺物出土状況

▼遺物の出土状況（上段）と取上げ後の痕跡（下段）



竹佐中原遺跡 A 地点出土石器 1



竹佐中原遺跡 A 地点出土石器 2



4

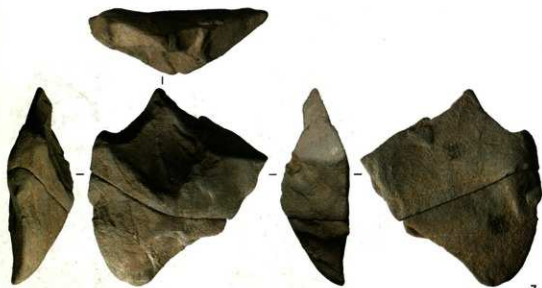
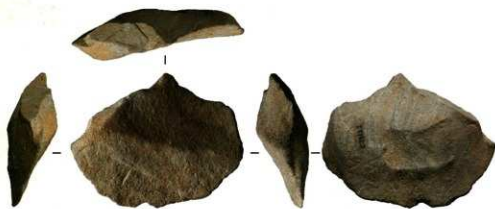
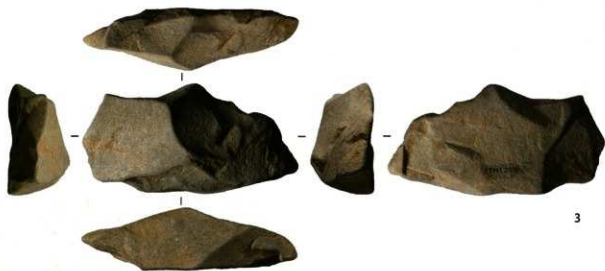


5



× 2/3

竹佐中原遺跡 A 地点出土石器 3



竹佐中原遺跡 A 地点出土石器 4



1



1



8



9

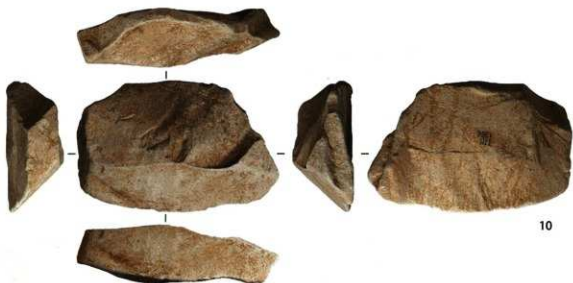


11

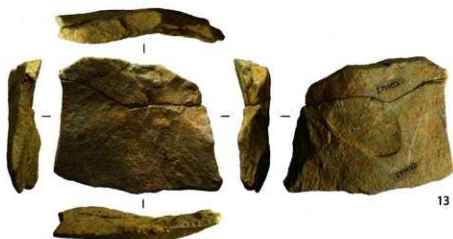


12

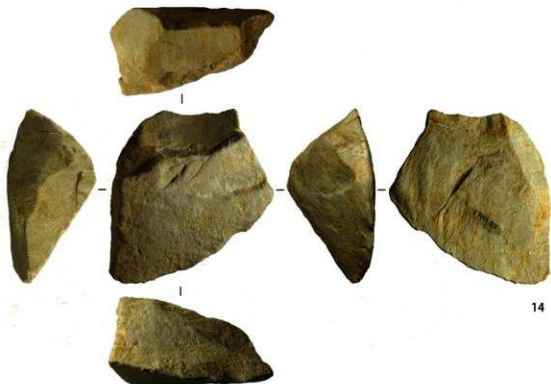
竹佐中原遺跡 A 地点出土石器 5



10



13



14

竹佐中原遺跡 A 地点出土石器 6



16



18

 $\times 2/3$

竹佐中原遺跡 A 地点出土石器 7



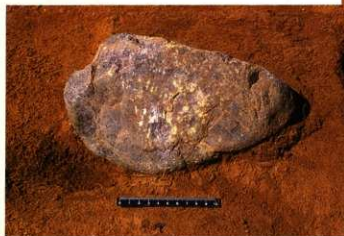
21

× 2/5

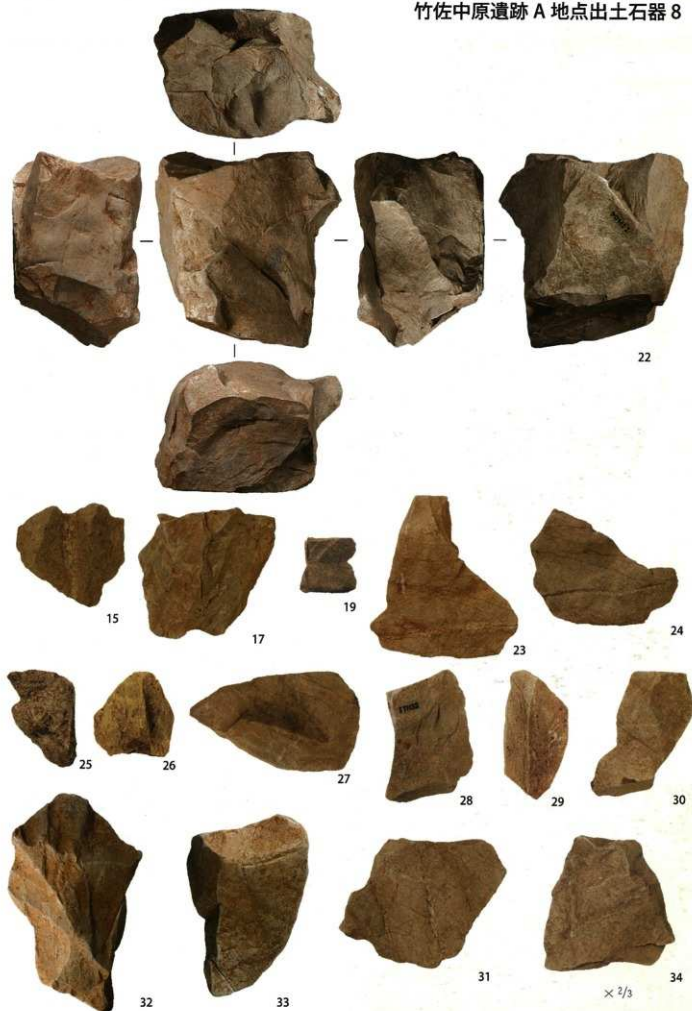


台石の出土状況

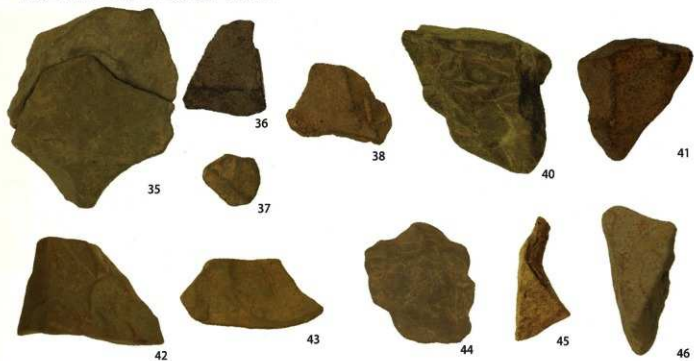
A 地点2号ブロックから出土した台石は、傾いた状態で発見された。



竹佐中原遺跡 A 地点出土石器 8



竹佐中原遺跡 A 地点出土石器 9



竹佐中原遺跡 A 地点周辺部出土石器



竹佐中原遺跡 B 地点ほか出土石器



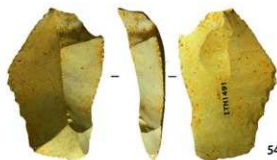
局部磨製石斧の出土状況
3層と4層の境から単独で出土。



65



73



54



68



× 2/3



67

序

平成 13（2001）年、長野県飯田市山本の竹佐中原遺跡から発見された旧石器は、県内でも最古級の石器と考えられ、後期旧石器の初頭からいわゆる前期・中期旧石器時代（今から 3 万数千年以前）にさかのぼりうる可能性が高く、注目を集めました。

遺跡は、飯田市の南西部、三遠南信自動車道の飯田南インターチェンジ（仮称）の予定地にあたります。長野県埋蔵文化財センターでは、平成 12 年（2000）年から遺跡の状況を把握するための試掘調査を進めてきました。そのような中で 2001 年の 7 月 27 日に石器が発見され、その後 1 ヶ月の間に 20 数点の石器が出土しました。前・中期旧石器遺跡ねつ造事件が社会的問題になっていた時であったため、遺跡の早期公開、調査指導委員会を設置して調査を進めてまいりました。

三遠南信自動車道建設に伴う竹佐中原遺跡の発掘調査は今後も継続して行われます。石器の年代や最終的な評価が定まるのは、まだ先のことになると思われますが、再構築をせまられる旧石器時代研究の中で、この遺跡が重要な役割を担っていると確信しておりますと同時に、日本および東アジアの人類の歴史を考える上でも、非常に高い価値を持つ遺跡であると考えており、今後の調査研究にも大いに期待しております。

最後になりましたが、発掘作業から本報告書刊行にいたるまで、深いご理解とご協力をいただいた国土交通省、飯田市、飯田市教育委員会などの関係機関、地元的地権者や関係者の方々に深甚なる謝意を申し上げます。

平成 17 年 3 月 10 日

財団法人長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター

所長 小 沢 将 夫

例言

- 1 本書は長野県飯田市に所在する竹佐中原遺跡^{たけすかほら}の平成12(2000)年から平成15(2003)年にかけて実施した発掘調査の旧石器時代に係る報告書である。
- 2 調査は国道474号(飯喬道路)建設および関連工事に伴う事前調査として実施し、国土交通省中部地方整備局からの委託事業として、財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 本遺跡は上記事業のインターチェンジ部分にあたり、広大な面積が調査対象地となり、本書刊行の現在までもまだ発掘調査は継続中であるが、平成13(2001)年度に発見された旧石器時代の遺構と遺物は、長野県最古級と考えられ、学界でも注目された。また発見当時、前・中期旧石器時代遺跡ねつ造事件が社会的に話題になっていた最中であり、全国的に取上げられることとなった。このため竹佐中原遺跡の旧石器時代の調査成果を別冊にして本書として刊行することにした。
- 5 竹佐中原遺跡の概要は、長野県埋蔵文化財センター刊行の『長野県埋蔵文化財センター年報』17～20ほかで紹介している。内容において本書と相違がある場合は、本書の記述の方が優先する。
- 6 本書に掲載した地図は飯田国道事務所作成の平面図、国土地理院発行の地形図(1:200,000)等を使用した。
- 7 土壌、出土遺物等の自然科学分析・鑑定および写真撮影は以下の諸氏・機関に委託もしくは協力をえた(敬称略)。

1 放射性炭素年代測定:(株)パレオ・ラボ

2 火山灰分析:寺平 宏、(株)パレオ・ラボ、(株)古環境研究所

3 植物珪酸体分析:(株)パレオ・ラボ、(株)古環境研究所

4 光ルミネッセンス年代測定:(株)古環境研究所

5 黒曜石産地推定:沼津工業高等専門学校教授 望月明彦

6 石材鑑定:信州大学理学部教授 原山 智

7 巻頭カラー遺物写真撮影(PL1):独立行政法人奈良文化財研究所専門職員 牛嶋 茂

8 遺物写真撮影:(有)アルケ・リサーチ、ミヤガワ

- 8 以下の方々に指導・協力を得た。ご芳名を記して感謝します(敬称略)。

会田 進 安齋正人 安藤政雄 池谷信之 石川恵美子 出穂雅実 市橋雄一 稲田孝司 今村善興
大竹幸恵 岡田正彦 岡村道雄 萩 幸二 小田静夫 小野 昭 小畑弘己 織笠 昭 織笠明子
角張淳一 加藤真二 加藤博文 神村 透 川上 元 川道 寛 菊池強一 木崎康弘 網川一徳
桐原 健 栗島義明 小菅将夫 小林達雄 小林広和 小林正春 斉藤基生 三枝健二 佐川正敏
桜井弘人 佐藤宏之 佐藤良二 実川順一 下平博行 白石浩之 鈴木忠司 須田富士子 須田良平
須藤隆司 砂田佳弘 諏訪問順 高尾好之 高倉 純 高見俊樹 竹岡俊樹 橘 昌信 谷口康浩
堤 隆 手島美香 寺平 宏 戸沢充則 中川和哉 中島庄一 長友恒人 中村修身 中村真理
中村由克 野口 淳 萩原博文 羽生俊郎 馬場保之 春成秀爾 樋口昇一 藤野次史 保坂康夫
松島信幸 松藤和人 道沢 明 宮坂 清 宮坂光昭 宮沢恒之 宮田栄二 向坂嗣二 村松 武
望月明彦 矢島園雄 柳田俊雄 山田晃弘 山田しょう 和田好史
裏 基同 李 起吉 李 超栄 Anatoly P.Derevianko

9 発掘調査の担当は以下のとおりである。

平成 12 (2000) 年度：調査研究員 青木一男

平成 13 (2001) 年度：調査研究員 大竹憲昭、上田真、藤原直人

平成 14 (2002) 年度：調査研究員 大竹憲昭、藤原直人、若林 卓

平成 15 (2003) 年度：主任調査研究員 大竹憲昭

調査研究員 石上周蔵、藤原直人、若林 卓

10 平成 12 年度～ 15 年度の調査補助員は以下のとおりである。

伊藤和恵 伊東裕子 井ノ口隆勇 金澤勢津子 金田 都 神戸鶴三 北沢一嘉 木下貞子
木下由紀子 木下義男 木下力弥 胡桃澤庄治 鳥岡吉人 清水恒子 下平隆司 所沢ちづ子
竹村和子 竹村訓一 竹村サダエ 竹村定満 谷村悦子 中島俊明 中野満里子 中野充夫
中村 信 中村地香子 西野トミ子 林 伸好 原 清子 福岡勝利 牧内 修 牧内福一
牧ノ内昭吉 松井明治 水野明子 箕島正三 森本和宏 森山昭吉 和地サダ子

11 整理作業には、各年度上記の担当調査研究員があたり、平成 16 年度は主任調査研究員大竹憲昭があたった。また、遺物実測・トレス・編集作業には整理補助員 稲玉美紀、井原真弓、佐藤志津子、渡辺恵美子があたった。

12 本書の執筆・編集は主任調査研究員大竹憲昭が行い、調査部長市澤英利が校閲し、調査第 2 課長平林彰が校正した。

13 出土遺物・記録類は平成 17 (2005) 年 3 月現在、長野県埋蔵文化財センターで保管している。

凡例

- 1 遺物の報告番号は本文、挿表、実測図、分布図、写真のすべてに共通する。
- 2 掲載した実測図の縮尺は原則として下記のとおりである。また、それぞれの図版右下にスケールを付した。

構実測図

全体図 1 : 2,500 または 1 : 5,000 ブロック 1 : 40 または 1 : 80

土層断面図 1 : 60 または 1 : 120

遺物実測図

石器 2 : 3 大型石器については 1 : 3

- 3 石器実測図に付したキャプションの見方は以下のとおりである。

報告番号	1			
器種	Sc1	Ho(Ho1)	石材	(母岩番号)
出土遺構	BL2	386.19g	重量	
出土層位	4層	L172	注記番号	

- 4 石器実測図、挿表の器種・石材の略称は以下のとおりである。

器種

Sc1 : 1 群石器 (尖端を有するスクレイパー類)

Sc2 : 2 群石器 (厚手の刃部を有するスクレイパー類)

Dr : 3 群石器 (錐状の石器) ET : 4 群石器 (刃器) Ax : 斧形石器

Kn : ナイフ形石器 Ha : 敲石 TP : 有茎尖頭器

MF : 微細剥離痕のある剥片 An : 台石 Co : 石核

Fl : 剥片 Ch : 砕片

石材

Ho : ホルンフェルス Gr : 花崗岩 Sho : 珪質ホルンフェルス

ST : 珪質凝灰岩 GT : 緑色凝灰岩 Ob : 黒曜石

Sl : 石英岩 Ge : 下呂石

- 5 遺物の実測図で、発掘時における欠損(ガジリ)については、黒塗りにした。なお、風化が著しく稜線が磨耗している部分にはアミ掛けをした。また、主要剥離面以外のボジ面についてもアミ掛けをした。
- 6 本書で扱っている国家座標は、国土地理院の定める平面直角座標系の原点(長野県第Ⅷ系、X = 0,000, Y = 0,000)を基準としている。なお、この測地系は 2002 年以前の日本測地系(旧測地系)である。ただし、巻末の報告書抄録のみ、世界測地系に変換している。

目 次

扉
口絵
序
例言
凡例
目次

第1章	遺跡の位置と環境	
第1節	竹佐中原遺跡の位置	1
	1 竹佐中原遺跡の位置	
	2 竹佐中原遺跡の立地	
第2節	遺跡の歴史的環境	4
	1 周辺遺跡の分布	
	2 周辺の旧石器時代遺跡	
第2章	調査の経緯と方法	
第1節	国道474号（飯喬道路）建設と埋蔵文化財包蔵地の発掘調査	9
	1 調査原因となる工事の概要	
	2 長野県教育委員会による試掘調査	
	3 長野県埋蔵文化財センターによる発掘調査	
第2節	発掘調査の方法	15
	1 発掘調査の方法	
	2 記録と整理の方法	
第3節	調査の経過（調査日誌）	20
	1 平成12（2000）年度の調査	
	2 平成13（2001）年度の調査	
	3 平成14（2002）年度の調査	
	4 平成15（2003）年度の調査	
第3章	竹佐中原遺跡の形成	
第1節	遺跡の層序と古地形・古環境	24
	1 遺跡の層序	
	2 遺物の出土層位	
	3 年代推定および古地形・古環境復元のための自然科学分析	
	4 自然科学分析の成果から	

第2節	発見された石器群	30
1	A地点の石器群	
2	B地点の石器群	
3	地点外の石器	
第4章	竹佐中原遺跡の石器群	
第1節	石器の種類	40
1	A地点の石器群	
2	B地点の石器群	
3	地点外の石器	
第2節	石器製作技術	44
1	接合資料の観察	
2	剥片の属性	
3	石器製作技術の特徴	
第3節	A地点石器群の使用石材	46
第5章	成果と課題	74
1	竹佐中原遺跡A地点石器群の理解	
2	竹佐中原遺跡B地点石器群の理解	
3	竹佐中原遺跡における石器文化	
4	竹佐中原遺跡 旧石器時代石器文化の年代	
第6章	結語	77
石器属性データ		79
報告書抄録		

口絵カラー目次

P L 1	A地点1・2号ブロック出土石器	P L 9	竹佐中原遺跡A地点出土石器4
P L 2	竹佐中原遺跡の位置	P L 10	竹佐中原遺跡A地点出土石器5
P L 3	竹佐中原遺跡の地形と地点	P L 11	竹佐中原遺跡A地点出土石器6
P L 4	竹佐中原遺跡の層位と石器出土層準	P L 12	竹佐中原遺跡A地点出土石器7
P L 5	竹佐中原遺跡 石器の出土状況	P L 13	竹佐中原遺跡A地点出土石器8
P L 6	竹佐中原遺跡A地点出土石器1	P L 14	竹佐中原遺跡A地点出土石器9 竹佐中原遺跡A地点周辺部出土石器
P L 7	竹佐中原遺跡A地点出土石器2	P L 15	竹佐中原遺跡B地点ほか出土石器
P L 8	竹佐中原遺跡A地点出土石器3		

挿表目次

第1表	竹佐中原遺跡と周辺の遺跡(1).....	7	第5表	竹佐中原遺跡ホルンフェルス母岩別組成表	32
第2表	竹佐中原遺跡と周辺の遺跡(2).....	8	第6表	竹佐中原遺跡石器属性データ1.....	79
第3表	竹佐中原遺跡石器組成表.....	32	第7表	竹佐中原遺跡石器属性データ2.....	80
第4表	竹佐中原遺跡石材組成表.....	32			

挿 図 目 次

第1図 竹佐中原遺跡の位置・・・・・・・・・・・・・・・・ 1	第26図 竹佐中原遺跡A地点出土石器実測図4・・・・・・ 50
第2図 竹佐中原遺跡の位置（鳥瞰図）・・・・・・・・ 2	第27図 竹佐中原遺跡A地点出土石器実測図5・・・・・・ 51
第3図 竹佐中原遺跡全体図（1:2,500）・・・・・・・・ 3	第28図 竹佐中原遺跡A地点出土石器実測図6・・・・・・ 52
第4図 竹佐中原遺跡(331)と周辺の遺跡 （1:25,000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5	第29図 竹佐中原遺跡A地点出土石器実測図7・・・・・・ 53
第5図 平成9～11年度県教育委員会試掘調査 箇所（1:5,000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10	第30図 竹佐中原遺跡A地点出土石器実測図8・・・・・・ 54
第6図 平成12年度 調査範囲（1:5,000）・・・・・・ 10	第31図 竹佐中原遺跡A地点出土石器実測図9・・・・・・ 55
第7図 平成13年度 試掘調査範囲（1:5,000）・・・・ 11	第32図 竹佐中原遺跡A地点出土石器実測図10・・・・・・ 56
第8図 平成13年度 本調査範囲（1:5,000）・・・・・・ 11	第33図 竹佐中原遺跡A地点出土石器実測図11・・・・・・ 57
第9図 平成14年度 調査範囲（1:5,000）・・・・・・ 12	第34図 竹佐中原遺跡A地点出土石器実測図12・・・・・・ 58
第10図 平成15年度 調査範囲（1:5,000）・・・・・・ 12	第35図 竹佐中原遺跡A地点出土石器実測図13・・・・・・ 59
第11図 竹佐中原遺跡の地形区分図（1:5,000）・・・・ 16	第36図 竹佐中原遺跡A地点出土石器実測図14・・・・・・ 60
第12図 グリッドの呼称・・・・・・・・・・・・・・・・ 18	第37図 竹佐中原遺跡A地点出土石器実測図15・・・・・・ 61
第13図 竹佐中原遺跡グリッド配置図・・・・・・・・ 18	第38図 竹佐中原遺跡A地点出土石器実測図16・・・・・・ 62
第14図 竹佐中原遺跡 土層断面図1・・・・・・・・ 24	第39図 竹佐中原遺跡A地点出土石器実測図17・・・・・・ 63
第15図 竹佐中原遺跡 土層断面図2・・・・・・・・ 25	第40図 竹佐中原遺跡A地点出土石器実測図18・・・・・・ 64
第16図 竹佐中原遺跡 土層断面図3・・・・・・・・ 26	第41図 竹佐中原遺跡B地点出土石器実測図1・・・・・・ 65
第17図 竹佐中原遺跡A地点遺物分布図・・・・・・・・ 34	第42図 竹佐中原遺跡地外出土石器実測図1・・・・・・ 66
第18図 竹佐中原遺跡A地点遺物分布図・・・・・・・・ 35	第43図 竹佐中原遺跡地外出土石器実測図2・・・・・・ 67
第19図 竹佐中原遺跡A地点遺物分布図・・・・・・・・ 36	第44図 竹佐中原遺跡地外出土石器実測図3・・・・・・ 68
第20図 竹佐中原遺跡A地点接合資料分布図・・・・・・ 37	第45図 竹佐中原遺跡地外出土石器実測図4・・・・・・ 69
第21図 竹佐中原遺跡B地点遺物分布図・・・・・・・・ 38	第46図 竹佐中原遺跡A地点接合資料実測図1・・・・・・ 70
第22図 竹佐中原遺跡地点外遺物分布図・・・・・・・・ 39	第47図 竹佐中原遺跡A地点接合資料実測図2・・・・・・ 71
第23図 竹佐中原遺跡A地点出土石器実測図1・・・・ 47	第48図 竹佐中原遺跡A地点接合資料実測図3・・・・・・ 72
第24図 竹佐中原遺跡A地点出土石器実測図2・・・・ 48	第49図 竹佐中原遺跡A地点接合資料実測図4・・・・・・ 73
第25図 竹佐中原遺跡A地点出土石器実測図3・・・・ 49	第50図 竹佐中原遺跡A地点の主要石器・・・・・・・・ 75

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 竹佐中原遺跡の位置

1 竹佐中原遺跡の位置

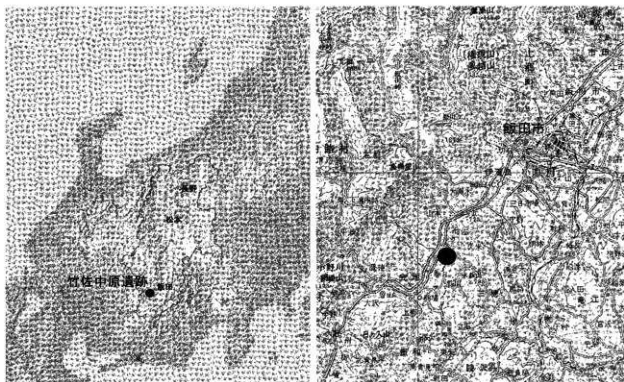
竹佐中原遺跡は、長野県飯田市竹佐 180-1 ほか地籍に位置する。北緯 35 度 27 分 56 秒、東経 137 度 45 分 40 秒。

長野県のほぼ中央部に位置する諏訪湖。ここに源を発する天竜川は、全長約 200 km、中央アルプス（木曾山脈）と南アルプス（赤石山脈）の西に連なる伊那山地の間を流れ、静岡県磐田郡で太平洋に注ぐ。その天竜川流域の谷盆地を伊那谷（伊那盆地）と呼んでいる。伊那谷は段丘と氾濫原・支流の扇状地からなり、南北の長さが約 60 km、幅が 4～10 km ほどある。

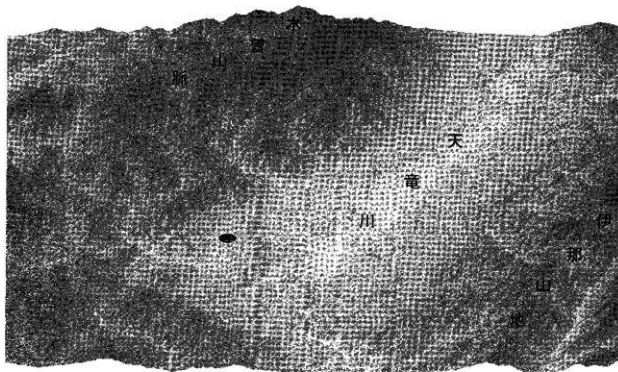
伊那谷の南端には飯田市が位置し、竹佐中原遺跡は天竜川右岸、飯田市街のある飯田盆地から南西方向 10 km ほどの郊外に位置する。市街から国道 153 号線で南西方向に向かうと右手には木曾山脈の主脈の前山の裾野が、左手には二ツ山という小山が迫る。その間の鞍部を通過すると前面には飯田盆地とは隔たった小盆地がひらける。町村合併により現在は飯田市に編入されているが、かつての山本村にあたる。この旧山本村域の東方には天竜川が南流しているが、直接面することなく、間には二ツ山・城山・水晶山といった小山が南北に連なり小盆地（阿智小盆地）を形成している。天竜川との標高差は 300 m 近くあり、竹佐中原遺跡の周辺一帯は、標高 600 m ほどもある高原状の地理的環境にある。

2 竹佐中原遺跡の立地

竹佐中原遺跡の西方には標高 1397 m の高鳥屋山（たかとやさん）があり、遺跡はその山麓部に発達し



第1図 竹佐中原遺跡の位置

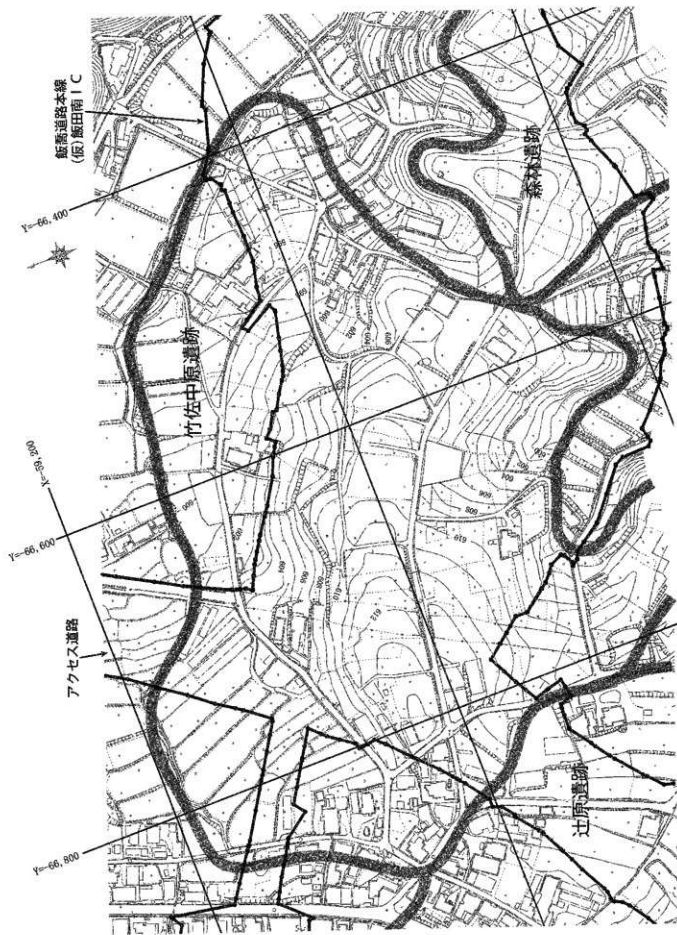


第2図 竹佐中原遺跡の位置（鳥瞰図）

た扇状地にあたる。遺跡のある小丘陵は、この地域で一番古く形成された扇状地で、はじめは一続きの平坦な扇状地であったが、その後の浸食により開析・分断され、東西に長い丘陵が形成された。竹佐中原遺跡はその丘陵のひとつに立地する。阿智小盆地の水系は西方山地を水源として南流し阿知川に入る阿知川水系と、二ツ山と城山の間をぬけて直接天電川に注ぐ久米川水系の二つがあるが、竹佐中原遺跡は阿知川水系に属する。ただ、遺跡の北隣の丘陵（石子原遺跡が所在）が先の2水系の分水嶺になっており、分水嶺周辺の遺跡として注意しておきたい。

遺跡の範囲は東西約500m、南北約350m、高位の丘陵平坦部とその北側にひろがる低位の平坦部の2段で構成されている。西から東へ傾斜しており高位平坦部の遺跡西端では標高613m、東端では607m、低位の平坦部では602m～590mである。

遺跡の中心にあたる丘陵上の調査前の現況は、宅地、畑地で一部に荒地もあった。現在の野菜を中心とした畑地も以前は桑畑が大半であったようである。遺跡の中心を横切る道路が拡張整備されたのが昭和45（1970）年度～48（1973）年度で、桑園造成改良事業と称され、農道1,652mの改修と転換造成4.15haという規模のものであった。事業対象地の図面が残念ながら入手できないので、転換造成をした正確な場所が特定できないが、地元の方の話によれば、今よりも凹凸の著しかった丘陵上の凸部分を周辺集落住民総出で人力により削平し、その土で北と南の谷もしくは傾斜地を埋め、丘陵上の平坦地の面積を広げたということであった。事業以前はやじりなどが採集されたそうであるが、現在は地表面で遺物を採集することが難しい。実際に発掘調査をしても、遺物が発見されるのはローム層まで達した攪乱層から出土することが間々あることもあわせ考えると、この昭和40年代の改良事業で、表土近くの遺物包含層の多くが削平されてしまったようである。



第3図 竹佐中原遺跡全体図 (1:2,500)

第2節 遺跡の歴史的環境

1 周辺遺跡の分布

第4図は、飯田市教育委員会作成の分布図である（飯田市教育委員会 1998）。図右上の飯田市街から、三ツ山と二ツ山の間をぬけた平坦部はほとんどが遺跡として登録されている。時代別にみると旧石器時代1、縄文時代44、弥生時代5、古墳時代5、古代3、中世以降7であり、圧倒的に縄文時代、とりわけ中期の遺跡が多い。また、平坦部を取り囲む山には山城が分布している。遺跡の分布密度は高い。しかしながら発掘調査が行われた遺跡は4遺跡で、実態は不明な部分が多い。旧石器時代の1ヶ所は昭和47（1972）年に中央自動車道建設に伴い新発見され、発掘調査された石子原遺跡である。旧石器時代の遺跡も未知の部分が多いといえるのである。現に本書で扱う竹佐中原遺跡（第4図331）にしても、市教委の台帳では縄文時代中期の遺跡として登録されていた。

竹佐中原遺跡の周囲の遺跡を地形との関係でみると、竹佐中原遺跡の位置する同じ丘陵上にある遺跡として、竹佐中原遺跡をはさんで北西側に辻原遺跡（312）南東側に森林遺跡（332）が並ぶ。この3遺跡は丘陵を北から南から刻むよう入るノッチによって区分されているので、丘陵平坦面では互いに接している（第3図参照）。これらの遺跡が並ぶ丘陵のひとつ北側の丘陵でも、同様に石子原遺跡（310）、並松遺跡（330）、杵原遺跡（326）、下り松遺跡（334）が並ぶ。竹佐中原遺跡の南側は、竹佐中原遺跡を谷頭として、一筋の沢が形成され、森林遺跡の南対岸に箱川原遺跡（333）、箱川原南遺跡（354）といった縄文時代中期として登録されている遺跡が並ぶ。以上のように丘陵の平坦面はほぼ全面的に遺跡の範囲内となるが、その実態は不明瞭な部分が多い。

2 周辺の旧石器時代遺跡

旧石器時代の遺跡についてみてみよう。昭和32（1957）年に刊行された『山本村誌』には「例えば、山本で縄文式文化が最初に開花したと考えられる大神原遺跡では、早期縄文式土器が存在しているのであるから、無土器文化への時間的つながりを考えたいのであり、強いていえば、地形的に高鳥屋山東南麓に展開した扇状地の西平・北平一帯を含めた地域に当時代の遺物発見も考えられないこともないであろう。」という記載がある。今回、旧石器が発見された竹佐中原（原平）や石子原（南平）は上記傍線の一角に当たり、この一帯に旧石器を出土するであろうことが、村誌の執筆者である宮沢領之氏によってすでに予見されていた。

昭和47（1972）年、中央自動車道建設に伴う発掘調査で発見された石子原遺跡の旧石器時代石器群は日本考古学界における「前期旧石器存否論争」の焦点となり、注目を集めた。その報告書では「前期旧石器末」という年代的な位置付けがなされ、数多い長野県の旧石器時代遺跡の中にあっても最古級の評価が与えられた（長野県教育委員会 1973）。

平成12（2000）年度から着手した飯喬道路建設に伴う発掘調査でも、石子原遺跡では黒耀石製のナイフ形石器が発掘され、旧石器時代でも複数の時期にわたる遺跡である可能性が強まった。竹佐中原遺跡に隣接する森林遺跡では平成14（2002）年度の調査でチャート製のナイフ形石器が、下り松遺跡からは縄文時代の住居跡の覆土や床下など出土状況は良好ではないが、竹佐中原遺跡と同種の石材が出土している。

調査は古く報告には触れられていないが、竹佐中原遺跡の南方に位置する箱川原遺跡でも、出土遺物の中に頁岩製の縦長剥片が含まれおり、旧石器の可能性がある。また、表面採集資料ではあるが、水晶山の



第4図 竹佐中原遺跡(331)と周辺の遺跡(1:25,000)

山頂(25)でも黒曜石製のナイフ形石器が発見されている(市橋 1995)。

以上、竹佐中原遺跡の周辺は、近年の調査等の成果を踏まえれば、旧石器時代の遺跡がかなり密集して存在する地帯であるといってもよいであろう。その時期は竹佐中原遺跡・石子原遺跡のように古相を示すような石器群から、それに後続する時期の石器群が断片的ではあるが広がりを見せている。竹佐中原遺跡の周辺は、現在までのところ旧石器時代遺跡が遺跡群としてとらえられる貴重な地域であることを注意しておきたい。

さらに周囲の旧石器時代遺跡に目をむけると、中央道建設に伴って発見されている例として、伊賀良大瀬木の大東遺跡では報告書の実測図から判断して台形石器が出土している。

阿智村智里の杉ヶ洞遺跡では、石刃2点、その他剥片さらに石核1点が表面採集されたとの記載があるが、詳細は不明である。石材については市橋(1995)によればホルンフェルス製とのことである。他に縄文時代中期の2号住居址から局部磨製石斧が出土している。実測図を見る限り刃部両面が丁寧に磨かれていて、縄文時代の打製石斧が磨耗したものとは違うようである。また、敲打調整の表現もないことから旧石器時代ナイフ形石器文化初頭の斧形石器の可能性も十分にあり注意しておく必要がある。

天竜川を遡り、上伊那郡飯島町七久保の針ヶ平1遺跡では、斧形石器を主体とする石器群が調査されている(飯島町教育委員会 1987)。石器群の総点数は800点弱で、1点のナイフ形石器(台形石器)と多数の斧形石器で構成され、遺物分布は環状ブロック群をなす。後期旧石器時代ナイフ形石器文化の初頭に位置付けられようか。

以上、伊那谷は旧石器時代の遺跡について今まであまり大きな発掘調査もなく、その様相が不明瞭であったが、上述のように、後期旧石器時代ナイフ形石器文化初頭の遺跡の存在が注目される。そのような地域であるから、竹佐中原遺跡や石子原遺跡のような後期旧石器時代の石器文化に先行しようかと考えられる石器文化が発見されるとも考えられる。

第2章 調査の経緯と方法

第1節 国道474号(飯橋道路)建設と埋蔵文化財包蔵地の発掘調査

1 調査原因となる工事の概要

三河(愛知県)、遠江(静岡県)、南信州(長野県)の3地域を結ぶ三遠南信自動車道は、長野県飯田市の中央自動車道を起点として静岡県引佐郡三ヶ日町の東名高速道路までを結ぶ延長約100kmの自動車専用道路として昭和62(1987)年に閣議決定し、平成元年から工区ごとに基本計画・整備計画が決定していった。長野県内は起点側から、飯橋道路・小川峠道路・青崩峠道路の3工区にわかれている。竹佐中原遺跡がかかわる飯橋道路の基本計画は平成2(1990)年に決定し、平成9(1997)年に整備計画が決定した。飯橋道路は中央自動車道飯田市山本地籍の(仮称、以下「仮」と略す)飯田南ジャンクションで分岐し、(仮)飯田南インター、(仮)天竜峡インターをへて、飯田市上久堅の(仮)飯田東インターまでの約15kmである。竹佐中原遺跡は(仮)飯田南インターチェンジの部分にあたる。この飯田南インターチェンジの出入口と一般国道153号への接続に総延長約1.4kmの新たなバイパス(以下アクセス道路と称す)が事業化され、このアクセス道路事業用地内にも埋蔵文化財発掘調査の対象となった。

2 長野県教育委員会による試掘調査(第5図)

長野県教育委員会は、基本計画の決定を受けて平成6(1994)年度に飯橋道路事業予定地内の遺跡を確認するため飯田市教育委員会の協力を得て踏査を実施したが、対象地は山林や荒廃した耕作地等が多く、遺跡の範囲等を確認するための試掘調査が必要であると判断された(長野県教育委員会2000)。

竹佐中原遺跡については、平成9(1997)年度から平成11(1999)年度までの間に、事業地の用地買収状況と調整しながら、耕作に影響のない冬期間に各年度3日間、トレンチによる試掘調査を行った。その結果、堅穴住居跡等を確認し、面的な本調査が必要な範囲もある程度把握されたが、未買収地もかなりあり、本調査と並行してさらなる試掘調査の必要性があると判断された(長野県教育委員会2000)。さらにインター出入口と国道153号線を結ぶアクセス道路の建設が浮上し、竹佐中原遺跡の調査対象範囲は県教育委員会が試掘を行わなかった西方にまで拡大した。アクセス道路の部分については、平成12(2000)年度以降に本調査を行う長野県埋蔵文化財センターにより並行して調査を行うことになった。奇しくも注目を呼んだ旧石器が出土した地点はこの未試掘のアクセス道路用地内であった。

3 長野県埋蔵文化財センターによる発掘調査

国土交通省と県教育委員会の協議の結果、飯橋道路建設にかかる埋蔵文化財の発掘調査については、財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが行うこととなり、平成11(1999)年度から開始され、平成16(2004)年度現在も続いている。初年度は(仮)天竜峡インター予定地の川路地区、川路大明神原遺跡から行われた。

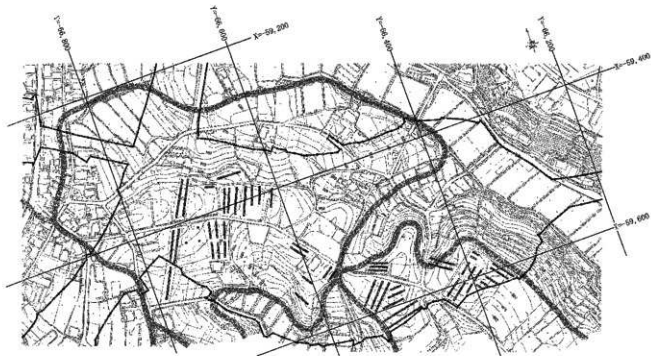
(1) 平成12(2000)年度(第6図)

前年からの継続の川路地区川路大明神原遺跡とともに新たに起点側の飯田市山本地区で石子原遺跡と竹佐中原遺跡の2遺跡の発掘調査を開始した。竹佐中原遺跡の発掘調査は、晩秋になって県教育委員会による試掘の補足と一面的に表土を剥いたが、土坑8基と若干の遺物が出土するにとどまった。

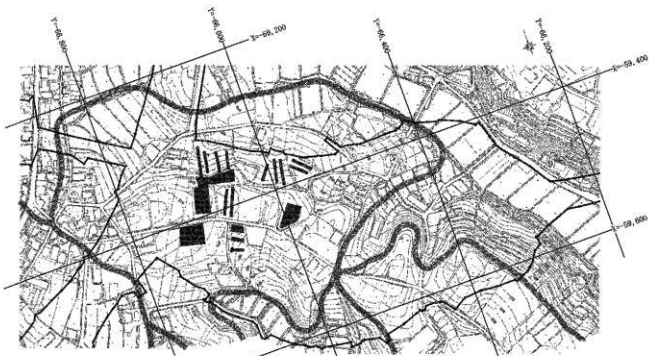
(2) 平成13（2001）年度（第7・8図）

川路地区では川路大明神原遺跡の調査が継続して行われた。一方山本地区は、事業用地内の遺跡が11ヶ所を数えるが、既存情報が少ないため、トレンチによる試掘調査を5月～7月にかけて8遺跡で行った（山本西平・辻原・赤羽原・山本大塚・並松・森林・竹佐中原・下り松遺跡）。

竹佐中原遺跡は7月4日より試掘調査に入り、7月27日にローム層上面より石器が出土した。その後



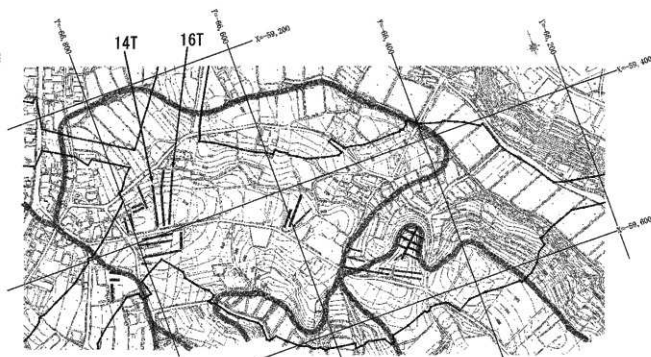
第5図 平成9～11年度県教育委員会試掘調査箇所（1：5,000）



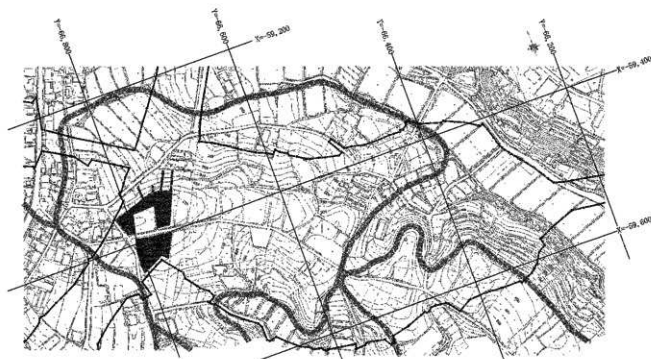
第6図 平成12年度 調査範囲（1：5,000）

半月のうちに20余点にまで増えた。この段階で、石器群が、従来の後期旧石器時代の特徴と違い、それを遡る可能性があるという所見から、遺跡の早期公開、調査指導委員会の設置を検討した。

8月24日に記者発表をしたところ、前年の11月に明らかになった「前・中期旧石器時代遺跡ねつ造事件」で旧石器時代遺跡が大きく社会的な関心事になっていたこともあって、新聞、テレビ各社が集まり、当日の夕方からテレビ報道、翌朝の新聞報道では、ローカル版のみならず、全国版でも取上げられたほどであ



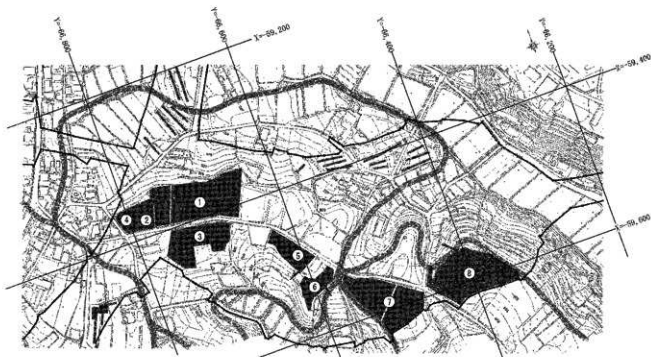
第7図 平成13年度 試掘調査範囲 (1:5,000)



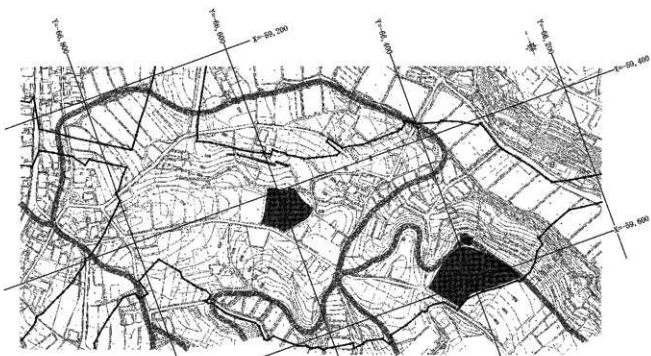
第8図 平成13年度 本調査範囲 (1:5,000)

った。8月26日の遺跡の公開（現地説明会）では、東京・名古屋方面からの参加もあり600名を超える方が見学に訪れた。

埋文センターとしては、遺跡の学術的な重要性、社会的な反響等を鑑み、遺跡調査の進め方の指導を受けるべく、竹佐中原遺跡調査指導委員会を設置し、9月7日ほか計4回の遺跡調査指導委員会を行い、調査方法、遺跡の地形・古環境、石器群の評価などを検討、指導を受けた。



第9図 平成14年度 調査範囲（1：5,000）



第10図 平成15年度 調査範囲（1：5,000）

竹佐中原遺跡調査指導委員会の構成は以下の通りである。

- 委員長 戸沢充剛（明治大学名誉教授）
 委員 松島信幸（飯田市美術博物館客員学芸委員）
 委員 神村 透（元中央道遺跡調査会石子原遺跡調査主任）
 委員 佐川正敏（東北学院大学教授）
 委員 佐藤宏之（東京大学助教授）

調査の具体的な方法は後節で触れるが、調査研究員、補助員を増強し調査態勢を整え調査に臨んだ。旧石器出土地点の調査は、当初確認された地点およびその周辺部を集中的に行い、点数は増加したが、新しい分布域の確認はできなかった。また、本遺跡は旧石器ねつ造問題が社会的にも大きな話題となっている中での調査であったため、マスコミその他各方面からの取材や見学が現地説明会後も続いた。土日の見学・取材希望にも極力対応したが、原則的に調査は休みのため、掲示板を現地に設置し対応した。また、遺跡を早期に公表できたことから、多数の旧石器を専門とする研究者に現地で石器が出土している状況を確認してもらった機会があった。

第8図の範囲は遺物集中部については4層下部～5層上部まで平面的に下げ遺物の確認をおこなった。その周辺部については4層をできるだけ広範囲に面的に下げて新たな集中部の検出を試みたが、先述のとおり、新たな集中部は発見されなかった。遺跡中央を走る道路の南部分については、重機を併用してさらに下層に石器群が確認されないか調査を行ったが、石器群は検出されなかった。

12月21日に本年度の発掘調査は終了した。

12月の末から年度末までは、遺物の注記や一部実測、写真・図面等の記録類の基礎的な整理作業を行った。

(3) 平成14(2002)年度(第9図)

本年度は山本地区の竹佐中原遺跡を中心に発掘調査が行われた。山本地区以外では、川路地区川路大明神原遺跡と山本一川路間の久米地区で試掘調査を行っただけである。竹佐中原遺跡以外の山本地区では、竹佐中原遺跡に隣接する辻原遺跡と森林遺跡の調査を行った(第9図⑦・⑧区が森林遺跡の面的調査を展開した範囲)。辻原遺跡では旧石器は発見されなかったが、森林遺跡ではナイフ形石器をはじめ、旧石器時代の所産と考えられる剥片などの遺物が確認された。いずれも集中部にはならない単発的な出土であった。森林遺跡⑧区で旧石器が確認されたのが晩秋であったため、本格的な旧石器面の調査は次年度に行うことにした。

竹佐中原遺跡の本年度の調査は、丘陵平坦部を広域に行った。第9図に示した①～⑥地区が本年度の面的調査地区である。調査に着手した順序に従い番号を付した。昨年度、石器集中部が確認された位置は①地区と②地区の間にあたる。

①地区では、遺物の集中部こそ発見できなかったが、後期旧石器時代ナイフ形石器文化初頭の所産と考えられる斧形石器などが単独で出土した。

②・④地区は昨年度2ヶ所のブロックが発見された調査区に接しており新たなブロック発見の期待があったが、単発的な遺物の出土にとどまった。

③地区では新たな石器群を検出した。それらは、昨年の調査地点から約70m南東に位置し、その間にほとんど遺物も検出されなかったため、地点という名称を用いることにした。したがって昨年(平成13(=2001)年度)石器が発見された場所をA地点、本年度新たに発見された地点をB地点とした。B地点では、10点の石器が発掘された。ここでは削器1点のほかは、剥片・破片であった。破片は、A地点ではほとんど発見されなかった。A地点とは異なる石器製作をしていたと推定される。さらに剥片・破片のなかに

①地区で出土した斧形石器と同種の石材が含まれていることから、B地点の石器群は①地区とほぼ同時期、後期旧石器時代ナイフ形石器文化初頭の所産と考えられる。

⑤・⑥地区は遺物包含層がすでに流出もしくは削平されていて遺構・遺物は検出されなかった。

本年度の調査により竹佐中原遺跡は、後期旧石器を遡る可能性が高いA地点の石器群と、後期旧石器時代の特徴をもつB地点や①地区から出土した斧形石器の石器群の二つが、ひとつの丘陵の上に隣り合って残されていたと考えられ、後期旧石器時代の開始を考える上で重要な資料であるということが明らかになってきた。

12月20日まで現地調査をし、今年度の発掘は終了。12月の末から年度末までは、遺物の注記、写真・図面等の記録類の基礎的な整理作業を行った。

(4) 平成15(2003)年度(第10回)

本年度の山本地区は竹佐中原遺跡以外では7遺跡(森林・下り松・白山・山本大塚・寺沢・赤羽原・久米ヶ城)、川路地区で川路大明神原遺跡の計8遺跡を調査した。下り松遺跡では縄文時代中期の住居跡等を、山本大塚遺跡では近世の遺構と遺物を調査したほかは試掘確認調査で終わった。

工事工程の関係から早期の引渡しの要請があったため、4～5月は森林遺跡の旧石器時代面の調査を集中的に行ったが、遺物の集中部は検出されなかった。結果、本年度も竹佐中原遺跡が発掘調査の主体となった。

竹佐中原遺跡には5月中旬から順次入っていった。旧石器時代の遺物については、昨年度までの調査で、本遺跡には少なくとも2時期の石器群が残されていると考えられる。本年度の調査では、石器集中部は確認されず、単発的な出土のみであったが、遺物の中に一昨年度集中部が確認されたA地点と同種の石材がみられた。A地点とは200mも離れており、台地上の広範囲にA地点類似の石器群が展開していたと考えられ注目される。2時期の石器群が、遺跡全体、さらに隣接する森林遺跡まで、断片的ではあるものの広域に展開していたものと推定される。

本遺跡の場合、遺物の包含層とその上下には、扇状地性の堆積物によってもたらされた自然礫が混入する。遺物が遺棄され、埋没する過程での自然礫との関わりを掌握することが重要と考え、礫の記録についても極力配慮して調査を行った。

発掘調査の方法は、昨年、一昨年の調査方法を踏まえながら、本遺跡にあった方法が確立され、それに従い発掘調査を進めていった。丘陵平坦面は面的調査、斜面部はトレンチ調査。平坦面は重機により表土除去後、縄文時代以降の遺構確認および精査。その後(実際には一部並行しながら)旧石器面の調査へ。調査方法は、表土剥ぎを行った範囲全体をジョレンにより、主たる遺物包含層である3層から4層の上面にかけて精査することにより、遺物集中部を面的に検出することを試みる。さらに8×8mの範囲に対し、2×2mのテストピットを原則8ヶ所入れた(50%)。また、昨年度の調査範囲に関しては下層(5層以下)の石器群を検出すべく重機を用いてトレンチを主とした調査を行った。今年度は10月23日に発掘調査を終了した。

遺跡指導委員会は、9月18・19日に遺跡の現地で開催したほか、冬季の3月2・3日には、指導委員のほか、関連分野を専門とする諸氏を招聘し、遺跡の年代推定や古環境復元を検討する自然科学分析結果検討会を長野市で行った。

第2節 発掘調査の方法

1 発掘調査の方法

(1) 試掘調査

竹佐中原遺跡は、飯田市教育委員会における遺跡地図では縄文時代中期の遺跡として登録、記載されているが、発掘調査はなかった。しかしながら、周辺遺跡の既存情報として石子原遺跡があるため、当然のことながら旧石器時代面の調査も当初より計画の中に組み込んだ。

竹佐中原遺跡はインターチェンジ予定地内の遺跡で、調査対象面積が広大であるため、トレンチによる試掘調査をまず行い、その結果により本調査範囲を決定していった。

試掘調査のトレンチは、人力もしくは重機で表土を除去することによって表層にあらわれたローム層上面で縄文時代以降の遺構検出作業を行い、特に遺構等が検出されなかった場合は旧石器時代の調査に移した。旧石器時代の遺物は石子原遺跡の状況からローム層に入ってすぐ出土するため、実際の調査では遺構検出作業の延長でジョレンによりローム層を10数センチ下げることで行っていった結果、竹佐中原遺跡において石器群の検出をみた。

(2) 平成13(2001)年度の本調査

試掘調査により石器群が検出された範囲を中心に本調査が計画された。発掘方法は以下のとおりである。

- ・遺物集中部を中心に南北24 m東西14 mの範囲に2 mメッシュのグリッドを設定。
- ・掘り下げは2 mメッシュグリッドをさらに4分割して、1 m四方を単位とする。
- ・掘り下げの深さは土層が変化すればそこで止めるが、変化が見られない場合は、5 cmまでを1単位とする。
- ・掘り下げは、市松模様に行う。土層の確認をしながら掘り下げることと、断面に遺物がかかれば、垂直方向からの観察ができる(掘り込みがあるかが確認できる。また、後世の埋め込みでないこともわかる)。
- ・水洗選別用の土壌採取は、遺物集中部の土壌についてはすべて、周辺部については、1 m四方×深さ5 cmにつき土嚢袋1袋とする。
- ・調査中に掘り出された自然礫は、すべて1 m四方×5 cmの単位一括で取上げる。大形礫については、敲石の可能性があるので、写真撮影、ナンバーリング、実測をして取上げる。

遺跡の中を、遺物集中部とその周辺部の調査方法を変えることは、従来からも行われてきている。遺跡全体を同じ精度で調査ができれば理想的であるが、現実的には不可能な場合が多い。となれば遺物集中部を重点的に調査すべきであろう。

(3) 平成14(2002)・15(2003)年度の本調査

調査対象地(遺跡範囲)は地形的に①丘陵平坦面、②丘陵平坦地と低地の間に展開する斜面、③低位平坦面、④低地と4区分され(第11図)、以下のように地形によって調査方法を変えた。

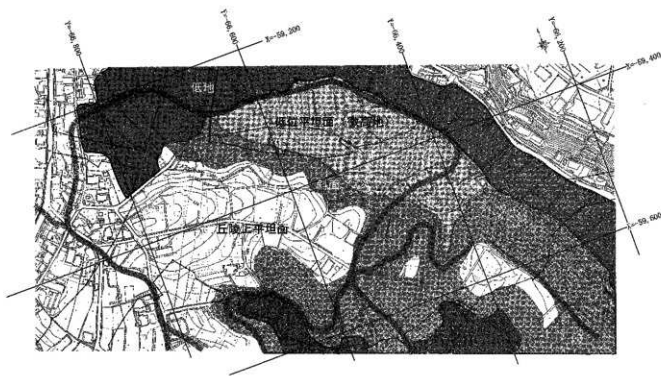
①丘陵平坦面は、重機による全面表土剥ぎ→縄文時代以降の遺構検出→遺構精査。引き続き旧石器時代面の調査。旧石器時代面の調査は概ね3段階(3工程)とする。第1段階:表土剥ぎを行った範囲全体をジョレンにより精査。第2段階:8×8 mに2×2 mのテストピットを4~8ヶ所入れる(25%~50%)。第3段階:重機による下層の石器群確認調査。

②斜面は、トレンチ調査を原則とする。トレンチ掘削は人力もしくは重機を用い、遺物・遺構の検出を行う。状況に応じ面的に拡張する。

第2節 発掘調査の方法

③低位平坦面および④低地は、前年一部試掘を行った結果、遺構・遺物は検出されなかった。その結果から予想して、トレンチ・テストピットによる地形・地質・古環境復元を主目的とした調査を行う。また、必要に応じて、低地部から丘陵上を横断するトレンチを入れる。

上記のいずれかの方法で遺物の集中部が検出された場合は、平成13年度の集中部調査方法を採用することにしたが、平成14年度に発見されたブロックは、小規模で散漫な分布であったため1mのメッシュは組まず、出土状況に応じた方法をとった。



第11図 竹佐中原遺跡の地形区分図(1:5,000)

(4) 自然礫の調査と記録

本遺跡の土層は、後段でふれるが、扇状地性の堆積物と降下火山灰が混ざり合って構成される。したがって、遺物の包含層とその上下には、扇状地性の堆積物によってもたらされた自然礫が混入する。竹佐中原遺跡の場合は遺物と自然礫の材質が違っていたため、その判別にはさほど苦労はしなかったが、遺物が遺棄され、埋没する過程での自然礫との関わりを掌握すること重要と考えた。

そもそも遺跡形成には人為と自然の2つの要素が関わっていると考えられる。遺物として用いられない自然礫の分布・配列は100%自然の営力によるものである。一方、人により遺跡に挿入され、使用、遺棄・廃棄された遺物の分布・配列は、遺棄・廃棄された時点までは人為であるが、その後の埋没過程や土中において、さまざまな自然の営力を受ける。このことから遺物の遺棄・廃棄当時の厳密な「原位置」を復元するためには、自然礫の分布と配列の特徴を把握し、遺物の分布・配列の状況からその特徴(変動)を差し引いてやればよいと考えられる。

このことは調査者であるわれわれは十分承知していることではあるが、限られた時間の中で自然の礫にまで十分な記録をとどめることは難しい。しかし、本石器群が関与すると考えられる日本における旧石器時代研究でもその起源を深める研究史をみると、石器群が石器なのか自然礫なのかが論争のひとつとなっている。竹佐中原遺跡の場合は先にも触れたように、石器と自然礫の判別には苦労しない。逆にこのような

遺跡でしっかりと遺物と自然礫のデータを残しておくことが重要であると考えた。遺物集中部においては遺物と大きさが変わらない礫については極力位置を記録することに努めた（実際には土がついたままでは遺物が礫か判断しかねたものもあった）。小礫や遺物の集中が見られない範囲ではグリッド単位で取上げ、石材と重量のデータを取った。

(5) 調査指導委員会の設置

より広く調査方法について見識を持つべきであり、また調査主体の偏った理解に陥らないために、遺跡の調査指導委員会を設置し、考古学・地質学と幅広く意見を聞くことの出来る環境を整備した。

(6) 遺跡の公開

竹佐中原遺跡では、成果の公表の方法に大きな配慮をはらった。それは、遺跡の早期公開である。調査中の遺跡は勿論すべて公開が原則であるが、ここで強調しておきたいのは積極的な公開である。調査初期の段階から遺跡を公表し、研究者のみならず一般市民の方々まで調査の過程から周知するというのである。1点目の石器発見から1ヵ月足らず、出土した石器の数は20点余、地層の年代や石器群の特徴などまだまだ不確定な要素がある中での遺跡の公表ではあった。しかしながら公表直後より多くの研究者の来跡があり、調査中の現地において、石器群の評価のみならず、調査の進め方にいたるまで、多岐にわたるご教示を得ることができた。調査の早い段階での意見交換は調査方法の修正をすることが可能で、大変有効であった。市民に向けた現地説明会も早い段階に行なったため、説明会の後も適宜見学にこられる方が多く、調査の推移も理解してもらえたのではないと思う。

2 記録と整理の方法

(1) 遺跡名称と遺跡記号

本書で報告する遺跡の名称と遺跡記号は下記のとおりである。遺物・写真他の記録類の注記などもすべてこれによる。

竹佐中原（たけさなかはら）遺跡 遺跡記号：I T N（アイティーエヌ）

(2) グリッドの設定と呼称法（第12図）

グリッドの設定にあたっては、国家座標を基準として大々地区・大地区・中地区・小地区の4段階に区分した。

大々地区：調査対象地区全体にかかるように200m×200mの区画を設定し、北西から南東方向にI・II・III……とローマ数字で表記した。

大地区：大々地区を40m×40mの25区画に分割し、北西から南東へAからYまでの大文字アルファベットを用いた。

中地区：大地区を8m×8mの25区画に分割し、北西から南東へ1から25の算用数字を用いた。

小地区：大地区を2m×2mの400区画に分割し、小地区とした。大地区の北西角を起点として東西軸上に西から東へAからTまでアルファベット、南北軸上に北から南へ01から20の数字を付して、両者の組み合わせで「A 01」のように小地区名とした。

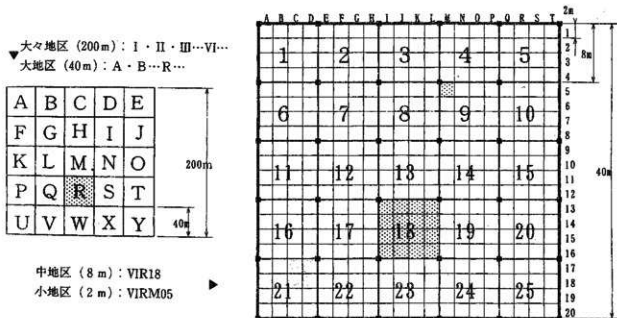
上記の呼称を組み合わせ、たとえば竹佐中原遺跡の大々地区「VI区」、大地区「R区」、中地区「18区」（8m×8m）は「VI-R 18」と表記される。また、大地区「R区」を小地区に分割した「M 05」（2m×2m）の場合は「VI-R M05」と表記される。

竹佐中原遺跡では「I区」から「XVII区」まで大々地区の設定を行った（第13図）。

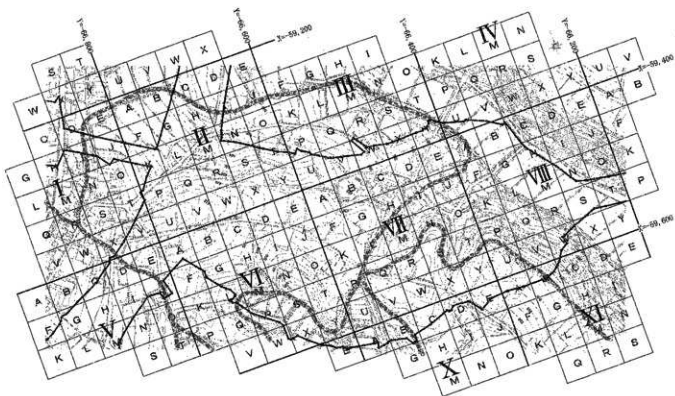
(3) 遺物の記録方法

遺物の記録については以下の方法をとった。

写真撮影はねつ造事件を教訓に、なるべく多くの写真を記録として残すことにした。個々の遺物についての写真撮影は、可能な限り以下の3カットを撮影する。①出土直後の写真（遺物が頭をのぞかせた時点での撮影）、②出土状況写真（遺物は取上げない）、③遺物取り上げ後の imprint の写真（口絵カラーPL5）の3種類である。ただしこの方法を徹底するには、実際の遺物発掘に携わる補助員に遺物が出土し



第12図 グリッドの呼称



第13図 竹佐中原遺跡グリッド配置図

た場合に原位置を動かさないように注意することである。遺物集中部は細心の注意を払って少しずつ調査を進めるが、竹べらや移植ゴテで掘っていても遺物があがってしまうことがある。この場合は無理には元に戻さず、出土位置は点で記録した。したがってすべての遺物について、3カットの記録写真がとれたわけではない。カメラは35mm一眼レフカメラで、リバーサルカラーおよびモノクロの2種類のフィルムで撮影することを原則とした。

また、ビデオやデジカメを用い適宜スナップ写真や映像を残した。

遺物の取上げに際しては、遺物の位置図は縮尺1/20のドット図および1/10の微細図を作成し、個々の遺物の出土層位、点=ドット(1/20)、石器の形状(1/10)を記録した。また、1/10の微細図の遺物の出土レベルは1点につき2ヶ所~4ヶ所測定し、遺物の傾きが把握できるように記録した。

上記の手書き図でなるべく多くの情報を盛り込む一方で、整理作業の効率化を図るため、トータルステーションによる単点測量を行い、デジタルデータとしても出土地点をおさえた。

遺物の取上げ番号は単点で位置の記録があるものについては、初年度から遺物の種類ごとに通し番号にした。遺物の種類は、土器類=P、石器・礫=L、炭化物=Cと記号化し、それぞれの番号の頭に付し、固有の遺物番号とした。したがって、遺物の注記に際しては、例えば、46の石器は「ITNL46」となる。

(4) 整理作業の方法

遺物の洗浄については、原則的に超音波洗浄機を用いた。洗浄時間は最低限にし、剥離の奥に残る土壌はあえて洗い落としていない。

番号を付けて取り上げた石器および礫は、器種判別、計測・観察をおこなった。石器についての計測・観察の結果は巻末の一覧表に示した。礫については、石材判別、重量を計測した。

石器の接合は母岩分類に従い、作業をおこなった。

石器の実測は、整理補助員があたり、トレース後スキャナーで読み込み、デジタルデータ化してある。遺跡全体図、遺構図、分布図等もCADソフト等を用い、デジタルデータで処理をした。



第3節 調査の経過（調査日誌）

平成12（2000）年度

11月30日 バックフォーにより、北東斜面部にNo1～4トレンチを開ける。

12月1日 補助員を入れ検出作業を開始する。

12月2日 C地区の面割ぎを実施する。

12月7日 測量会社による遺構測量。縄文時代の打製石斧が検出される。

12月8日 すべての調査を終了する。

平成13（2001）年度

7月3日 O1-O3Tを設定。山本大塚遺跡山本児童センター地区の調査と並行。

7月4日 O1T手掘り調査開始。表十より、石器、陶磁器、鉄製品？など若干出土。

7月10日 トレンチ調査継続、O1T完掘。

7月11日 トレンチ調査継続、O2T完掘。

7月12日 竹佐中原トレンチ調査継続、O3T完掘。トレンチから検出された土坑？はO1Tが2基。ともに浅く、土層のシミ状変色の可能性もある。O2Tからは4基。時期、性格など不明。O1～O3Tとも遺物は表土および攪乱から石千の石器・刺片・陶磁器片が出土するのみである。土坑のない場所でローム層を勘測により数センチほど下げるが遺物なし。

7月19日 竹佐中原：O4T～10T重機によるトレンチ掘削。遺跡調査対象範囲西南部より着手。遺跡中央を東西に走る市道を境とし、南側にO4T～O8Tの5本をいれ、北側にO9T・10Tの2本を入れる。10Tにおいて、住居跡検出、土器器およびカマド石が検出された。

7月23日 重機なし、人力によりトレンチ内精査、遺構検出作業。O4Tは土坑1基、浅く、遺物は陶磁器片。O5Tは遺構・遺物なし。O6Tは東寄りで土坑？（浅くシミ状のものあり）数基検出、遺物は陶磁器片。O7Tは遺構なし、遺物は陶磁器片。O8T遺構・遺物なし。

7月24日 未買収地の東に14Tを南北方向で設定、さらに東方の中津川線沿いの未買収地塊に15Tを設定、重機により掘削。14Tと15Tの間に16Tを設定、掘削開始。

7月25日 重機による16T続き。10Tで住居跡が確認されたことあるので、14Tと16Tの間を重機で面割ぎ、積査を行うことにする。

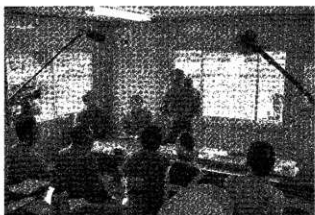
7月26日 重機により13-14トレンチ間と15-16間の面割ぎ。

7月27日 午前ついに旧石器出土。3点出土する。自然障も置入しているが、すべてを原位箇に残すことを指示する。調査補助員には、とにかく石器が出土しても取上げずにその場に残すことを再確認する。石器の出土数は増え、20点を越えた。

7月30日 旧石器出土を調査部・課長に報告。石器は14Tと16Tの間の部分に集中することから、ブロックになることは間違いない。

7月31日 小林部長、百瀬課長視察。出土石器の写真撮影を行う。



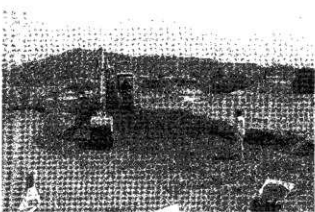
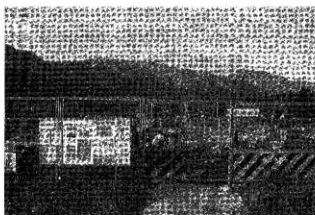


なるべく多くカットを残す。

- 8月1日 朝一番 飯田市教委の渋谷、下平、古川、坂井氏 見学。午後 小林係長来跡
- 8月3日 小円礫の記録と取り上げ、振り下げ、小円礫は出上するが顕著な石礫の出土はなし。
- 8月6日 野尻湖ナウマンゾウ博物館中村由克氏来跡。石材は中世代の堆積岩と思われる。
- 8月7日 国道工事事務所で調整会議 試掘結果について報告
- 8月8日 文化財、生涯学習課 配島調整幹、峰村(社教)2名が視察。9:00~9:30
- 8月17日 部・課長と打ち合わせ
- 8月21日 松島信幸氏・寺平宏氏地質指導
- 8月24日 記者発表。
- 8月26日 現地説明会 600名。
- 9月7日 第1回竹佐中原遺跡調査指導委員会開催。
- 9月17日 本日から補助員を増員。沼津市教委 池谷信之氏、香芝市教委 佐藤良二氏来跡。
- 9月21日 SBC取材 樋口昇一長野県文化財審議委員、桐原健長野原考古学会会長、小林達雄関西学院大学教授、岡村道雄文化財主任調査官、戸沢充朗明治大学教授、市教委 小林係長、県文化課 広瀬、小林部長、百瀬課長。日経新聞社
- 9月25日 発電機設置 小林係長 見学者 山梨から他2名
- 9月28日 午前NHK取材 L1261取り上げる。台石。
- 10月4日 第1ブロック、第2ブロックの遠景写真撮影
- 10月17日 飯田市美術館博物館村松氏に石材のご教示を受ける。
- 10月24日 第2回遺跡調査指導委員会
- 10月29日 見学者 一般 市内他 3名、市教委 下平、羽生氏、他1名
- 11月8日 松島信幸氏、寺平宏氏 地質調査指導。
- 11月9日 県高速道路局4名見学。
- 11月13日 AC09より礫石?花崗岩製出土する。ただ石器の周辺は土は暗褐色でモグラ穴のように思われる(No.1415)。ブロック近くのペルト除去、開始。出土遺物なし。
- 11月14日 礫石の精査(写真撮影、実測)。
- 11月15日 深掘り区の写真撮影。午後より4層の精査を面的調査区東壁沿いまで行う。南端より掘り始める。フェンス沿い2mを先行して掘り下げる。鋤鍬使用。
- 11月16日 調査区東壁側の掘り下げ。所長、部・課長視察。深掘り区の土層注記。
- 11月20日 明日が空襲の予定なので調査区東よりの部分を集中的に掘り下げる。
- 11月21日 空襲、ラジコンヘリで3回フライト。
- 11月30日 調査区北側の低地部に重機で試掘トレンチを3本入れる。県教委埋蔵文化財係半林彰指導主事視察。
- 12月4日 調査区東側、重機によるトレンチ深掘り開始。
- 12月5日 調査区東側トレンチ掘削継続。人力による精査(東壁)。
- 12月7日 松島信幸氏、寺平宏氏 深掘りトレンチの地層指導。
- 12月11日 山田しょう氏

第3節 調査の経過

- 12月18日 第3回遺跡調査指導委員会
12月19日 Aa07 西壁ほかで火山灰分析のためサンプリング。
平成14(2002)年度
4月11日 重機による表土剥ぎ開始。
4月16日 発掘開始式 小林部長 広瀬隊長。
4月18日 深掘区(2×2m)設定し、堀下げを午後より開始する。
4月23日 測量打ち合わせ
4月25日 重機 表土剥ぎ、補助員労働精査、深掘りセクション配飯。
5月7日 長友先生指導 光ルミネッセンス法 裏地サンプリング 放射線の蓄積量を調べるため、鋼パイプを埋め込む。4層、4層、5層、6層 計4本 3ヵ月後に抜いて送る。
5月8日 測量基準点の設営(アイシー)
5月22日 試掘グリッド精査開始する。II-V区で21ヶ所、II-V区で1ヶ所の計22ヶ所。毎日新聞の取材
5月28日 II-We01で緑色岩製の石斧山土。周囲も精査するが単独出土となりそう。清掃。写真。出土層位は3層か?やや茶色みかかる。縄文以降と考えるのか、3万年前の斧形石器の可能性もある。
5月29日 中央道環境対策協議会 視察45名
5月30日 下伊那教育会校長会で竹佐中原遺跡の成果について講演。
6月6日 文化庁巡回展に出品のため主要な遺物貸出
6月13日 NHK取材
6月24日 群馬県岩宿文化資料館職員見学17名。
6月25日 読売新聞片岡正人記者の取材。
7月9日 川上元氏ほか来跡。
7月18日 遺跡北麓低地部の重機によるトレンチ調査開始。
7月29日 遺跡北東部微高地部(低地平坦部)のトレンチ調査開始。
8月9日 本日より重機は新しい面地区5区の表土剥ぎに入る。
8月26日 6区にトレンチを1本入れる。松本で開催された第四紀学会2002年度大会の野外巡検で6名の研究者来跡
8月28日 斎藤基生氏来跡。
9月2日 6区北東隅の表土剥ぎ完了。引き続き隣の森林遺跡の表土剥ぎの準備に入る。
9月3日 中国科学院李超荣氏、同志社大学教授松藤和人氏、京都市理文中川和哉氏来跡。
9月10日 阿智川で石材採集。チャートも採取できた。
9月11日 第5回遺跡調査指導委員会
9月19日 昼前、黒曜石製の大形剥片が4層から出土する。かなり使っているようで、刃こぼれが著しい(4区南西隅)。
9月26日 4区 マス掘り 3区 B地点周辺部土層のセクションの検討を行う。7区 重機による表土剥ぎ
10月2日 昨年石器が出土した範囲の両壁断面の土層断面図記録開始(I-J土層断面)。
10月3日 松島信幸先生、土層のサンプリングに来跡。
10月4日 調査範囲測量、遺物単点測量、基準杭設営。
10月7日 京都文化博物館鈴木忠司氏、千葉文化財センター道





沢明氏、大阪府文化財協会 手島美香氏来跡。

10月13日下伊那教育委員会3名、松島伊幸氏はじめ地質の先生方来跡（信州大・酒井氏、熊井氏、富山大・小林氏、神戸大・近藤氏、お茶大・杉浦氏 他20名

10月17日 午前 下伊那地区小中校長OB会 10名見学 午後 樋口昇一氏 他1名見学

10月23日 5区トレンチの層対比較射。

10月31日 稲田幸司岡山大学教授、遺跡調査指導。

11月1日 市町村埋蔵文化財担当者発掘技術研修会を竹佐中原遺跡で行う。

11月15日 ⑥区土層セクション記録

11月25日 須田富士子氏来跡

12月1日 竹佐中原・森林遺跡現地説明会。

12月6日 柳田俊雄氏、山田晃弘氏、須田努氏来跡

12月9日 野尻湖ナウマンゾウ博物館中村由克氏より使用石材の産地をご教示。

12月20日 撤収 本年度調査終了。

平成15(2003)年度

4月8日 雨天の中、プレハブで開始式。本年度はまず森林遺跡から始める。

4月15日 基準点測量

4月22日 安藤政雄明治大学教授に指導を受ける。

5月12日 調査前に表土を削平された箇所を鋤機による積査。本年度の竹佐中原遺跡調査開始。

5月23日 森林遺跡の積査は終了。

5月28日 台地上平坦部の調査と併行して、遺跡北側斜面部のトレンチ調査開始。

5月30日 トレンチ調査終了。遺構なし。

6月9日 重機は午前1区の草除去、午後より表土剥ぎに入る。作業員は3区のマス掘りに全員入る。

6月12日 H14.1区 重機によるダム押し開始

7月15日 VE-AI-11 南壁4層上部から大形FL出土。L1535とする。写真撮影を行う。

7月17日 L1535 取り上げ クリ石

7月31日 北九州市中村修身氏来跡。

8月2日 山本小学校の夏の学校 遺跡発掘体験実施。

8月20日 マス掘り継続。4層より白色の石片が出土するが、遺物集中にはならない。遺物ではないようだが、出土位置は記録することにする。

8月20日 飯田市教育長来跡

9月4日 マス掘りで取上げた礫の水洗いを開始する。礫のインプリケーション（混濁れ）の方向性を把握する。

9月18日 第5回遺跡指導委員会。

9月29日 光ルミネッセンス分析のためのサンプリング、2地点で行う。

10月1日 H14-1区 西トレンチの分層、記録

10月8日 飯田国道事務所との会議（今年度の調査概要、調査箇所と掘部分、指導委の内容について、現地確認）

10月23日 撤収、調査終了。

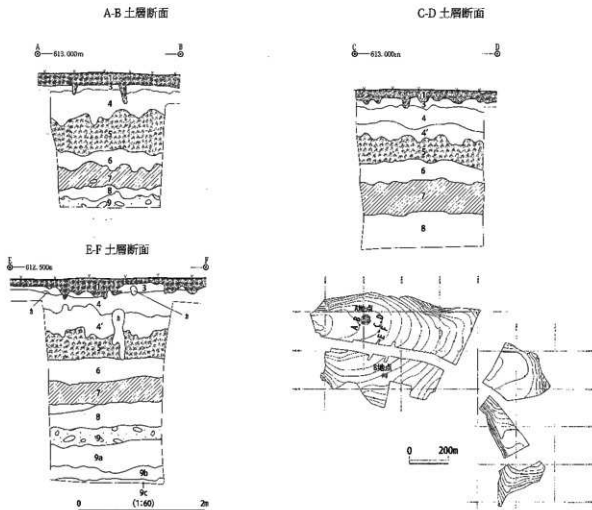
第3章 竹佐中原遺跡の形成

第1節 遺跡の層序と古地形・古環境

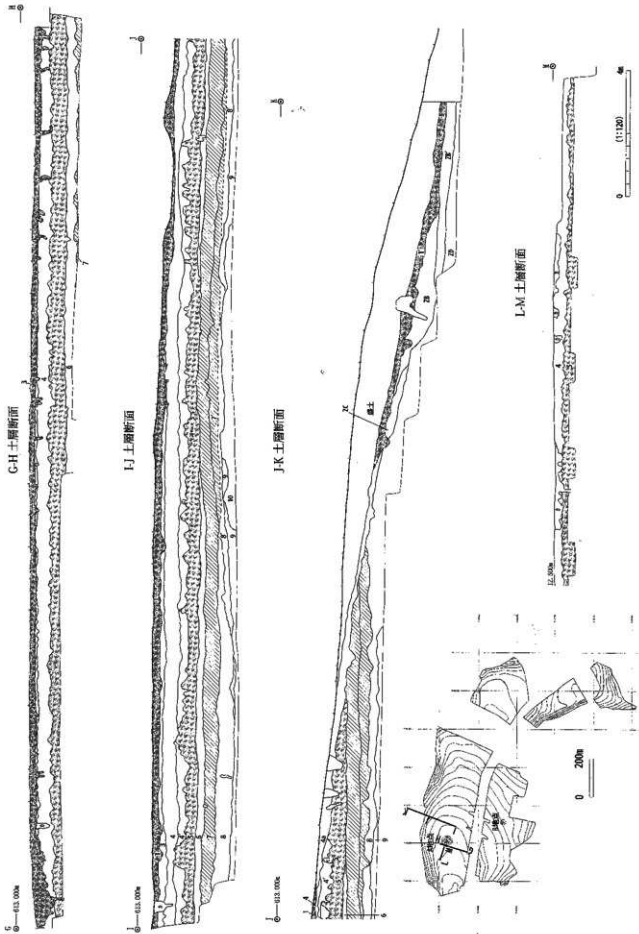
1 遺跡の層序

竹佐中原遺跡の層序を以下に示す。基本層序を決めた土層断面は、平成13(2001)年度に石器群を検出したすぐ近くの深掘り区(第14図A-B土層断面)であるが、前年に調査を行った石子原遺跡の土層と対比し層名を付した。

- 1層 現表土(耕作土) 黒褐色土。かなり褐色がかっているので3層(ローム層)をまきあげていると思われる。
- 2層 旧地表と考えられる黒褐色土。本遺跡では現在まで確認されていない。石子原遺跡の古墳墳丘下にのみ見られる。もともと土層の堆積が少ない本地域においては土地利用として畑地になると本層までが耕作によって攪拌されてしまったことを示していると考えられる。また、竹佐中原遺跡の丘陵平坦面では、昭和40年代に耕地を平坦にするため、かなり広範囲にわたり地形改変が行われたので、本層および下層の3層上部まで削平されたものと思われる。
- 3層 明褐色軟質ローム層(Hue 7.5YR5/6) 肉眼で観察できる含有物はほとんどない。4層に比べ



第14図 竹佐中原遺跡 土層断面図1



第15図 竹佐中原遺跡 土層断面図2

赤味を帯びるのが特徴。4層との分層は色調による、層が露出して数日経過すると赤味が増すのは酸化から来るものなのだろうか。層厚は厚いところで15cmほどあるところもあるが、分布の見られないところもあり安定しない。本来は下層の4層と同一層であったものから変化したとも考えられるが、層の形成等明確にはなっていない。

- 4層 黄褐色軟質ローム層 (Hue 10YR5/6) 含有物は3層と同じでほとんど観察できない。本層も3層と同様、露出し大気に触れると、やや赤味を帯びようになる。5層のブロックが若干飛んでいる(散見されている)。

なお、本層以下および上層の3層で用いる「ローム層」は、扇状地性の堆積物に御岳の火山灰が降り、風雨により混ざり合って形成されている。その割合は扇状地性堆積物のほうが火山灰より多い(松島信幸・寺平宏両氏の土層観察・分析結果から)。したがって扇状地性堆積物に含まれる砂礫を含んでおり、全体的に砂質である。

- 4'層 4層と5層の中間層。5層に近い4層。基調は4層であるが5層ブロックが多くなる。4層と5層の層界は派状帯になっているのでその派状帯の幅幅ととらえることもできる。遺跡の中でも東寄りで見られ、A地点よりも西側ではこの4'層はみられない(第14図A-B土層断面、第15図G-H土層断面、L-M土層断面)。

- 5層 黄褐色硬質ローム層 (Hue 10YR5/6) 白色の岩片 直径1~5mmが散見される(花崗岩の岩片)。4層との境は派状帯をなす。5層と6層は混入物の量、比率の差で分けた。また、遺跡東南部のR-S土層断面では5層を細分した(第16図)。

5a: 砂粒をあまり含まない。硬くしまっている。ただし、Rから14m付近から次第に砂粒が増え16m地点で5b層と区別できなくなる。

5b: 砂粒の含有度は5aと5cの中間程度。ただし、26m地点から南では5cと区別できなくなる。しまりは5aより劣る。

5c: 砂粒を多く含む。軟らかさ、もろさを感じるが基調は5層とみられるため細分層とした。

5b・cについては細かく観察すると砂粒の多い部分と少ない部分とが層厚5~10cm程度の小範囲(小単位)の互層をなしているようにみつけられる。砂多部分が下に、砂少部分がその上に堆積するというセット関係が窺えるものの、その広がりや重なり具合は複雑で分層することはできない。

- 6層 黄褐色硬質ローム層 (10YR5/6) 基本的には5層と同じ土であるが7層に顕著に見られる明赤褐色土がブロック状に入る。5層よりやや赤味を増す。5層と7層の間に挟まる中間的、漸移的な層と考えられる。したがって、明瞭に6層のみを分層することが出来ず、「6・7層」と層名を付し、5層と区分した地区もある(第16図R-S・S-T土層断面)。また、R-S土層断面では本層と上層の層との境界で御岳第1軽石(On-Pm1)を確認した(口絵カラーPL4)。

- 7層 7.5YR5/8(黄褐) 赤褐粒を含む明赤褐色土(Hue5YR5/8) > 10YR5/6(黄褐色土)の混ざり合った土。明赤褐色土の方が圧倒的に多い。固くしまっている。

粘性あり。白色含片の含有量も増加する。明赤褐色土と黄褐色土が斑紋状になる。明赤褐色土がマトリックスと考えられる。歪角礫を含むようになる。若干ではあるが人頭大の巨礫(花崗岩、砂岩ホルンフェルス)含むようになる。礫の風化は著しくカマで切れるほどである。

- 8層 黄褐色砂質壤土(10YR5/6)。7層と9層が混ざりあった土層。上層との層界はあまり明瞭ではない。歪角礫を多く含むが殆ど存在しない箇所もある。R-S土層断面では、上面に御岳上垂火山灰(On-Km)が点在する。本層の上面直上に乗っているのか上面直下に沈んでいるのか厳密

に判定するのは困難だが上面に半分ほど食い込んでいる場合が多いように見受けられる。確実に上面よりういているものは殆どないが、埋没している例はある(ただし、上面ラインに接している場合が多い)。

- 9層 明黄褐色砂質壤土(10YR6/6) 砂岩ホルンフェルス、花崗岩を含む砂質壤土。赤変した礫を含む。径10cmをこえる亜角礫も含むが平均的には5cm程度の亜角礫、花崗岩の風化 破砕片が目立つ。礫の混入量は様ではないので、砂礫層とは言えない。

2 遺物の出土層位

竹佐中原遺跡で遺物が確認できる層序は1層、3層、4層である。

1層の表土は陶磁器類を含め、各時期の所産と考えられる遺物を包含するが、遺跡と認定されているにもかかわらず、遺物量は少ない。地元の方の話では、かつては「やじり」などが拾えたという。恐らくは昭和40年代の地形改変の折に、主たる包含層が削平されたと思われる。3層上面を遺構検出面として、現在までに縄文時代中期、弥生時代後期、平安時代の住居跡が各1軒確認されているが、遺物が検出されるのは遺構覆土か攪乱内であることから、これらの時期の遺物包含層は消失していると考えられる。

3層から4層にかけて確認される遺物は石器類のみで土器片等を伴わない。これらは本来の旧石器時代の遺物包含層と考えられる。3層中からはナイフ形石器が、3層と4層の境界で斧形石器が検出されている。隣接する石子原遺跡や森林遺跡からも単発的な出土状況であるが、やはり3層からナイフ形石器が検出されている。このような状況から3層は旧石器時代ナイフ形石器文化(後期旧石器時代)の包含層であると考えられるが、遺物の集中部は現在までのところ確認されていない。また、石子原遺跡では縄文時代早期の押型土器がこの3層最上面から出土していることから、その最上部は一部縄文時代早期の包含層であるという位置付けも出来そうである。

竹佐中原遺跡では、3層下部から4層は上半部でまとまった石器群が検出されている。本書では、この石器群について現状を報告することに重きが置かれているので、詳細な出土状況等については後述するが、A地点およびB地点の2ヶ所の集中部をもつ石器群の主たる包含層は4層上半部である。表土からの深度もあまりなく、土層の堆積状態としては必ずしも良好な状況ではないため、層位的な上下関係として3層と4層の石器群を明瞭に区分できる状況にはないが、散発的にナイフ形石器などが出土する3層と、遺物集中部が確認された4層の石器群は内容的に異なる状況を示していることをここでは注意しておきたい。

3 年代推定および古地形・古環境復元のための自然科学分析の成果

竹佐中原遺跡から発見された旧石器時代の石器群の年代や当時の古環境を推定・復元するために以下の①～④の自然科学分析を行った。

- ① 放射性炭素年代測定(パレオ・ラボ)
- ② 火山灰分析(寺平 宏、パレオ・ラボ、古環境研究所)
- ③ 植物珪酸体分析(パレオ・ラボ、古環境研究所)
- ④ 光ルミネッセンス年代測定(古環境研究所)

(1) 放射性炭素年代測定

平成13(2001)年度に調査を行ったA地点の遺物集中範囲およびその周辺部にみられた炭化物粒子8

点を AMS 法により測定した。採取した炭化物粒子は、特に集中部はみられず、調査中に注意された比較的大粒のものである。また検出層位も石器群と同じ 4 層である。分析の結果、Libby Age(yrBP) で 8,500 年前後が 2 点、4,600 年前後が 5 点、江戸時代と出たものが 1 点であった。暦年較正值では calBC7,500 年前後、calBC3,500 年前後、calAD1,650 年になり、いずれも、縄文時代以降の年代を示しており、先に記述した遺物包含層の理解（4 層は旧石器時代の包含層）とは一致しない。

(2) 火山灰分析

旧石器時代の遺物が包含される 3～4 層の年代を推定するために地質調査、テフラ組成分析、テフラ検出分析、屈折率測定、EPMA による火山ガラスの主成分化学組成分析を行った。平成 13（2001）年度は寺平宏氏に A-B 断面他 2 地点、パレオ・ラボに A-B 断面他 2 地点を、平成 14（2002）年度には古環境研究所に E-F 断面他 4 地点の 1 層～8 層にかけて分析を行った。3 者（機関）の分析結果はほぼ同じになった。以下に検出された広域テフラとその層準を示す。なお、広域火山灰の年代は Libby Age(yrBP) による。

- ・ 1・3 層で鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah, 6,300 年前) が検出されたが、検出されない地点もあり、遺跡全体に安定的に残っているようではない。
 - ・ 始良・丹沢火山灰 (AT, 25,000 年前) は 3 層から 4 層 (4 層上半) 4' 層 (4 層下半) で検出されたが、微量で、降灰層準を確定するのは困難な状況である。
 - ・ 阿蘇 4 火山灰 (Aso-4, 約 8.4～8.9 万年前) は微量だが 5 層で確認されている。
 - ・ 鬼界葛原テフラ (K-Tz, 約 9～9.5 万年前) も微量だが 5 層で確認されている。
 - ・ 御岳第 1 軽石 (On-Pm1, 約 9.5 万年前) は R-S 土層断面の 5c 層と 6・7 層との層界でブロック状に検出された。
 - ・ 御岳上垂テフラ (On-Km) は R-S 土層断面の 6・7 層と 8 層との層界でブロック状に検出された。
- 御岳上垂テフラや御岳第 1 軽石はブロック状に検出されていることから、当該層が降下年代に近いと考えられる。しかしながら、5 層より上位で発見された広域テフラは確かに下層から上層にかけて相対的には新しい年代になるが、降灰層準を認定できるほどのピークは認められない。

また、現段階においては、竹佐中原遺跡の発掘調査により検出された今回分析の対象となった石器は、AT の降灰層準を示唆するような火山ガラスの出現ピークよりは下位にあるものの、その火山ガラスをわずかながらも含む土層中から検出されているように思われる。というのが寺平氏、パレオ・ラボ、古環境研究所の各分析者（機関）の共通したコメントである。

(3) 植物珪酸体分析

竹佐中原遺跡では、イネ科・タケ亜科が検出され、分析された。メダケ属は温暖、クマザサ属は寒冷の指標として、遺跡の層位ごとの寒暖の変化は以下のとおり。

6 層：温暖？

5 層：比較的温暖、積雪の少ない乾燥した気候

4 層：5 層よりもやや寒冷な気候。ただ、寒冷の指標となるメダケ率 50% 以下になるような試料はとらえられなかった。

3 層：温暖、イネが検出される＝後代の農耕による土層攪乱か

始良・丹沢火山灰 (AT) の降灰 (2.5 万年前、最近の研究では 2.9 万年前) 後、2 万年頃頃に寒冷期を迎える (=酸素同位体ステージ 2)。いままで分析を行ってきた他の遺跡ではメダケ率が減少もしくは 0 に近い値になり、寒冷のピークをとらえることが出来たが、この竹佐中原遺跡では読み取ることが出来なかった。2 万年前の寒冷期がとらえられないことは、相当する地層が欠落している、もしくは土壌が著

しく攪乱されているためと考えられる。という報告をもらっている。

(4) 光ルミネッセンス年代測定

現在までの暫定的な測定結果として、2002年度の採取したE-F土層断面の4層から6層にかけてのルミネッセンス年代に関しては、2004年3月の「竹佐中原遺跡自然科学分析結果検討会」において、今後の検討が必要であるとしながらも17ka～55kaの暫定的な値が示された。

2003年度に採取したI-J土層断面の4層から7層にかけての再測定の結果及び同H15-3区の5層、7層の測定結果も現在までのところ、上記の暫定値と矛盾がみられない。

しかしながら、竹佐中原遺跡の遺物包含層の年代に関して、現時点では最終的な結論を得ていない。暫定的な年代値は考古学的な見解ならびに広域テフラの検出された土層とも必ずしも整合しないように見える。遺跡における堆積層の形成が単純ではない可能性も考えられ、今後は地形学的な検討を加えながら、年代推定に有効な遺跡周辺の堆積層及びテフラ層の年代などを手がかりに慎重に遺物包含層の年代を検討していくことが必要であると思われる。また、適当な有機物試料があれば、AMS加速器質量分析法による放射性炭素年代法の測定限界を超えるかどうかということも年代推定の手がかりになるであろう。という見解が示されている。

(5) 自然科学分析の成果から

4つの自然科学分析はすべてが最終的な結果が出たわけではないが、石器の主たる包含層である4層の各分析結果には齟齬をきたしている。放射性炭素年代は縄文時代遺構の年代を示しているのに対し他の方法の結果では4層が1万年を遡る年代が与えられそうであるという点は共通するが、広域テフラの年代推定値と光ルミネッセンス年代測定値とも一致はみない。土壌の堆積環境が影響しているようで、本遺跡の場合、それぞれの分析値だけでは年代を決定するのは困難なようである。今後、遺跡の地形形成や堆積環境をさらに検討し、上記の年代値と比較検討する事が必要であると思われる。

第2節 発見された石器群

平成13年度の旧石器発見から平成15年度までの間に、石器および石器の可能性のあるもの、もしくは石器群とかわかりがあると推定された礫など、番号を付して出土地点・出土層位を記録して取り上げたものは1551点になる。その大半は自然礫が占めるが、整理作業を通して検討した結果、旧石器時代の石器として分析の対象となったものは77点である。

1 A地点の石器群(第17図～第20図)

A地点は竹佐中原遺跡の丘陵平坦部の中でも西寄りに位置する。平成13年に発見され、注目されることとなった石器群である。発見当初は地点の呼称は用いなかったが、次年度以降に本石器群とは距離をおいて新たな石器の分布域を確認したためそれらと判別するために地点名を後から付した。

A地点からは56点の石器が発見された。それらは2ヶ所のブロック(遺物集中)に分かれる。内訳は1号ブロックが21点、2号ブロックが34点、ブロック外が1点である。この56点のうち台石の2点を除いた54点の石材はホルンフェルスである。2つのブロックの周辺部からも数点の石器が検出されたが、ホルンフェルス以外の石材やホルンフェルスであっても石器表面の風化の度合いが著しく違うものは除外した。一方、報告番号38はブロックの範囲からは離れるがブロックで使われている石材と同じであるためA地点に含めた。

以下、ブロックの特徴を記載するが、第3表以下の各種組成表および本文中に出てくる石器の器種名の一部について本書では1～4群の暫定的な呼称を用いた。1・2群がスクレーパー的な石器、3群が錐状の石器、4群が刃器である。また、ホルンフェルスを風化面での観察であるが、色調、粒子の粗さでHo1～Ho3まで分けた。これら石器の器種分類の考え方、母岩の特徴についての詳細は後章を参照いただきたい。

(1) 1号ブロック

3.2 × 4.8 mの範囲に21点が分布するブロックである。遺物の出土層位は3層が1点(台石)のほかは4層である。出土レベルは612.097 m～612.308 mの範囲で、約21cmのレベル差をもって出土した。

石器組成は、1群、2群、3群石器が各1点、4群石器が2点、台石1点、石核1点、剥片11点、砕片2点である。母岩別の組成をみると、Ho1が14点で主体となる。Ho3は5点あるが、ブロック外縁部から出土した剥片45のほかは、すべて利器であった。45も剥片には分類したが、剥片の両側縁には大きな剥離面があり、横断面台形となる。剥片剥離の際のはじけと判断したため剥片になったが、判別には微妙な1点である。

なお、第18図に遺物分布図(微細図)を示した。また、第19図には石器の傾きを示した。今回遺物の記録に際しては出土レベルを個々の石器について複数箇所測量した。結果、遺物の傾きをとらえることができた。矢印の方向は矢印頭部が高く、尾部が低い状況を示している。さまざまな方向を向いており、ある一定の方向に流されたことはなかったと思われる。

(2) 2号ブロック

直径4mの範囲に33点が分布し、その西方2mに1点(9)のみが離れて分布する計34点のブロックである。遺物の出土層位は3層が1点、4層中の攪乱(モグラ等の小動物等により地層が攪乱され汚れている。)が2点、ほか31点は4層である。出土レベルは612.103 m～612.363 mの範囲で、約26cmのレベル差をもって出土した。

石器組成は、1群石器が1点、2群石器が2点、3群石器が1点、4群石器が5点、微細剥離痕のある剥片4点、台石1点、剥片16点、砕片3点であり、主要石器の組成は1号ブロックと同じである。母岩別の組成では、Ho1とともに1号ブロックでは1点しかみられなかったHo2が数多くみられる点が対照的である。Ho3は1号ブロックと同じ状況で、利器1点と剥片1点であるが、その剥片が1号ブロックと同様の特徴をもつ断面台形の剥片であることは示唆的である。

1号ブロックと接合資料を共有する。母岩はHo1で2例であった。接合資料No.6と7であるが、剥離順序で時間的前後関係をみると、接合資料No.6は2号ブロック→1号ブロック、一方合資料No.7は1号ブロック→2号ブロックとなる。1号ブロックと2号ブロックは共存し、遺物も共有していたと考えられよう。

2 B地点の石器群(第21図)

2002年度は、丘陵平坦部を広域に調査し、A地点石器群と同一層車で、新たな石器群を検出した。A地点の南東約70mで検出されたB地点は、10点の石器が検出され、散漫な分布ではあるがブロックとして認定できる。

(1) 3号ブロック

5.6 × 4 mの範囲に10点が分布するブロックである。

珪質凝灰岩製の微細剥離痕のある剥片1点ほかは、剥片・砕片であった。砕片が主体を占める点、碎

第2節 発見された石器群

地点	遺構番号	微細剥離痕のある剥片										合計					
		1群石器	2群石器	3群石器	3群破片	4群石器	4群破片	斧形石器	ナイフ形石器	有茎尖頭器	台石		敲石	石核	剥片	破片	
A	1号ブロック	1	1	1		2	1					1		1	11	2	21
	2号ブロック	1	2	1	1	5					4	1			16	3	34
	ブロック外														1		1
B	3号ブロック										1				4	5	10
地点外	単独出土						1	2	1	2		1			3	1	11

第3表 竹佐中原遺跡石器組成表

地点	遺構番号	ホルンフェルス	珪質ホルンフェルス	花崗岩	珪質凝灰岩	緑色凝灰岩	黒曜石	石英岩	下呂石	合計
A	1号ブロック	20 1172.53		1 1225.3						21 2397.82
	2号ブロック	33 2371.28	1 4950							34 7321.28
	ブロック外	1 14.22								1 14.22
B	3号ブロック	2 4.59			5 18.82	3 20.2				10 43.61
地点外	単独出土	3 416.16		1 437.6		4 391.6	1 30.45	1 6.03	1 5.41	11 1287.25

第4表 竹佐中原遺跡石材組成表（上：点数、下：重量g）

地点	遺構番号	Ho1	Ho2	Ho3	合計
A	1号ブロック	14 940.56	1 3.56	5 228.41	20 1172.53
	2号ブロック	12 1306.62	19 719.72	2 344.94	33 2371.28
	ブロック外		1 14.22		1 14.22
地点外	単独出土			2 396.89	2 396.89

第5表 竹佐中原遺跡ホルンフェルス母岩別組成表（上：点数、下：重量g）

片をほとんどもたないA地点の石器群とその内容が異なる。また使用されている石材も珪質凝灰岩、緑色岩で、A地点の石材とは大きく異なる。

3 地点外の石器（第22図）

A・B両地点のほかにも、単独出土した石器がある。斧形石器やナイフ形石器、黒曜石製の微細剥離痕のある剥片、A地点と同じ石材の剥片類である。

63のナイフ形石器はA地点のブロックに比較的近い位置から出土したが、出土層位が3層で、A地点ブロックの出土レベルと比べてももっとも高いレベルからさらに10cm強上であった。石材もホルンフェルスではあるが、風化の度合い、緻密な粒子はA地点のホルンフェルスとはかなり違うので分離し、地点外とした。

64の敲石はA地点2号ブロックの南約10mの位置から出土した。出土層位は4層攪乱である。ブロックの周辺部精査中に発見されたが、周囲から遺物の出土はなく単独出土である。61.113mとA地点出土石器群の出土レベル内に入る。石器検出時、周囲の土がシミ状にやや暗かった。ピット状の遺構も想定して石器を中心に四分法により断ち割り、周囲の土の変化も検討したところ、石器の東側に蛇行する帯状のシミが確認され、断続的に石器の出土位置までつながると判断された。石器の下もピット状にはならなかった。結果、このシミの正体はモグラ穴による攪乱であり、縄文時代以降の遺構である可能性は極めて少ないと判断した。しかし、この石器がA地点の石器群と直接関係するか、出土状況からは何ともいえない。

65の斧形石器はA地点の東方50mの位置から単独出土した。丘陵平坦面と北側斜面との地形変換点にあたる。表土除去後の遺構検出時に発見される（PL15）。その特徴から旧石器時代ナイフ形石器文化の前半期の所産と考えられる。また、B地点の緑色岩とは酷似しており、ほぼ同時期であった可能性が高い。

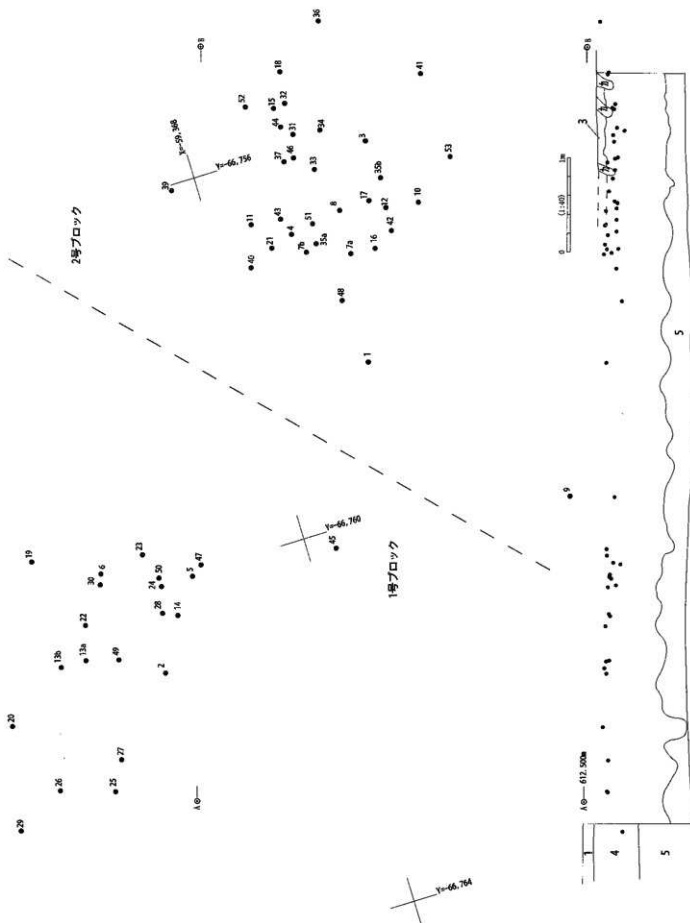
66の黒曜石製微細剥離痕のある剥片も単独出土である。黒曜石は現知見では、3万数千年前以降になって安定して使用されるようになる。このことから、この黒曜石の石器もナイフ形石器文化以降の所産と考えられる。

67・68はA地点から東に200m近く離れてそれぞれ単独出土している。2点ともに4層上面からは数cm以上の深さで出土しており、本来のブロックが削平されたとは考えにくい。単独で遺存する遺物のあり方に注意しておきたい。ホルンフェルス製で母岩別ではHo3に分けられる。

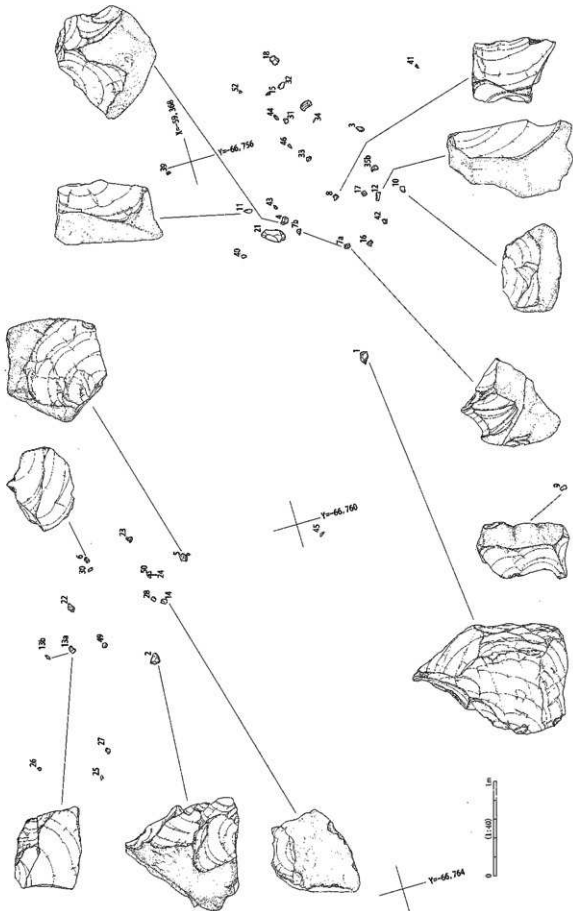
69は遺跡北西部で検出された平安時代の住居跡SBO1の覆土から出土した。石材がホルンフェルスであることなどから、旧石器時代の所産であると認定した。

73のナイフ形石器は4層最上部で、74の有茎尖頭器は攪乱層からのそれぞれ単独出土である。

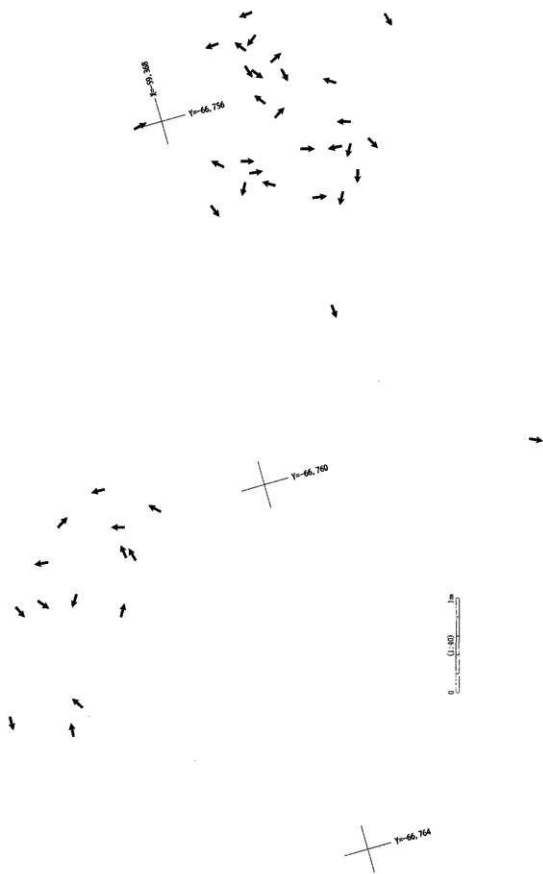
第2節 発見された石器群



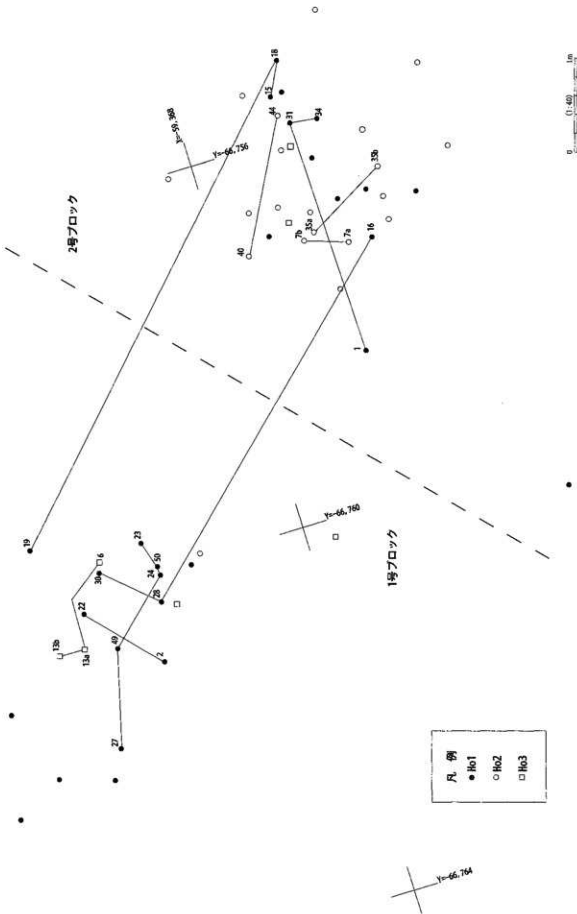
第 17 図 竹佐中原遺跡 A 地点遺物分布図



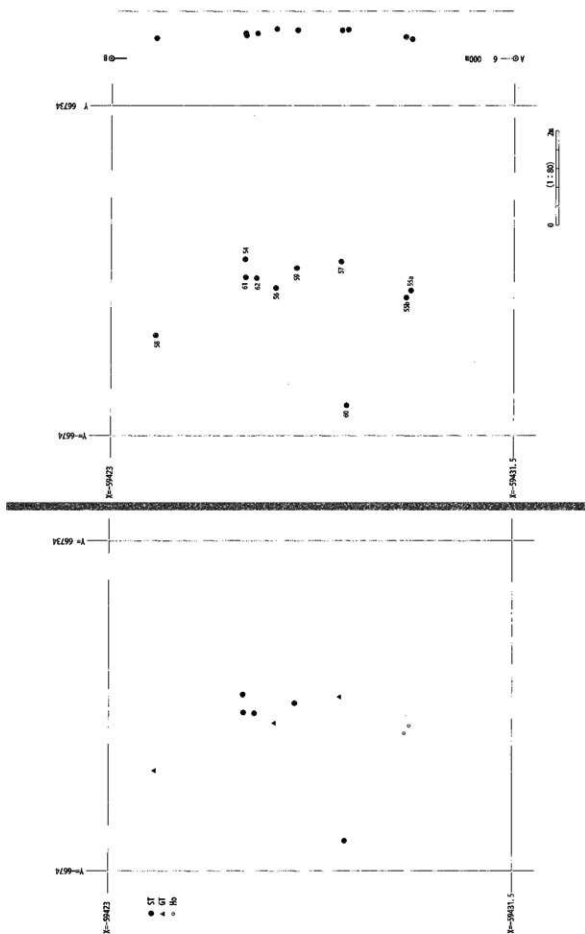
第18図 竹佐中原遺跡A地点遺物分布図(微細図)



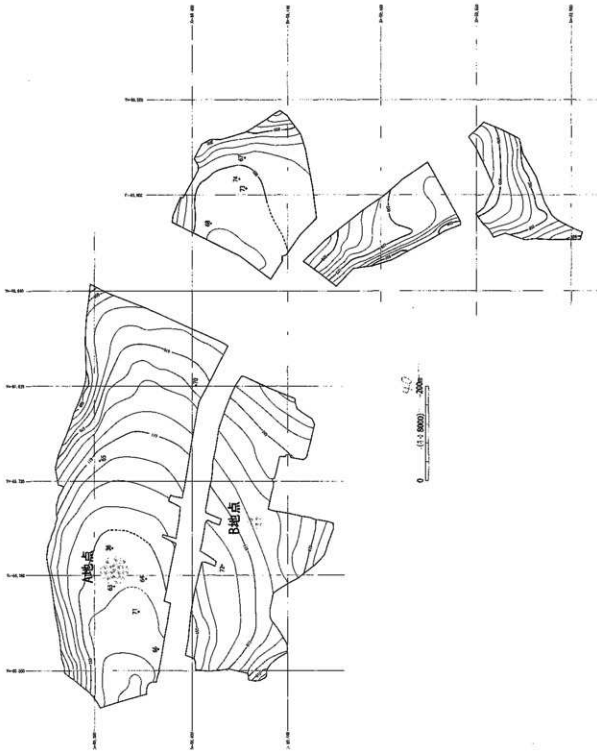
第19図 竹佐中原遺跡A地点遺物分布図(石器の傾き)



第20図 竹佐中原遺跡 A 地点接合資料分布図



第21図 竹佐中原遺跡B地点遺物分布図



第 22 图 竹佐中原遺跡 地点外遺物分布図

第4章 竹佐中原遺跡の石器群

第1節 石器の種類

本節では、竹佐中原遺跡から出土した石器群を分類した基準ならびに観察所見を記述する。ついで、石器を記載する上での記述上の呼称をあらかじめ断っておく。

- 1 石器実測図の各所に見られる特徴を記載する場合、報告書に掲載している図の展開面で呼称する（正面、裏面、右側面、上面等）。
- 2 石器のさらに詳細な箇所については、正面図を基準とし、そこでの上下左右位置を記載する（上端、上半、右側縁等）。
- 3 剥片石器の二次加工、微細剥離については、主要剥離面側から背面側に剥離された場合を正方向、逆に背面側から主要剥離面側に剥離された場合を反方向と記述する。

1. A地点の石器群（第23図1～第40図53）

A地点の石器群について一部の石器に対し本書では暫定的に1～4群に分類し呼称する。第1群「尖端を有するスクレイパー（削器状の石器）」、第2群「厚手の刃部を有するスクレイパー（打割器）」、第3群「鉋状の石器」、第4群「刃器」の4種である。現在、日本旧石器時代研究の中で石器の名称は、素材から一定の製作方法をとって形作られた形態に対して多くが与えられてきた。ナイフ形石器、台形石器、槍先形尖頭器などである。そのような中において本石器群は石器の機能部と考えられる刃部を作出する加工はある程度施すものの、石器の形態を整える加工は顕著にはみられない。それらは不定形石器であるとか、スクレイパーとして括られたものもあった。特にスクレイパーについては素材や形状が特徴的なまどまりを持つ一部について搔器や削器の器種名を付してきた一方で、搔器と削器の区分に迷う資料が多いこともわれわれは経験してきている。本石器群はその従来やや不明確であったスクレイパーの範疇に入る石器が特徴をなすと考えられる。さらにこのスクレイパーの一部定義を超えそうな器種にいたるまでがグループを成すと考え、本書では暫定的に4群に区分した。

(1) 第1群石器／尖端を有するスクレイパー類（1・2）

2点出土。粗く打ち割られた剥片の尖った角部の周辺に刃こぼれ状の微細剥離がみられる。これらは尖った部分の周囲を刃先として使った＝スクレイパー類であったと推定している。顕著な二次加工はみられないが、同じ箇所に同種の微細剥離痕が認められることから石器として認定した。

1は大形で剥片端部が扇状に広がる部厚い横長剥片を素材としている。正面図上端の尖った縁部の周辺に微細剥離痕が認められる。左側縁には間隔をおいて2ヶ所に正方向の階段状微細剥離が見られる。これらの微細剥離によって左側縁は鋸歯状になっている。右側縁は裏面に平坦な微細剥離がみられる。刃先角は左側縁が60°～72°、右側縁上半部が53°を測る。なお右側縁部の下半部は80°以上あり角度がありすぎて刃部に適さなかったとも解釈される。

2は尖端部が欠損する。素材剥片の打面は左側縁にあるが、節理面で割れていて、残っていない。1と同様に両側縁に微細剥離がみられた。刃先角は左側縁が64°～70°、右側縁が58°を測る。

(2) 第2群石器／厚手の刃部を有するスクレイパー類（3～5）

3点出土。素材は剥片、礫を用いる。複数の縁辺に刃こぼれ状の微細剥離がみられ、刃部と考えられる。

刃先の角度が比較的厚いのを特徴とする。1群との違いは「尖端部」と認識できるような箇所を持たないことである。1群も微細剥離がみられる箇所の刃先角は $60^{\circ} \sim 70^{\circ}$ と厚く共通点はある。1と2群は近い関係にある器種であるという点も注意しておきたい。

3は剥片素材であるが、上面および下面の剥離は打点が観察されず、打面および末端部ははじけ飛んでいるかのように見える。本石器群は剥離の際の加撃点が打面奥になる例が多く（打面長の数値が高い）、打ち損じの率も高かったと指定される。そのため剥片が剥離されずヒビだけが入っており、別の加撃の際に同時に割れが生じ、はじけ飛んだような剥離面が形成されると考えられる。したがって、本石器のように折れ面のような剥離面が観察されても折り取る行為か、先に記した剥離の際にはじけ飛んだかを判断するのは難しい。スクレイパーの刃部として認定したのは左側縁と上端右半部の2ヶ所である。左側縁表面には2次加工がみられ、それにより刃先角が $75 \sim 54^{\circ}$ に調整され刃部が形成されたと考えた。上端右半部は大き目の剥離と微細剥離が組み合わさっておりやや鋸歯状の縁辺を呈する。刃先角は 58° を測る。

4は10cm程度の礫を素材としている。剥離はまず左側縁の下側から上端に向かって、正面方向から→裏面方向から→正面方向から2回と交互に加撃を行ったのち、右側縁に移り上端側から下側に向かって裏面方向からのみの剥離を行っている。つまり左側縁から始まり右側縁に打点が移動し、最後に上端に階段状の剥離が観察できる。この正面上端にみられる階段状剥離部分を厚手の刃部とするスクレイパー類とみた。階段状の剥離が2次加工か使用による剥離かの判別であるが、3つ見られる剥離の打点は明瞭でなく、加撃による剥離というよりは使用による加圧で剥離した可能性が強いと判断した。また、右側縁にも微細な剥離が見られるので複数の機能部＝刃部を持っていたことも考えられる。本石器群の中で礫を素材とした唯一の石器であるが、次の5と同種の石器とみなした。本石器を石核とする見方もあるが、石器群全体の中で考えた場合、この4から剥離されたと推定される剥片のサイズは利器（＝tool）の平均的なサイズよりも小さいため本石器そのものを利器として理解した。

5は打面の大きな厚手の剥片が素材となっている。上端部、右側縁の下半部、さらに右側縁に微細な剥離が認められ、複数箇所厚手の刃部持つスクレイパー類と認定した。なお3ヶ所の刃先角は 60° 前後である。

(3) 第3群石器／錐状の石器 (6・7)

2点出土。錐状の先端部を有する石器。素材となる剥片縁辺の角部分を利用し、わずかではあるが細部加工を施し、先端を作出している。

6は打面幅の大きい貝殻状の剥片を素材として、打面と右側縁の境界部の角を利用し、先端部を作出している。正面図左側縁が素材剥片の打面部に当たるが、反方向から2回以上の剥離によって先端部が作出されている。右側縁は特に調整剥離はみられず、内湾する縁辺を利用している。

7の左側縁は、素材剥片の縁辺をそのまま利用、右側縁は剥離によって先端を作出している。なお、上端以外にも右側縁に一撃ではあるが、剥離が観察される。複数の先端を持っていた可能性もある。

(4) 第4群石器／刃器 (8～14)

7点出土。縦長剥片・横長剥片など形にはバラエティーはあるが、やや薄いシャープな縁辺をもつ剥片である。剥片の縁辺には明確に2次加工と認められるものはないが、大小不規則な刃こぼれ状の剥離がところどころ観察されることから、剥片の鋭い縁辺を刃部とした石器として認定した。ナイフ形石器のような基部を中心とした形状を整える加工はない。

8は平坦打面の縦長剥片だったと思われるが、下半は欠損している。右側縁の表裏に微細剥離が観察される。刃先角は $38^{\circ} \sim 50^{\circ}$ である。右側縁は節理部分ではじけたようである。

9は自然面打面で背面に大きく自然面を残す縦長剥片である。左右両側縁が刃部と考えられ、微細剥離

が認められる。刃先角は35°を測る。なお、右側縁打面付近にみられる微細剥離は打点が明確でない。裏面に夾雑物があり、はじけによる偶発剥離とも考えられる。

10は幅広の背面に大きく自然面を残す。打面は複剥離面で構成され、打点は稜上にある。剥片の下縁に微細剥離がみられ、刃部と考えられる。刃先角は50°を測る。打面から右側縁にかけても微細剥離が観察される。

11・12は背面に大きく自然面を残す複剥離打面の大形縦長剥片である。器表面の風化が著しいため微細剥離が明瞭に観察できず、剥片の各縁11の裏面、12の正面右側縁打面周辺に微細な剥離痕が認められるが、使用痕、二次加工、偶発剥離かは特定できない。ただ各縁辺に35～50°前後の角度が認められることから、刃器として認定した。

13は複剥離打面の方形の剥片である。打点稜上にある。正面上縁部の左半に微細剥離が表裏に認められる。刃先角は35°を測る。一方、右半の微細剥離は刃こぼれか発掘調査時の欠損（ガジリ）かは判断つかない（本石材は風化層が厚く、わずかなガジリでは新鮮面が出ない）。

14は背面に大きく自然面を残す単剥離打面の幅広の剥片である。正面上縁に微細剥離がみられる。刃先角は45°を測る。

(5) 微細剥離痕のある剥片 (15～18)

4点出土。剥片の縁辺に微細剥離が認められ、何らかの利器として使用された可能性が強い石器である。その点からすれば2群や4群の石器として理解することも可能であるが、微細剥離が一撃であったり、剥片の形状、刃先角などが先の2群・4群石器に比べ規則性が読みとりづかった一群を本類とした。

15は正面右側縁の表裏に不規則な微細剥離が認められる。

18は右側縁裏面に微細剥離痕が認められる。

17も右側縁裏面に微細剥離痕が認められる。剥片の上下両端は折れ面である。

(6) 台石 (20・21)

2点出土。20は花崗岩製である。表面の風化が著しく、敲打痕などは観察できない。花崗岩は基盤に含まれる石材であるが、基盤礫には扁平な形状をもつものが見受けられないこと、平面的に1号ブロックの範囲内から発見されたことから、台石として認定したが、出土層位が3層であり、出土レベルもブロックの遺物の中でも高い。したがって、1号ブロックとは時期の違う遺物である可能性もある。

21は珪質ホルンフェルス製である。この石材も20同様に基盤にみられる石材である。ブロックの範囲内からの出土で、確実に伴うものと考えられる。正面中央には径5mm～1cm前後の敲打痕が点在する。右側縁には正面方向からの剥離が観察される。

(7) 石核 (22)

1点出土。原石は垂角礫であったと考えられる。打面転移を頻繁に行い、結果的に直方体状の残核形状になった。この直方体状の各面にみられる作業面の最終剥離面は階段状剥離が顕著である。その部分を打面側からみると、凹状になっており、それで剥離面が放棄され、他の面に転移したと考えられる。階段状剥離がほぼ各面におよび、剥片剥離に有効な面がなくなったため、廃棄されたと思われる。

(8) 剥片・碎片 (19・23～53)

剥片28点、碎片5点が出土した。剥片の属性については石器製作技術の項でふれるので、個々について観察された点を記載する。

28の左側縁上端部に見られる剥離は偶発的な剥離と思われる。

32の下端は節理面もしくは折れ面であり、正面図下縁の微細剥離は使用痕、二次加工と考えるよりは偶発剥離と考えたほうがよい。

33の右側縁、34の両側縁ともに比較的鋭い刃先角をもつため、第4群石器（刃器）の範疇にはいることも考えられるが、顕著な微細剥離が認められなかったため、剥片として分類した。

42の背面には下方向からの剥離がみられ、下面の剥離を切るため、当初、小型の石核かと思われたが、裏面、つまり主要剥離面は完結しており、剥片であると判断した。

45の両側縁には折断面が観察される。人為的なものか不明であるため、剥片として分類したが、下縁を刃部と見れば、台形状の石器ともとれる。46も形状は似るので、ともに注意しておきたい。

46の両側縁は下方向からの剥離面で、ピエス・エスキューの筋断面のようである。台石を用いた両側剥離の際にできたものであろうか。本来の剥片の打面は不明である。

2. B地点の石器群（第41図）

(1) 微細剥離痕のある剥片（54）

54は珪質凝灰岩製である。削器、もしくはA地点の4群石器（刃器）に類する石器ともみられるが、本地点で唯一の利器であるため、微細剥離痕のある剥片とした。反りの強い寸詰まりの縦長剥片を素材としている。背面の剥離方向は主要剥離面とほぼ同方向であるが、打面付近の剥離は遠く（同一打面からの剥離はない）、打面転移の多い石核から剥離された剥片であると推定できる。左側縁は中間部でくの字に屈曲する平面形を成すが、その屈曲部の上と下では微細剥離のあり方が違う。上半部は表裏の不規則な微細剥離、下半部は主に反方向の大きさが不ぞろいの剥離がみられる。一方右側縁は正方向の微細剥離がみられる。

(2) 剥片・碎片（55～62）

55は発掘時に欠損したと考えられる。ホルンフェルス製であるが、表面があまり風化していない。A地点のホルンフェルスとは風化の度合いがまるで違う。

56・57は緑色凝灰岩製の剥片、58は同じ石材の碎片である。後述する地点外出土石器65の斧形石器の石材と同じであり、この3点も斧形石器の製作に関わる調整剥片と考えられる。

59～62は54と同一石材の碎片である。54の剥片からは剥片剥離の際に調整剥離を行うようには読み取れないので、剥片剥離時の調整剥片というよりは、2次加工時に作出されたものと推定される。

3. 地点外の石器（第42図～第45図）

63はホルンフェルス製のナイフ形石器である。末端が開く寸詰まりの縦長剥片を素材とし、打面を基部側に置き、左側縁は大小の調整加工がみられる。右側縁の剥離は剥片剥離の際のハジケとも考えられ詳細は不明である（素材剥片の主要剥離面には打痕が2ヶ所観察できる）。左右の側縁および上縁には刃こぼれと思われる微細剥離痕がみられる。先端が開く基部加工の石器あることから、分類上は台形石器にあたるが、単独出土であるため本書ではそれらを含るレベルの器種を採用した（長野県埋蔵文化財センター2000）。A地点のブロックの西側から出土しており、石材はA地点と同じホルンフェルスだが、A地点と比べ、風化の度合いが違い黒色を呈す。粒子もやや細粒である。きわめて斉一性の強いA地点の石材にあってはきわめて異質であるため、平面分布ではA地点に近いがそれには含めず地点外と理解した。

64は花崗岩製の敲石である。縄文時代の磨石などと形態的に似るが、出土状況からも旧石器時代の可能性が高い。表裏の平坦面に磨耗状況は認められない。側縁ほぼ全周に敲打痕のようなあばた状の凹凸が認められたため敲石とした。敲打痕は実測図の上端および下端が顕著であった。

65は緑色岩製の斧形石器である。正面には全体的に自然面が残り、裏面は剥離面で構成されていることから、剥片が素材であったと思われる。裏面を平坦剥離によって平面形状および厚さを調整した後、両側縁および頭部には階段状の剥離で器体の形態を整えたと考えられる。刃部は表裏両面を研磨している。石器主軸と同方向の線状痕がみられる。刃部には刃こぼれ状の剥離がみられ、刃部を再生することなく廃棄されたか。

66は黒曜石製でA地点の石器群とは時間的な差があると考えられるが、貝殻状刃器などと共通性の強い石器である。右側縁の微細剥離は表裏ともに顕著である。剥離順序に規則性はなく、使用痕と考えられる。また打面にも微細剥離がみられるが、主要剥離面との切り合い関係から打面調整ではなく、剥片が取られた後の2次剥離である。器表面の表裏ともに他方向で規則性のない線状痕が認められる。埋没後土中での傷であろうか。ただ、微細剥離の顕著な右側縁には側縁に並行する線状痕も観察できる。

蛍光X線分析により産地推定を沼津工業専門学校望月明彦氏に依頼し、諏訪星ヶ台群(SWHD)という結果を得ている。

第2節 石器製作技術

前節では石器群の個々の観察を行ってきた。本節では資料的にまとまりをもっているA地点の石器製作技術について記載する。B地点および地点外の石器群は現状資料が断片的で石器製作技術を記述するには至らなかった。

1 接合資料の観察

A地点の石器群には10例の接合資料がある。

(1) 接合資料 No.1 (ホルンフェルス母岩番号1) (第46図)

1群石器(2)と石核(22)の接合例である。原石の形状は接合状況から亜角礫であったと推定される。利器として用いられた2は原石から比較的早い段階で剥離されたと考えられる。残核からみると同一打面での剥離は1~2回程度で、打面が頻繁に転移していたことが読み取れる。また、規格的な剥片が剥離されたとも読み取りづらい。

(2) 接合資料 No.2 (ホルンフェルス母岩番号3) (第46図)

4群石器(13)と3群石器(6)の接合例である。13と6は打面が異なり、連続して剥離されたものではない。

(3) 接合資料 No.3 (ホルンフェルス母岩番号1) (第47図)

剥片2点の接合例である。27・24・50・49は1枚の剥片であるが、碎けて4分割以上になっている。その後23が剥離された順序になるが、23も打面が節理によってはじけ飛んだと考えられる。27他と23は同一打面で連続して剥離されたようである。接合図の正面図アミ部はボジ面であり、剥片の主要剥離面を作業面とする石核から剥離されている。

(4) 接合資料 No.4 (ホルンフェルス母岩番号2) (第27図7)

3群石器で、節理で割れたと考えられるが、割れ面には打面割からリングが観察されることから、剥片剥離の際に縦割れを生じた可能性もある。

(5) 接合資料 No.5 (ホルンフェルス母岩番号3) (第30図13)

4群石器で、節理によって割れている。使用中に破損したものか。

(6) 接合資料 No.6 (ホルンフェルス母岩番号1) (第48図)

微細剥離痕のある剥片2点と剥片1点の接合例である。剥離順序は15→18→19である。

(7) 接合資料 No.7 および 11 (ホルンフェルス母岩番号1) (第49図)

剥片と微細剥離痕のある剥片の接合例である。接合資料No.11は本来1点の剥片だったものが、剥離の際に縦割れが生じ、2点以上に破損したと考えられる。2点以上としたのは28と30の接合面に空隙があるためである。接合資料No.11の剥片が剥離された後、打面が転移され16が剥離される。

(8) 接合資料 No.8 (ホルンフェルス母岩番号2) (第47図)

剥片2点の接合例である。

(9) 接合資料 No.9 (ホルンフェルス母岩番号1) (第48図)

剥片2点と1群石器(1)の接合例である。同一打面で34、31の2点剥離され、その後打面転移を経て1が剥離される。

2 剥片の属性

剥片素材の石器も含め計測データを示す。なお、長さ・幅・厚さについては遺存度100%のものを対象とした。また、剥片の長さは剥片剥離軸で計測し、幅はそれに直交する最大値、厚さは最大値をとった。

長さは20mm～102mm、幅22mm～119mmで、平均値も長さ58mm、幅63mmとやや幅広の傾向がある。長幅比(長さ÷幅)の値も0.5～1.67、平均0.94で値2を超えるような縦長の剥片はなく、長幅比ほぼ1:1の値に近い。厚さは8mm～48mmで、平均値は21mmである。

打角は26点計測できた。なお、計測方法は竹岡氏の剥離角計測方法の③にならった(竹岡1989)。結果、92°～131°の範囲で、平均は108°となった。角度別にみると、100°未満:4点、100°以上110°未満:9点、110°以上120°未満:11点、120°以上2点と110°前後の値が多い。ちなみに信濃町野尻湖遺跡群のナイフ形石器文化初頭の日向林B遺跡や賈ノ木遺跡では平均的な打角は110°～115°であり、それにくらべるとやや角度が小さい傾向にあるともいえる。

打面長の値は28点で計測できた。4mm～41mmの範囲で、10mm未満:5点、10mm以上20mm未満:17点、20mm以上:6点で、10mm以上20mm未満が多く、打面が厚い。剥離の際の加撃点が打面奥になる例が多い状況とみてとれる。

3 石器製作技術の特徴

石器製作技術の特徴をまとめると以下ようになる。

原石の選択:接合資料や遺物の大きさから、大きいものは、12cm以上の亜角礫が用いられたと考えられる。また、小さいものは礫器として用いている。剥片に観察される自然面からも原石の形状は亜角礫であったと思われる。

剥片剥離:打面転移が頻繁に行われ、ひとつの打面から連続して剥片剥離をあまり行っていない点は、石核や接合資料、また剥片背面に残された剥離方向から読み取れる。打面長の値が高く、打面の奥を叩いている。そのため、かなりの力が必要だったようで、剥片が縦割れを起こす事例が見られる。また、打点に残るパンチコーンも大きい。これらの剥片剥離は薄手の剥片を連続的にとるのではなく、厚手の剥片を、原石を分割するかのようにとる技術とみることができる。

細部加工(2次加工):現在までに発見された資料の中では、石器の機能部(刃部)に最低限の2次加工を施す程度で、石器の形態を整形する顕著な2次加工はほとんどみられない。

第3節 A地点石器群の使用石材

A地点の石材については、飯田市内の縄文時代までを含めた遺跡でもほとんど見られないということ、市教育委員会からも教示を受けた。この石材について信州大学原山智教授に指導を受けた内容以下に記す。石器は風化が著しいが、今回の鑑定には表面からの観察結果である。

A地点の主たる石材は細粒砂岩が弱い変成作用によってできたホルンフェルスである。ホルンフェルス化は弱い。推定産出地は遺跡西方に広がる美濃帯、領家帯の中から出てきたと考えられるが、現段階ではその場所は確定できない。

一方、遺跡下の基盤を形成している主な岩相は、花崗岩、濃飛流紋岩、珪質ホルンフェルス、片状ホルンフェルスの4種になる。ここの珪質ホルンフェルスはチャートが変成作用を受けたもの、また、片状ホルンフェルスについては、砂岩が変成作用を受けたもの。ホルンフェルスは熱変成を受ける度合いで、構造が塊状であるホルンフェルス→縞状の構造を持つ片状ホルンフェルス→さらに変成作用が進むと片麻岩となる。

A地点の使用石材と基盤の岩石の中にはともにホルンフェルスが含まれるが、石器に用いるホルンフェルスは変成作用が弱く、塊状の構造をもつ。一方基盤岩は変成作用が進んだ片状ホルンフェルスという対照的なあり方を示す。石器石材には変成作用の少ないホルンフェルスが選択されたといえる。

ただ、A地点の石器に使用されたホルンフェルスにも粒径が違ったり、ホルンフェルス化にも違いが見られることから複数の産地を想定することも可能である。そこで遺跡周辺の河川などを踏査する必要がある。

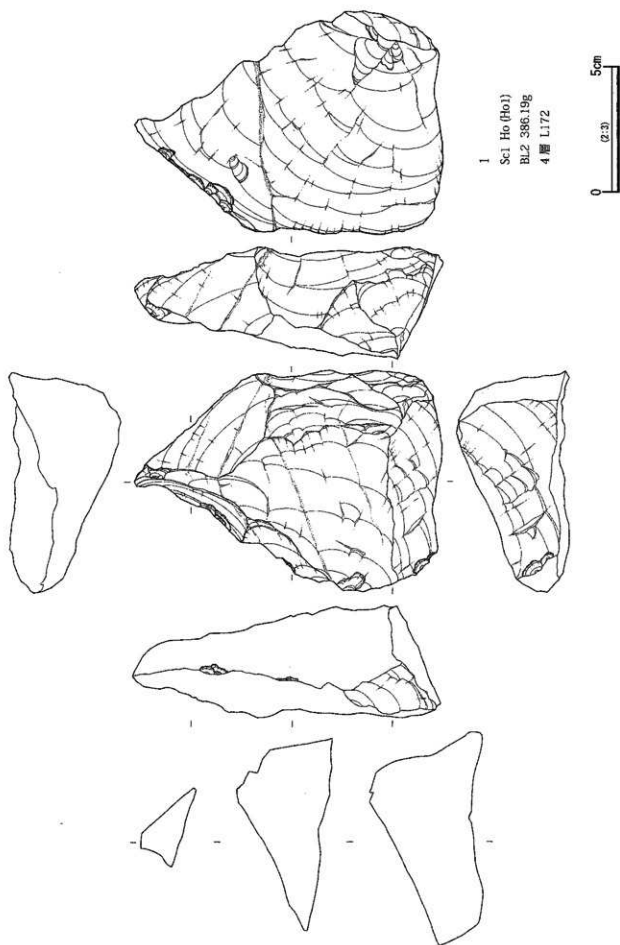
A地点の使用石材がホルンフェルスであることはほぼよいと思われるが、産出地が阿知川上流の「戸沢層」の可能性があるが、まだ、確定できない。戸沢層は湖沼堆積物がホルンフェルス化したものであり、湖底に堆積した堆積物は成層をなす。ところが石器には枝分かれした石英脈がみられる。これは、堆積物が石化していく続成作用中にできた空隙を埋めるものであり、このような特徴はプレートが沈み込む付加体によく見られる。石器の表面を観察する限り、湖沼堆積物のホルンフェルスとは考えにくい。ただ、阿知川から採集したホルンフェルスを見る限り、石器の石材とほぼ同じものといえる。阿知川をさかのぼり、戸沢層を現地で確認する必要がある。

なお、A地点のホルンフェルスを色調と粒子から以下の3タイプに母岩分類をした。

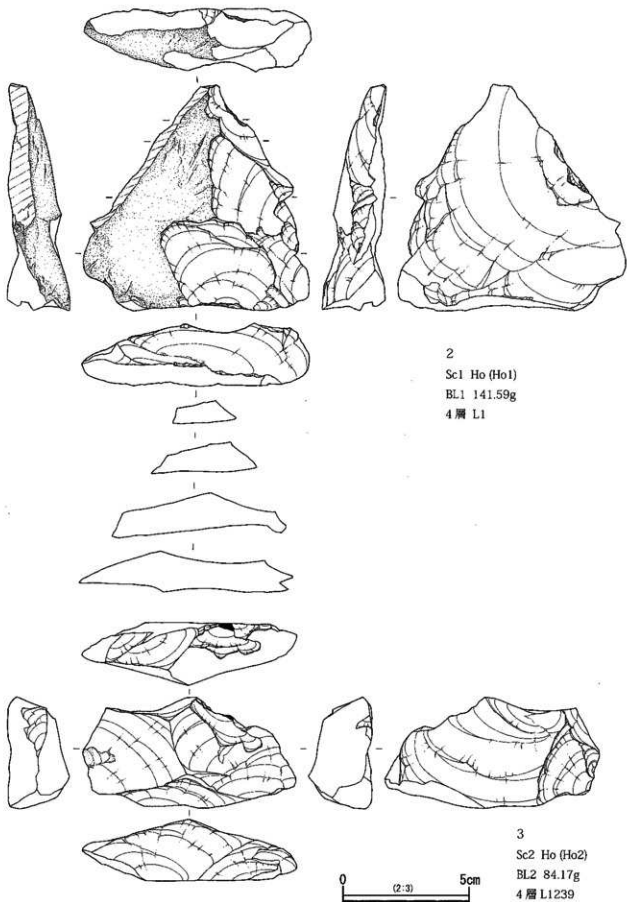
Ho1:Hue2.5Y7/3 浅黄色で粒子が細かい。

Ho2:Hue7.5Y4/1 灰色～Hue10YR5/2 灰黄褐色で、1に比べ粒子がやや粗く、また、全体的にやわらかい。

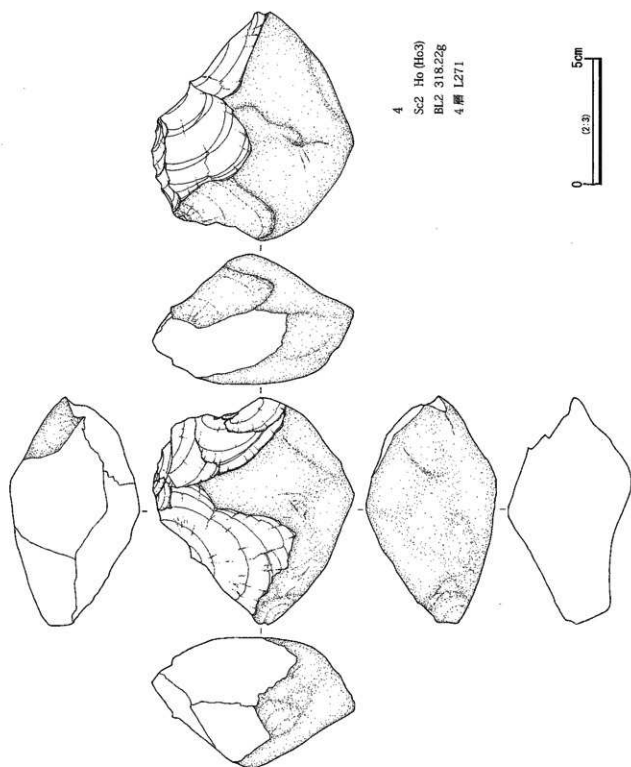
Ho3:Hue2.5Y7/2 灰黄色で、表面にザラつき感がある。



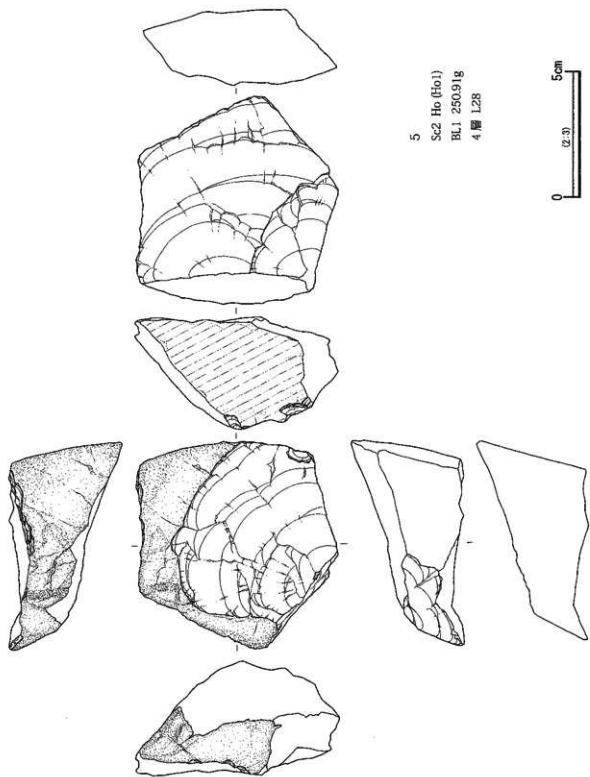
第23図 竹佐中原遺跡A地点出土石器実測図1



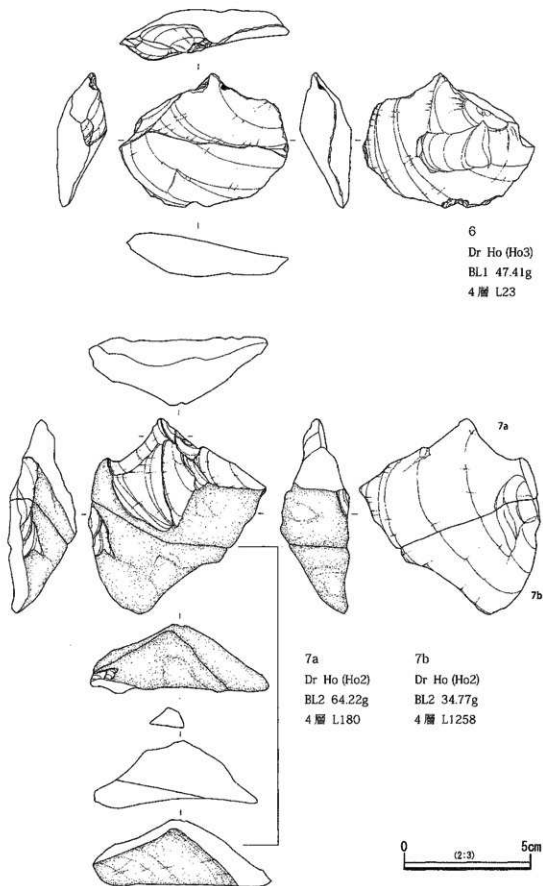
第24图 竹佐中原遺跡A地点出土石器実測図2



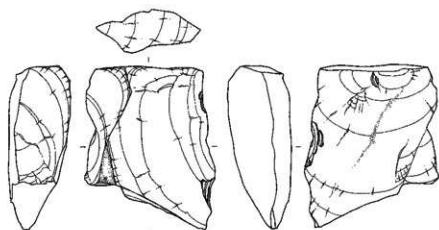
第 25 図 竹佐中原遺跡 A 地点出土石器実測図 3



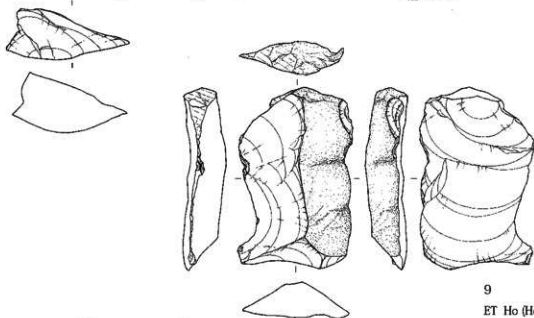
第 26 图 竹佐中原遺跡 A 地点出土石器実測图 4



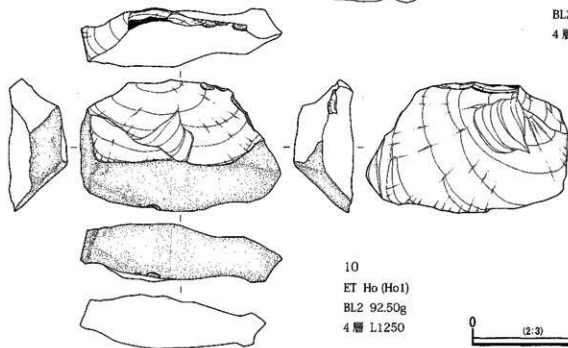
第27図 竹佐中原遺跡A地点出土石器実測図5



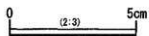
8
ET Ho (Ho1)
BL2 84.07g
4層 L184



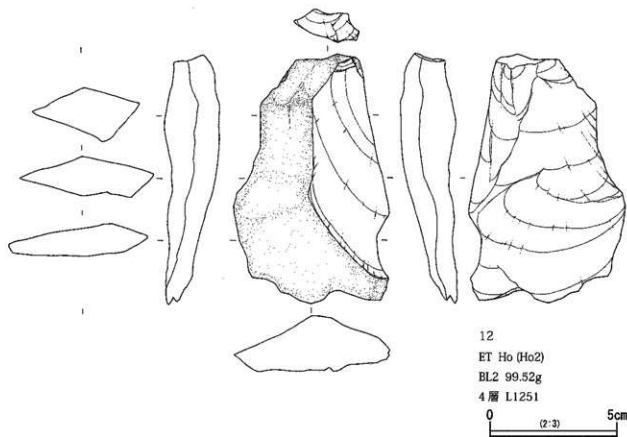
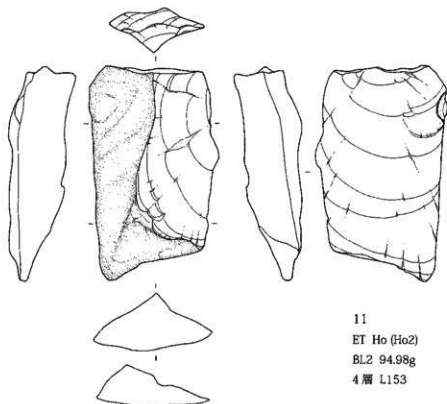
9
ET Ho (Ho1)
BL2 50.87g
4層 L1253



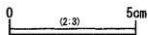
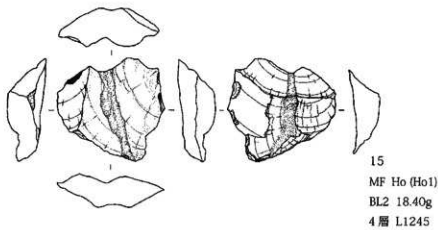
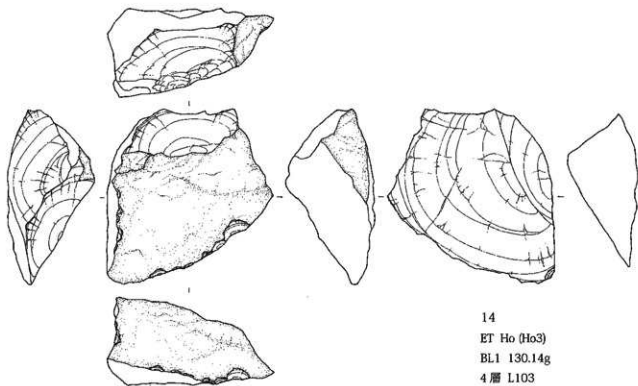
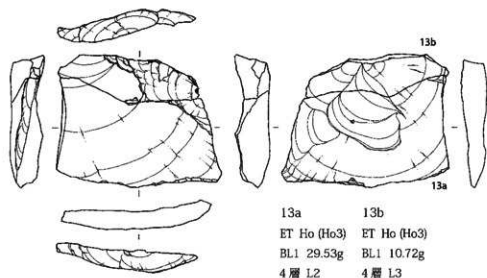
10
ET Ho (Ho1)
BL2 92.50g
4層 L1250



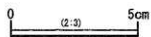
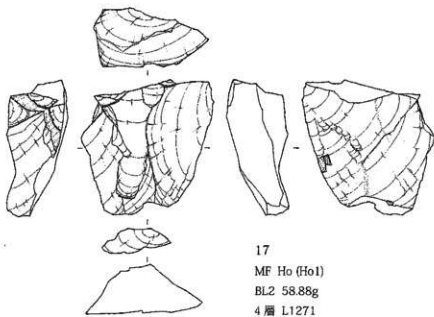
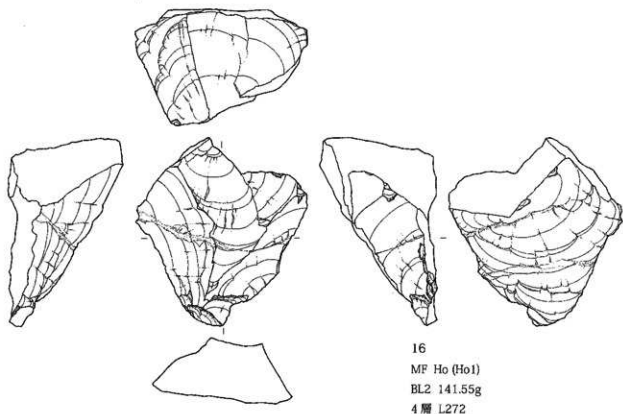
第 28 圖 竹佐中原遺跡 A 地点出土石器実測図 6



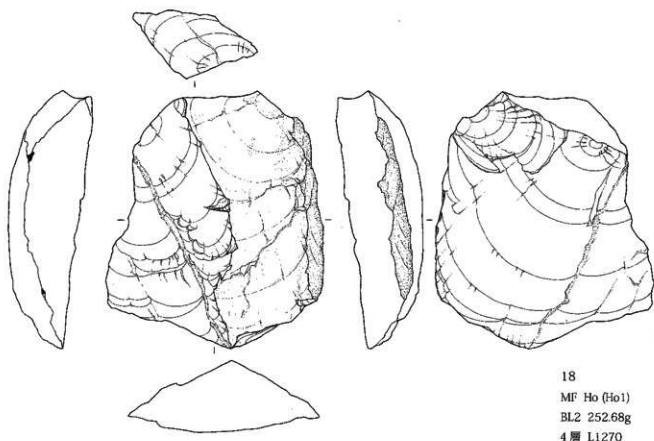
第29図 竹佐中原遺跡A地点出土石器実測図7



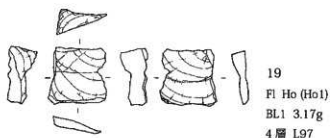
第30图 竹佐中原遺跡A地点出土石器実測图8



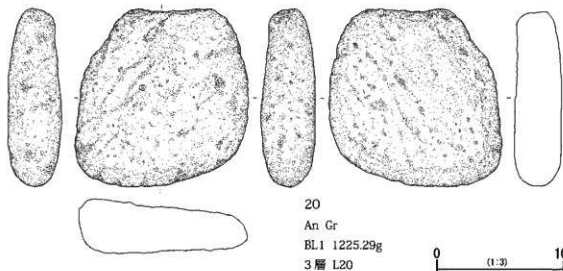
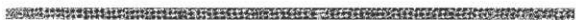
第31図 竹佐中原遺跡A地点出土石器実測図9



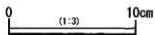
18
MF Ho (Ho1)
BL2 252.68g
4層 L1270



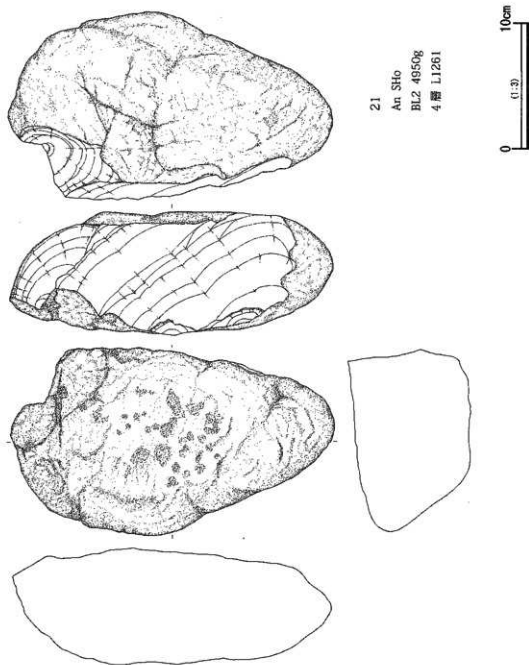
19
Fl Ho (Ho1)
BL1 3.17g
4層 L97



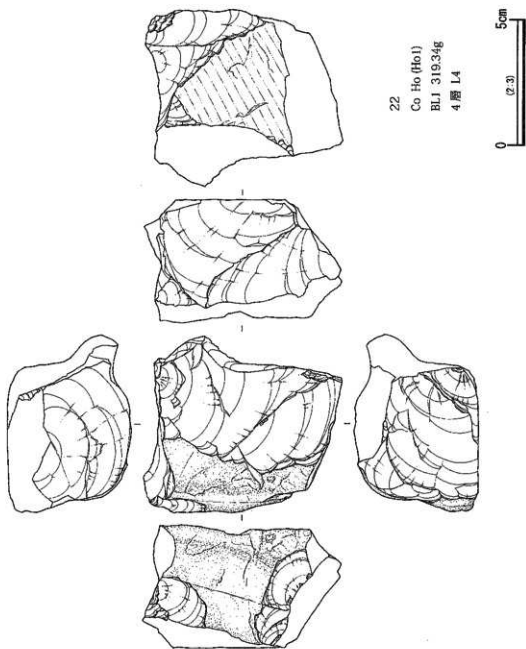
20
An Gr
BL1 1225.29g
3層 L20



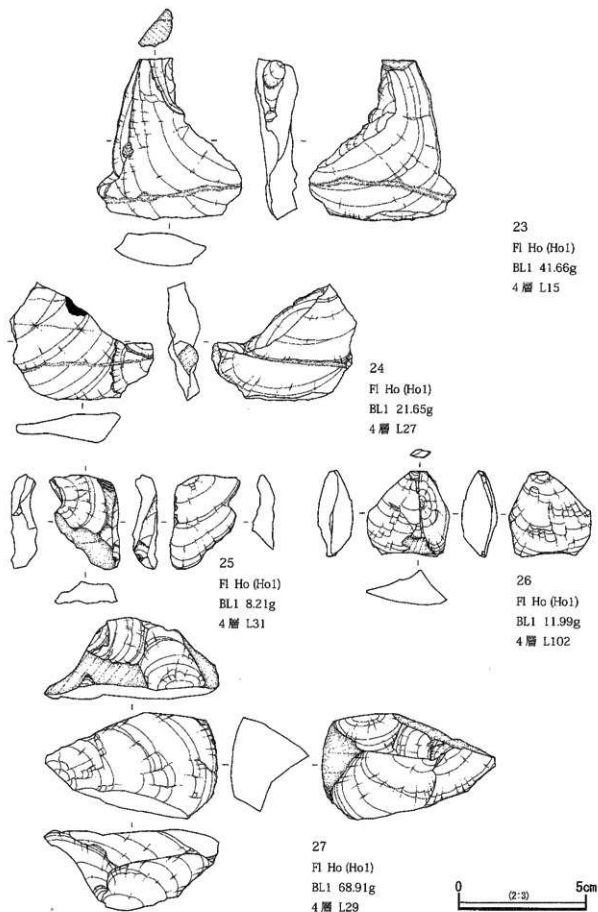
第 32 図 竹佐中原遺跡 A 地点出土石器実測図 10



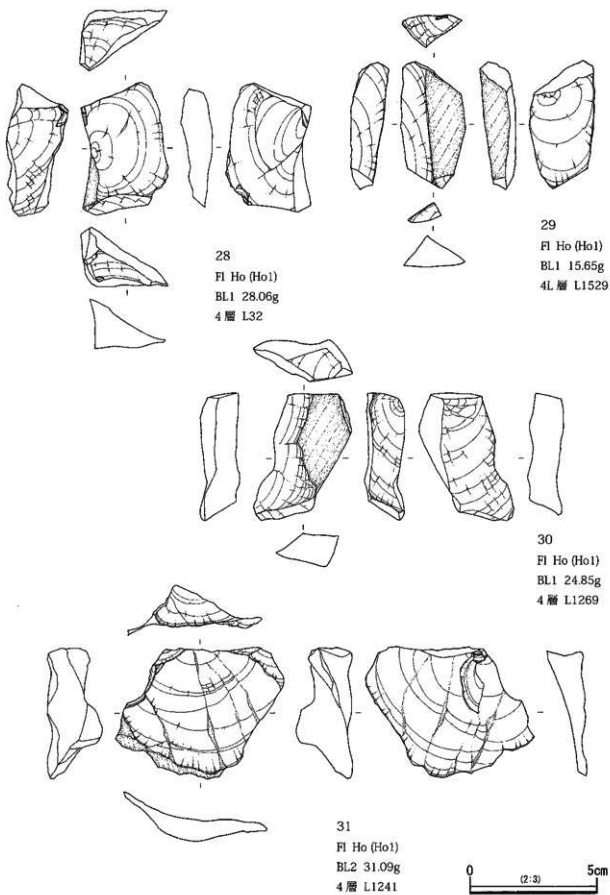
第33図 竹佐中原遺跡A地点出土石器実測図 11



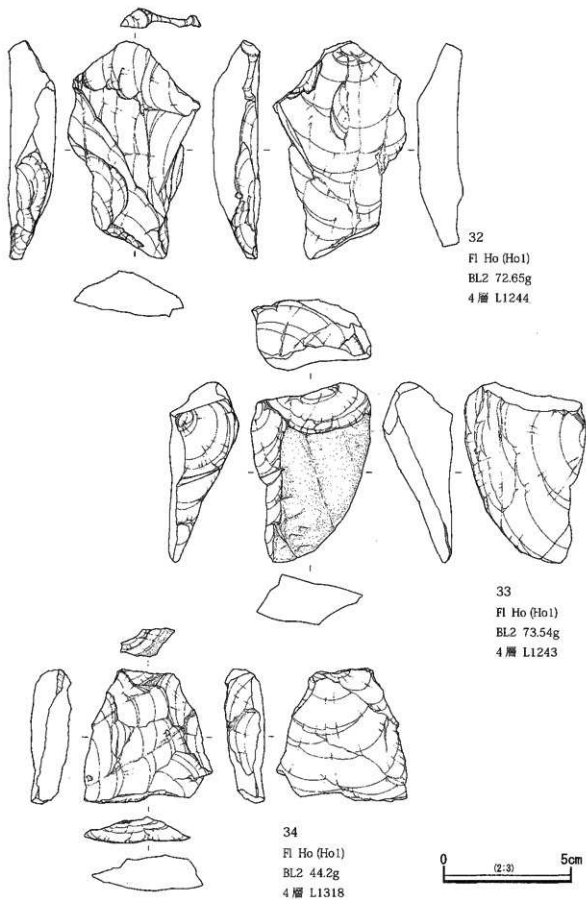
第 34 图 竹佐中原遺跡 A 地点出土石器実測図 12



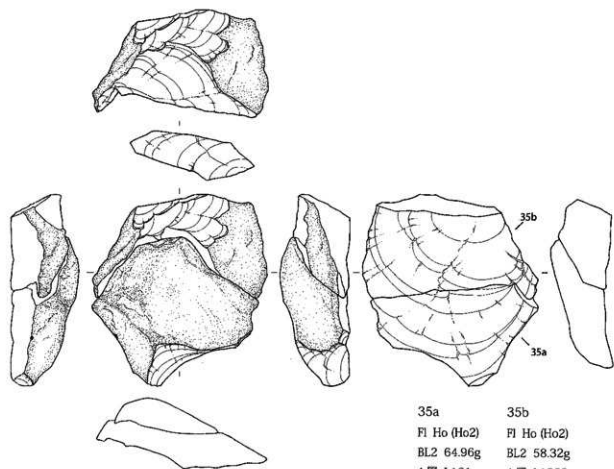
第35図 竹佐中原遺跡A地点出土石器実測図13



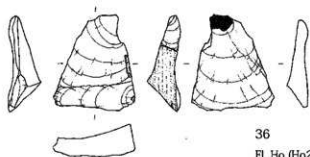
第36圖 竹佐中原遺跡A地点出土石器実測圖14



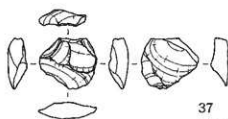
第37図 竹佐中原遺跡A地点出土石器実測図15



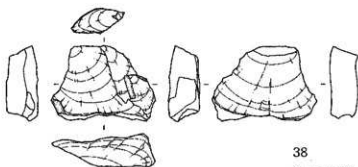
35a	35b
Fl Ho (Ho2)	Fl Ho (Ho2)
BL2 64.96g	BL2 58.32g
4層 L161	4層 L1252



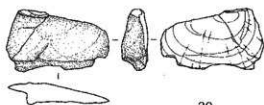
36
Fl Ho (Ho2)
BL2 10.26g
3層 L392



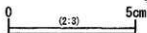
37
Fl Ho (Ho2)
BL2 3.42g
4層 L186



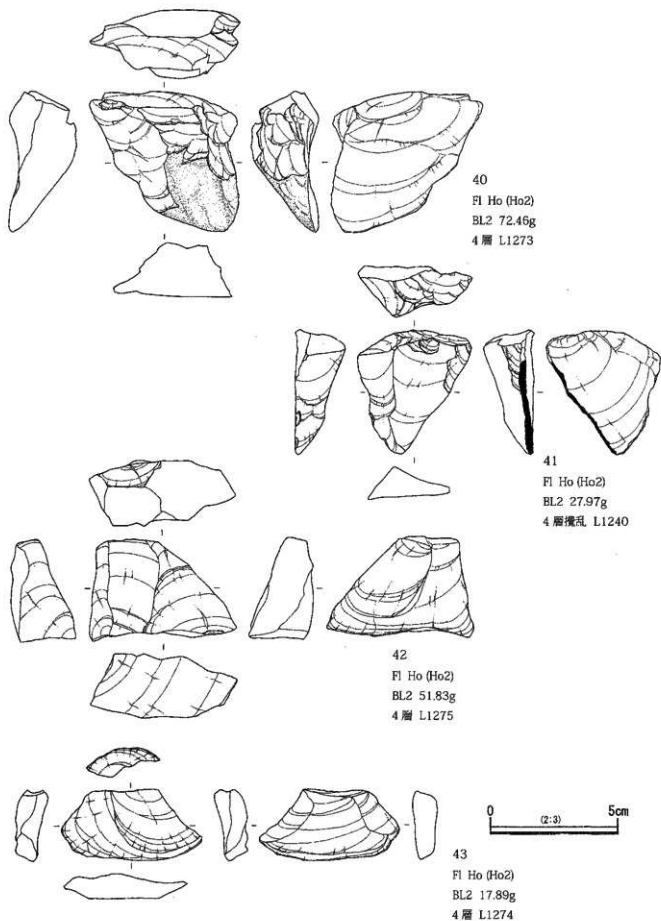
38
Fl Ho (Ho2)
外 14.22g
3層 L393



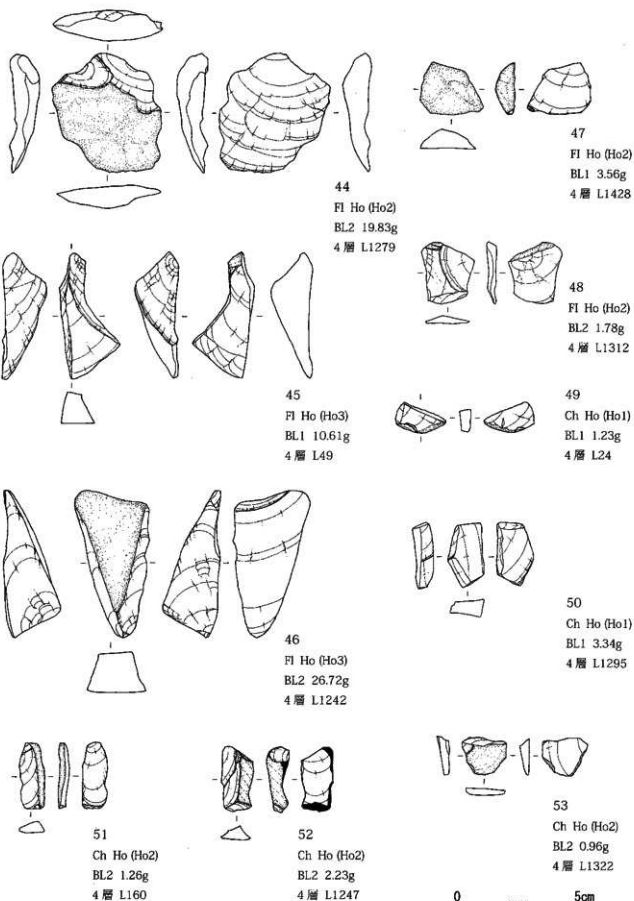
39
Fl Ho (Ho2)
BL2 8.89g
4層 L1272



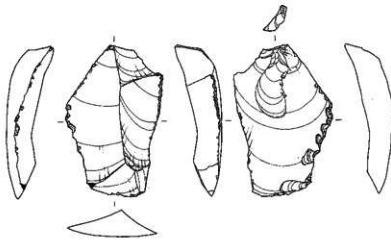
第38图 竹佐中原遺跡A地点出土石器実測圖 16



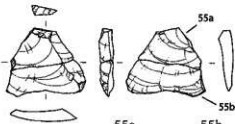
第39図 竹佐中原遺跡A地点出土石器実測図17



第40圖 竹佐中原遺跡A地点出土石器実測図18

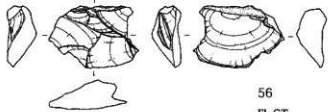


54
MF ST
BL3 17.90g
4層 L1491

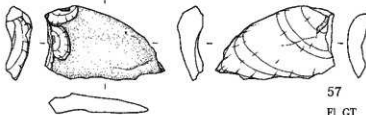


55a
Fl Ho
BL3 —
4層 L1500

55b
Fl Ho
BL3 4.59g
4層 L1489



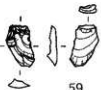
56
Fl GT
BL3 9.33g
4層 L1501



57
Fl GT
BL3 10.44g
4層 L1493



58
Ch GT
BL3 0.43g
4層 L1512



59
Ch ST
BL3 0.45g
4層 L1492



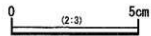
60
Ch ST
BL3 0.22g
4層 L1494



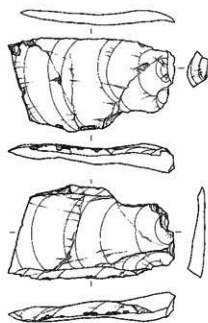
61
Ch ST
BL3 0.12g
4層 L1498



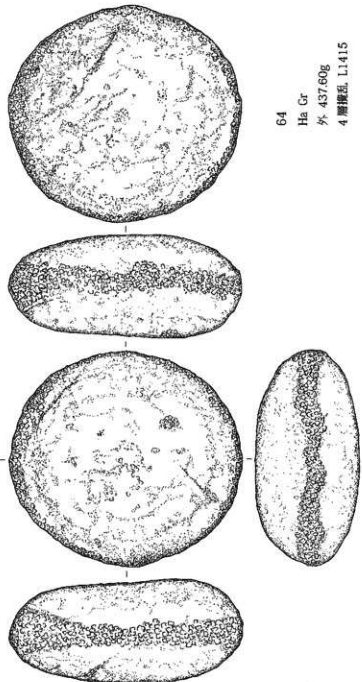
62
Ch ST
BL3 0.13g
4層 L1499



第41圖 竹佐中原遺跡B地点出土石器実測図1



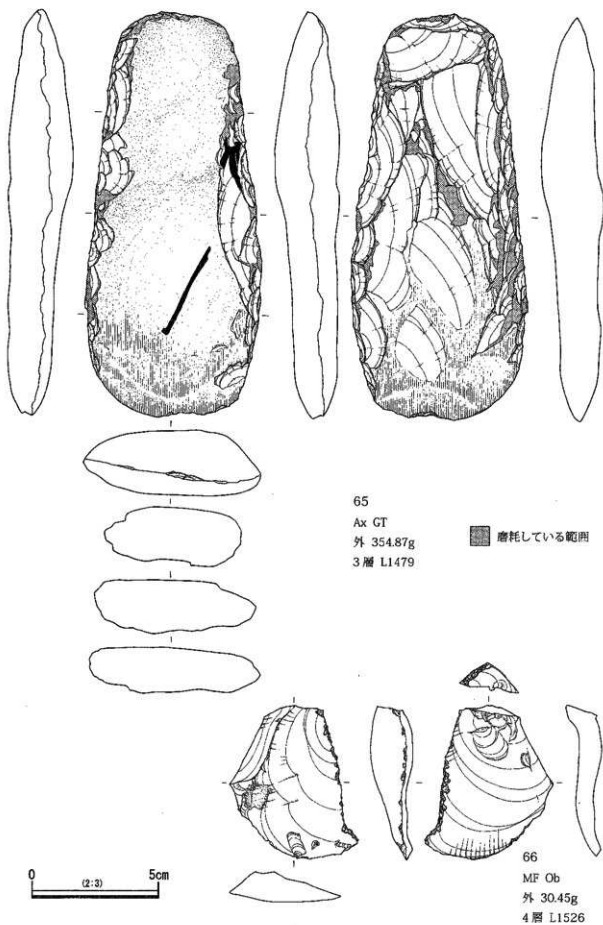
63
Kn Ho
外 19.27g
3層 L1495



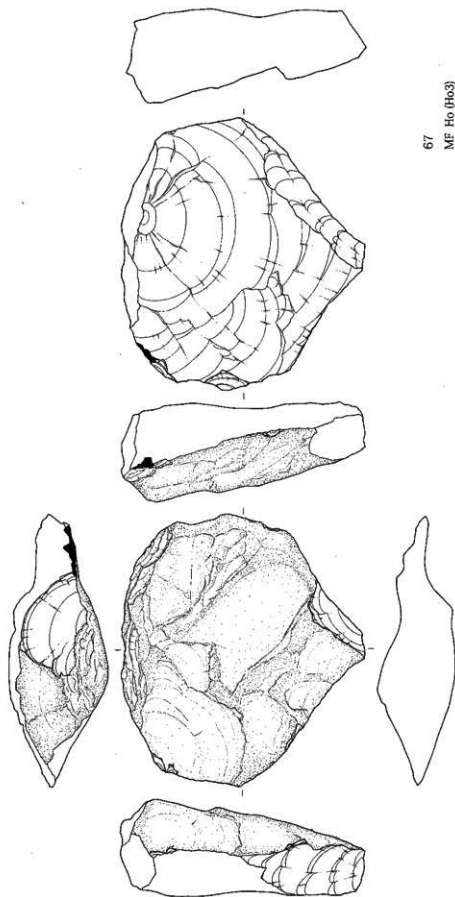
64
Ha Gr
外 437.60g
4層標本, L1415



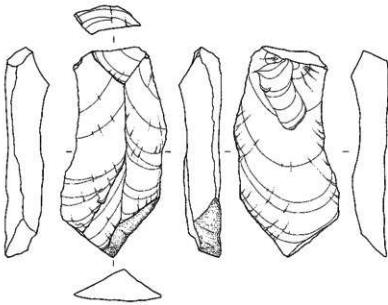
第 42 图 竹佐中原遺跡地点外出土石器実測図 1



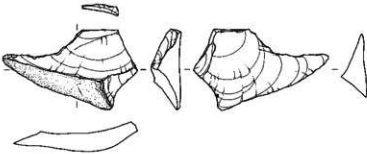
第43図 竹佐中原遺跡地点外出土石器実測図2



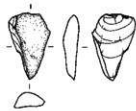
第44图 竹佐中原遺跡地点外出土石器実測图3



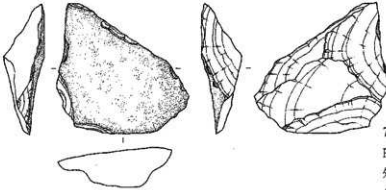
68
Fl Ho (Ho3)
外 47.19g
4層 L1530



69
Fl Ho (Ho3)
SB01 10.99g
覆土 SB01.S1



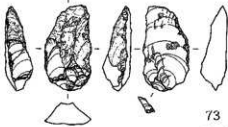
71
Fl GT
外 2.38g
4層 L1525



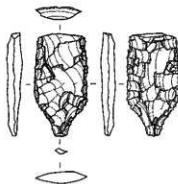
70
Fl GT
外 34.10g
4層 L1486



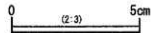
72
Ch GT
外 0.25g
4L層 L1497



73
Kn Sl
外 6.03g
4U層 L1545

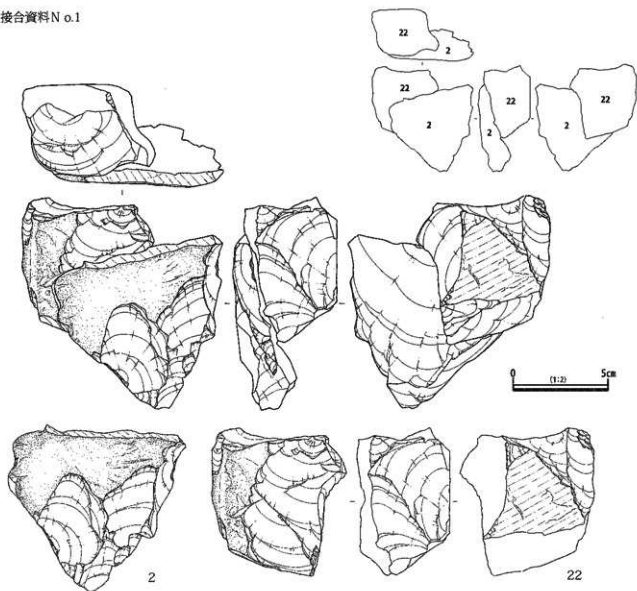


74
TP Ge
外 5.41g
攪乱 L1547

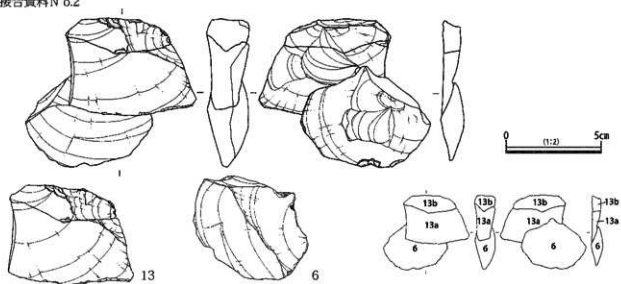


第45図 竹佐中原遺跡地点外出土石器実測図4

接合資料N o.1

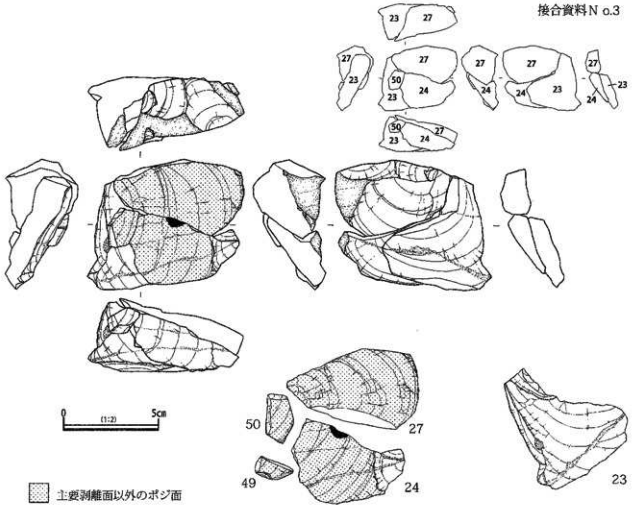


接合資料N o.2

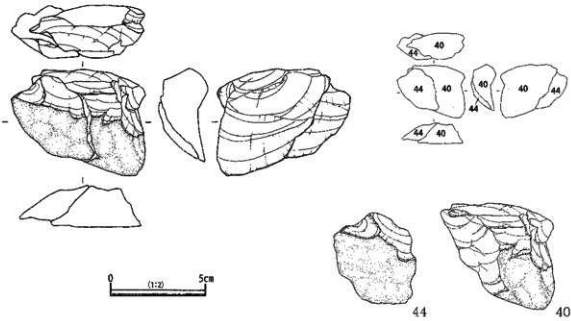


第 46 图 竹佐中原遺跡 A 地点接合資料実測图 1

接合資料N o.3

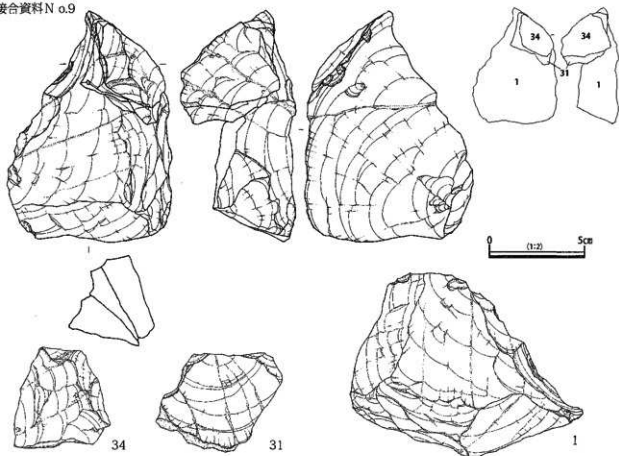


接合資料N o.8

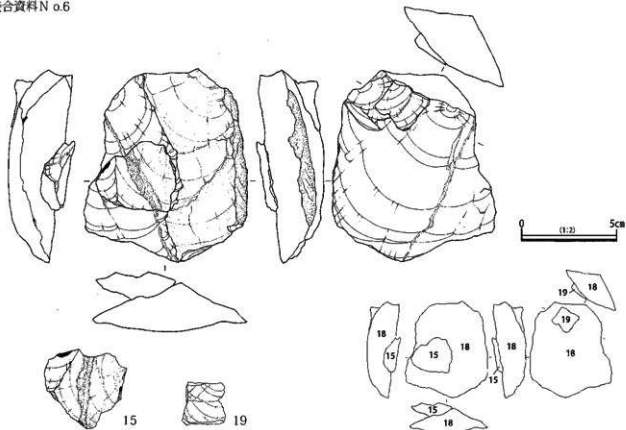


第47図 竹佐中原遺跡A地点接合資料実測図2

接合資料 N o.9

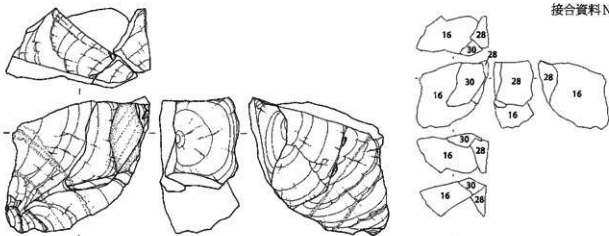


接合資料 N o.6

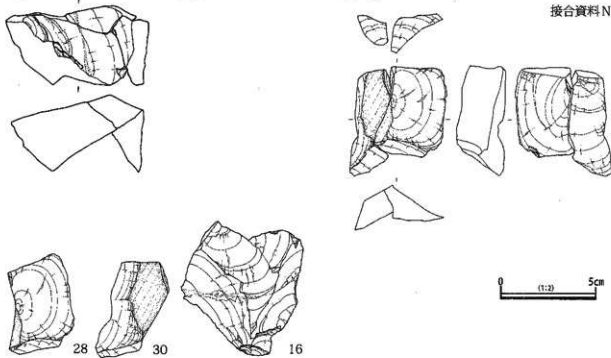


第 48 圖 竹佐中原遺跡 A 地点接合資料実測圖 3

接合資料N o.7



接合資料N o.11



第49図 竹佐中原遺跡A地点接合資料実測図4

第5章 成果と課題

1 竹佐中原 A 地点石器群の理解

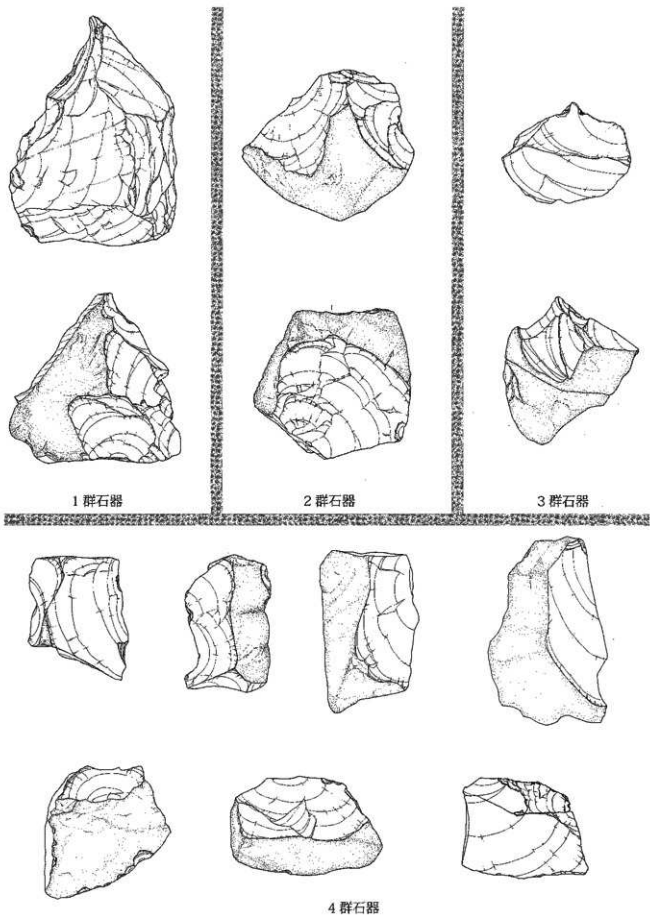
竹佐中原 A 地点石器群の出土状況や特徴を要約すると以下のようになる。

- ①出土状況：A 地点の石器群は台地（丘陵）中央の平坦部、約 8 m × 8 m の範囲内に隣り合う 2 つのブロックに分かれて検出された。
- ②出土層位：石器群の出土層位は 3 層～4 層にかけてであるが、4 層上部を主体とする。
- ③石器組成：2 つのブロックは同じ石器組成をなす。1・2 群としたスクレーパー類、3 群の錐状の石器、4 群の刃器の 4 種のほかに台石、石核、剥片で構成される。砕片は剥片の砕けたもので、2 次加工で作出されたと考えられる砕片はいは。剥片類もある一定の規格、形状をなす目的剥片や石核調整剥片、器体調整剥片などはみられない。
- ④使用石材：台石 2 点を除き、それ以外すべてがホルンフェルスを用いている。ホルンフェルスの産地については今後の詳細な現地調査が必要であるが、現在は遺跡近傍の阿知川にみられるホルンフェルスが有力である。
- ⑤石器の形態的特徴：竹佐中原遺跡 A 地点の石器群の中で利器として認定した中に 2 次加工によって石器の形態、形状を整えているものはみられない。全体的に 2 次加工が施された石器は少なく、2 群石器の 3 と 3 群石器の 6・7 のように石器の機能部（＝刃部）を必要に応じて 2 次加工する程度。
- ⑥石器製作技術の特徴：竹佐中原遺跡の石器製作技術の特徴として「石器の形態を整形する顕著な 2 次加工を施さない石器群」と報告者は理解しており、それがナイフ形石器文化との一番大きな違いである。
- ⑦石器群の理解：このような石器群には大きくふたつの解釈が成り立つ。ひとつには、発掘された石器群に 2 次加工がないのは全石器群の部分のあらわれであり、本来的にはしっかりと 2 次加工を施した石器、もしくは別器種があるが、遺跡の残され方の問題で、顕著な石器（道具）が残されなかったと考える意見である。もうひとつは、この A 地点の石器組成を石器群の特徴としてとらえる考え方である。

2 竹佐中原遺跡 B 地点石器群の理解

竹佐中原 B 地点石器群の出土状況や特徴を要約すると以下のようになる。

- ①出土状況：10 点のブロックが 1 ヶ所発見されているのみで、断片的で不明確である。ただ、地点外の 4 層出土の遺物の中には緑色凝灰岩製の斧形石器や黒曜石製の微細剥離痕のある剥片など、A 地点の使用石材であるホルンフェルスと対照的な石材が用いられており、これらも B 地点の石器群に関係するものとしてとらえる。
- ②出土層位：石器群の出土層位は 4 層上部である。
- ③石器組成：微細剥離痕のある剥片、剥片、砕片で構成される。
- ④使用石材：ブロックからは珪質凝灰岩、緑色凝灰岩が出土しているが、地点外の黒曜石を含めると、A 地点が近傍の石材を使用していたのに対し、遠隔地の石材を用いているのが対照的である。
- ⑤石器の形態的特徴：B 地点のブロックでは資料数が少ないため、明確ではない。ただ地点外の緑色凝灰岩製の斧形石器をもつ石器群としてとらえることは、妥当であろう。
- ⑥石器製作技術の特徴：これも資料が断片的ではあるが、剥片・砕片は石器製作の調整剥片と考えられ、後期旧石器時代の遺跡に普遍的に見られる特徴を見出すことができる。



第50図 竹佐中原遺跡A地点の主要石器(縮尺1:2)

⑦石器群の理解：後期旧石器時代ナイフ形石器文化初頭の斧形石器を伴う石器群としてとらえられよう。

3 竹佐中原遺跡における石器文化

竹佐中原遺跡には、異なった石器形態、石器製作技術をもつ2つの石器群が存在していたと理解される。この2つの石器群は現在までのところ層位的には同一層中からの出土でそれからすれば時間的前後関係は明らかにできない。ただ、これらのA・B2つの石器群をひとつの石器文化として結びつけることは難しく、2つの石器文化（industry）としてとらえるほうが適切であると考えられる。

B地点とほぼ同時期、つまり後期旧石器時代初頭の石器文化、もしくはそれ以降の石器文化の中に、A地点と同様な石器組成、石器製作技術で構成される石器文化は見当たらない。現時点では、まだ予察的な段階ではあるが、A地点の石器文化はB地点の石器文化と明らかに違い、それらは層位的には前後関係はいえないものの、B地点が後期旧石器時代の初頭とすれば、A地点の石器文化はほぼ近い時期からそれを時間的に遡る石器文化であると考えられる。

4 竹佐中原遺跡旧石器時代石器文化の年代

第2章で示した各種自然科学分析により、包含層の年代推定を試みたが、それぞれの分析間でも齟齬をきたしており、また石器群との整合性もかならずしも合致しない。現時点では何年前という石器包含層の推定年代値は竹佐中原遺跡の場合出せない状況にある。今後の課題としたい。

第6章 結語

中央自動車道を飯田で分かれ静岡県三ヶ日町までを結ぶ計画の三連南信自動車道の建設に先立つ発掘調査で今回の石器は発見された。A地点と称し、その点数は石器56点、2つの集中部に分かれてローム層(=4層、いわゆる赤土)の最上部付近から出土した。この周辺の赤土層の起源は御岳山の火山灰とされているが、降下・流出を繰り返していたようで、堆積層は全体的に薄く、石器が発見された地表からの深さはわずか40~50cmのところであった。25,000年前に日本各地に降灰した九州鹿児島島の始良・丹沢火山灰が石器の出土する地層の上下に拡散して含まれていた。微妙な含有量の違いから、この火山灰の降下は、石器が遺跡に残された後である可能性が高いとされるものの現時点で自然科学の分析をさまざま試みたが決定的な年代値は得られていない。

竹佐中原遺跡A地点出土の石器は、原石を粗く打ち欠いた剥片をそのまま、もしくは最低限の加工を施し道具として用いた石器群であると考えられる。つまり出土した石器は全体的に大きく、剥離は粗く、剥片の形もあまり整っていない。後期旧石器時代では、一般的に、剥片に細かい二次加工を施し、石器の形状を整える石器製作技術をもつが、竹佐中原遺跡の石器にはそのような特徴がほとんど見られない。石器の製作技術そのものが大きく違うようである。

現段階で、本遺跡の場合は地層から年代を推定することが難しい、しかし、周囲からは土器等を伴わないこと、石器群は後期旧石器時代に数多く(一般的に)みられる特徴とは違う様相を示すことなどから、後期旧石器時代の初頭からそれをさかのぼる時代と考えられる。

*

ねつ造事件が発覚したことによって、考古学の方法、発掘調査の方法に疑問が投げかけられることが多かった。発掘調査のやり方は、長年の蓄積から、基本が変わることはない。従来どおりの調査を進めた。竹佐中原遺跡では、成果の公表の方法に大きな配慮をはらった。それは、遺跡の早期公開である。調査中の遺跡は勿論すべて公開が原則であるが、ここで強調しておきたいのは積極的な公開である。調査初期の段階から遺跡を公表し、研究者のみならず一般市民の方まで調査の過程から周知するというのである。1点目の石器発見から1ヵ月足らず、出土した石器の数は20点余、地層の年代や石器群の特徴などまだまだ不確定な要素がある中での遺跡の公表であった。公表直後から数多くのコメントが寄せられた。石器群の年代観やその評価についてさまざまな意見が投げかけられた。その議論はいまだに続いている。一担当者の偏った理解にしないため、遺跡の調査指導委員会を設置し、考古学・地質学と幅広く意見を聞くことの出来る環境を整備したり、石器の出土状況写真をより細かく多く撮影することなどにより、調査の過程、結果をより多くの人に正確に理解してもらえるようにした。

今までは結果報告の場合が多かった。やはり過程を示しながら、研究者相互の批判・検討行っていかなければならない。それは研究者だけでなく市民一般に対してでもある。考古学研究者が、マスコミに対して資料を発信するのはそのためである。しかしながら、過程がしめされることはあまりなく、結論部分だけが強調されてしまう傾向があったように思う。

研究者が、調査やその評価の学術的相互批判をその過程から公表し、それらが理解しやすく伝わった時、市民一般にとって考古学は単なる結果ではなく歴史を考える学問として受け入れられることと考えられる。そのとき初めて遺跡—文化財は国民共有の財産となるのだろう。ねつ造事件そのものは非常に残念な出来事であった。ひとつの区切りはつき、ある一定の説明責任も果たされたと考えますが、まだ過去の事件としてはならない。これを期にもう一度考古学そのものの社会的役割を考え直すべきであろう。

*

旧石器時代研究については、事件発覚後、その検証も進められる中、日本列島における人類文化のはじまりは再検討を迫られた。そして日本列島において遺跡が安定してみられるのはナイフ形石器・台形石器類と斧形石器を伴う石器文化（以下、初期ナイフ形石器文化と称す）であり、およそ3万数千年前という年代が与えられる。この初期ナイフ形石器文化は北海道・沖縄ではまだ検討の余地を残すが、その他の地域では同じような様相を示す石器群が安定してみられる。県内でも、信濃町日向林B遺跡・貫ノ木遺跡をはじめとする野尻湖遺跡群内の諸遺跡、諏訪市茶白山遺跡・ジャコッパラ遺跡群、原村弓振日向遺跡、飯島町針ヶ平第1遺跡など各地でみられる。これらの遺跡はその多くが黒曜石を用い、ブロックを環状にめぐらせ、大規模になる傾向がみられる。特に野尻湖の周辺には大規模な遺跡が密集して分布し群を抜いている。

その一方で、長野県ではそれらとは性格の違う遺跡が注意されていた。飯田市石子原遺跡と信濃町野尻湖底立が鳥遺跡である。ただ、ナイフ形石器や斧形石器といった形態的特徴をもつ石器が伴っていないためその位置付けが判然としていなかった。そのような中で発見された竹佐中原遺跡はこれら2遺跡に似る特徴を持ち合わせていた。他に中野市沢田鍋土遺跡・がまん淵遺跡例を含めると現在、県内では少なくとも5遺跡が初期ナイフ形石器文化とは様相を異にする石器群として上げられる。

全国的にみても初期ナイフ形石器文化と様相を異にする、もしくは関係が微妙な石器群が点々と存在する。東日本では岩手県金取遺跡・同柏山館遺跡、東京都西之台B遺跡・同中山谷遺跡、静岡県ぬたぶら遺跡など、西日本でも広島県下本谷遺跡、福岡県辻田遺跡、熊本県沈目遺跡、宮崎県後牟田遺跡などである。

竹佐中原A地点石器文化と上記の石器群はかなりの点で共通点が多いが、一方でナイフ形石器に類する石器が組成するなど一概に括することは現時点では難しい。しかしながらこれら石器群と初期ナイフ形石器文化との関係を今後検討していくことが、新たな日本列島における始源文化の様相を探る近道でかつ確実な方向であるといえよう。

*

竹佐中原遺跡の調査は現在も続いている。学術的評価はまだ今後のことになろう。「3万年以降の日本列島に広く展開する後期旧石器時代の石器群のルーツは？」という課題設定に対する答えに、この竹佐中原遺跡の石器文化は深く関わってくると考える。竹佐中原遺跡の重要性はそこにある。将来的には竹佐中原遺跡の資料を具体的に用い、日本列島における人類文化の起源、つまり日本の歴史のはじまりを、研究者のみではなく、市民みんなで考えることが出来ればと思う。新しい考古学の第一歩としたいものである。

報告番号	建物番号	建物名称	地点	プロック	部種	材質	構造分類	出上層位	長さmm	幅mm	厚さmm	重量kg	打面長	打角	欠損部位	備考	蓄存度	損傷方向	打面形態	端部形態
1	L172	A	BL2	Sc1	Ho	Ho1	4	102	119	43	386.19	23	108							ウートラハッセ
2	L1	A	BL1	Sc1	Ho	Ho1	4	89	95	25	141.59				長さ		一部	75	横を含む	ウートラハッセ
3	L1239	A	BL2	Sc2	Ho	Ho2	4	47	83	26	84.17						なし	100	横を含む	
4	L271	A	BL2	Sc2	Ho	Ho3	4	81	90	50	318.22						一部	100	横を含む	
5	L28	A	BL1	Sc2	Ho	Ho1	4	83	79	40	250.91	41	105				一部	100	横を含む	フェザー
6	L123	A	BL1	Dr	Ho	Ho3	4	54	62	17	47.41	15	108				なし	100	同一	ヒンジ
7a	L180	A	BL2	Dr	Ho	Ho2	4	59	78	23	64.22	11	117				一部	100	逆を含む	フェザー
7b	L1258	A	BL2	Dr	Ho	Ho2	4	↑	↑	↑	34.77									
8	L184	A	BL2	ET	Ho	Ho1	4	69	54	25	84.07	18	97	長さ			一部	75	横を含む	半割離
9	L1253	A	BL2	ET	Ho	Ho1	4	73	47	14	50.87	13	110				一部	100	横を含む	側面
10	L1250	A	BL2	ET	Ho	Ho1	4	53	80	22	92.50	11	120				一部	100	同一	横割離
11	L153	A	BL2	ET	Ho	Ho2	4	87	52	21	94.98	18	92				一部	100	横を含む	横割離
12	L1251	A	BL2	ET	Ho	Ho2	4	101	63	16	99.52	14	108				一部	100	横を含む	横割離
13a	L2	A	BL1	ET	Ho	Ho3	4	54	67	10	29.53	8	110				なし	100	横を含む	横割離
13b	L3	A	BL1	ET	Ho	Ho3	4	↑	↑	↑	10.72									
14	L103	A	BL1	ET	Ho	Ho3	4	65	82	33	130.14	35	115				一部	100	横を含む	横割離
15	L1245	A	BL2	MF	Ho	Ho1	4	42	44	14	18.40						長さ・幅・厚さ	なし	25	同一
16	L272	A	BL2	MF	Ho	Ho1	4	70	64	43	141.55						長さ・幅	なし	75	横を含む
17	L1271	A	BL2	MF	Ho	Ho1	4	57	52	24	58.88						長さ・幅・厚さ	なし	50	横を含む
18	L1270	A	BL2	MF	Ho	Ho1	4	100	102	27	252.68	29	118				なし	100	同一	半割離
19	L97	A	BL1	Fl	Ho	Ho1	4	23	23	10	3.17						なし	50	同一	フェザー
20	L20	A	BL1	An	Gr		3	142	138	43	1225.29									
21	L1261	A	BL2	An	SHo		4	258	150	98	4950.00									
22	L4	A	BL1	Co	Ho	Ho1	4	74	62	48	319.34									
23	L15	A	BL1	Fl	Ho	Ho1	4	58	67	16	41.66	11								半割離
24	L27	A	BL1	Fl	Ho	Ho1	4	48	57	14	21.65									横割離
25	L31	A	BL1	Fl	Ho	Ho1	4	32	38	9	8.21									ウートラハッセ
26	L102	A	BL1	Fl	Ho	Ho1	4	34	33	14	11.99	4	105	長さ			なし	75	同一	半割離
27	L29	A	BL1	Fl	Ho	Ho1	4	69	45	31	68.91									ウートラハッセ
28	L32	A	BL1	Fl	Ho	Ho1	4	53	35	21	28.06	21	100	長さ			なし	50	逆を含む	横割離
29	L1529	A	BL1	Fl	Ho	Ho1	4L	51	26	14	15.65	12	116	長さ			なし	75	横を含む	横割離
30	L1269	A	BL1	Fl	Ho	Ho1	4	52	39	12	24.85	12	105	長さ			なし	50	横を含む	ウートラハッセ
31	L1241	A	BL2	Fl	Ho	Ho1	4	53	66	10	31.09	17	105				なし	100	同一	横割離
32	L1244	A	BL2	Fl	Ho	Ho1	4	88	54	17	72.65	9	110	長さ			なし	75	横を含む	横割離
33	L1243	A	BL2	Fl	Ho	Ho1	4	48	70	26	73.54									フェザー
34	L1318	A	BL2	Fl	Ho	Ho1	4	54	51	16	44.20	11	95	長さ			なし	75	横を含む	フェザー
35a	L161	A	BL2	Fl	Ho	Ho2	4	76	70	18	64.96	18	114	長さ			一部	75	横を含む	半割離
35b	L1252	A	BL2	Fl	Ho	Ho2	4	↑	↑	↑	58.32									半割離
36	L392	A	BL2	Fl	Ho	Ho2	3	38	33	11	10.26						なし	75	横を含む	フェザー

報告番号	器物番号	地点	プロック	器類	材質	母分群	出土層位	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	打面径	打角	欠損部位	表面	保存度	新扉方向	打面形態	編組形態
37	L186	A	BL2	Fl	Ho	Ho2	4	22	22	8	3.42	6	114		なし	100	同一	出射面	ヒンジ
38	L393	A	外	Fl	Ho	Ho2	3	33	42	12	14.22	12	113	長さ	なし	50	同一	半射面	ヒンジ
39	L1272	A	BL2	Fl	Ho	Ho2	4	24	41	10	8.89				全部	100	同一	半射面	フェザー
40	L1273	A	BL2	Fl	Ho	Ho2	4	58	59	27	72.46	16	131		一部	100	横を含む	半射面	フェザー
41	L1240	A	BL2	Fl	Ho	Ho2	4	45	15	15	27.97	22	95		なし	100	同一	出射面	ヒンジ
42	L1275	A	BL2	Fl	Ho	Ho2	4	41	59	23	51.83	11	111		なし	100	逆を含む	出射面	ウートラハクセ
43	L1274	A	BL2	Fl	Ho	Ho2	4	28	56	10	17.89	11	100		なし	100	同一	半射面	ステッパー
44	L1279	A	BL2	Fl	Ho	Ho2	4	50	42	10	19.83	5		長さ・幅・厚さ	なし	25	同一	半射面	フェザー
45	L149	A	BL1	Fl	Ho	Ho3	4	49	23	17	10.61			長さ	一部	75	逆を含む	ウートラハクセ	フェザー
46	L1242	A	BL2	Fl	Ho	Ho3	4	59	31	23	26.72				全部	100	逆を含む	半射面	フェザー
47	L1428	A	BL1	Fl	Ho	Ho2	4	20	26	8	3.56				なし	75	横を含む		フェザー
48	L1312	A	BL2	Fl	Ho	Ho2	4	24	21	4	1.78								
49	L24	A	BL1	Ch	Ho	Ho1	4	10	14	5	1.23								
50	L1295	A	BL1	Ch	Ho	Ho1	4	15	22	6	3.34			長さ	なし	25	同一		
51	L160	A	BL2	Ch	Ho	Ho2	4	26	10	4	1.26			長さ	一部	75	逆を含む		フェザー
52	L1247	A	BL2	Ch	Ho	Ho2	4	25	14	10	2.23			長さ	なし	75	横を含む		フェザー
53	L1322	A	BL2	Ch	Ho	Ho2	4	14	18	4	0.96			長さ・幅・厚さ	なし	25	横を含む		フェザー
54	L1491	B	BL3	MP	ST		4	61	40	10	17.90	7	110		なし	100	同一	半射面	フェザー
55a	L1500	B	BL3	Fl	Ho		4	↓	↓	↓	↓								
55b	L1489	B	BL3	Fl	Ho		4	27	32	6	4.59	5	96		一部	100	逆を含む	擦面	ヒンジ
56	L1501	B	BL3	Fl	GT		4	24	36	10	9.33	8	130		表面	100	横を含む	半射面	ヒンジ
57	L1483	B	BL3	Fl	GT		4	29	48	8	10.44	9	110	幅	一部	75	横を含む	半射面	フェザー
58	L1512	B	BL3	Ch	GT		4	9	18	2	0.43	3	122		なし	100	同一	半射面	フェザー
59	L1492	B	BL3	Ch	ST		4	16	11	3	0.45	4	118		なし	100	横を含む	半射面	ヒンジ
60	L1494	B	BL3	Ch	ST		4	11	10	3	0.22	3	122		なし	100	横を含む	擦面	ヒンジ
61	L1498	B	BL3	Ch	ST		4	11	8	2	0.12	2	110		なし	100	逆を含む	半射面	フェザー
62	L1499	B	BL3	Ch	ST		4	13	9	3	0.13	2	117		なし	100	同一	出射面	ヒンジ
63	L1495	Z		Kn	Ho		3	66	38	5	19.27	8	113		なし	100	逆を含む	半射面	ヒンジ
64	L1415	Z		Ha	Gr		4	90	84	41	437.60								
65	L1479	Z		Ax	GT		3	161	70	25	354.87								
66	L1525	Z		MF	Ob		4	62	51	16	30.45	12	110		なし	100	横を含む	半射面	ヒンジ
67	L1535	Z		MP	Ho	Ho3	4	96	108	40	349.70	35	115	長さ	一部	75	横を含む	半射面	フェザー
68	L1530	Z		Fl	Ho	Ho3	4	83	43	14	47.19	13	114	長さ	一部	75	同一	半射面	フェザー
69	S901S1	Z		Fl	Ho	Ho3	覆七	39	47	10	10.99			長さ	一部	75	横を含む		
70	L1486	Z		Fl	GT		4	44	62	15	34.10			長さ・幅・厚さ	全部	25			
71	L1525	Z		Fl	GT		4	27	17	6	2.38			幅	一部	75	横を含む		フェザー
72	L1497	Z		Ch	GT		4L	10	12	3	0.25			長さ	なし	75	同一		フェザー
73	L1545	Z		Kn	Si		4U	34	19	11	6.03	4	105		一部	100	同一	半射面	フェザー
74	L1547	Z		TP	Ge		覆瓦	41	21	6	5.41			長さ	なし	50			

第7表 竹在中家遺跡口部出土品目録(続)

引用・参考文献

- 飯島町教育委員会 1987『針ヶ平第1遺跡発掘調査報告書』
- 飯田市教育委員会 1998『飯田の遺跡 市内遺跡詳細分布調査報告書』
- 市橋雄一 1995「水晶山発見の旧石器資料」『伊那』8月号 pp.50-55
- 市橋雄一 1997「私の旧石器入門―柏原堤遺跡」『伊那』4月号 pp.36-44
- 後牟田遺跡調査団・川南町教育委員会 2002『後牟田遺跡 宮崎県川南町後牟田遺跡における旧石器時代の研究』
- 大竹憲昭 2002「長野県竹佐中原遺跡」『考古学ジャーナル』No.495 pp20-23
- 大竹憲昭 2004「長野県竹佐中原遺跡」『考古学ジャーナル』No.523 pp22-25
- 小田静夫 1980『西之台遺跡 B 地点』東京都埋蔵文化財調査報告第7集
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1996『柏山館発掘調査報告書』
- 佐久市教育委員会 1999『八風山遺跡群』
- 佐久市教育委員会 1990『立科F遺跡』
- J.E キダー・小田静夫編 1975『中山谷遺跡』国際基督教大学考古学研究センター Occasional Papers No.1
- 城南町教育委員会 2002『沈目遺跡』城南町文化財調査報告第12集
- 竹岡俊樹 1989『石器研究法』pp.62
- 戸沢充則 1974「先土器時代における石器群研究の方法」『信濃』17巻4号 pp.1-14
- 戸沢充則 1991「石器と人類文化」『季刊考古学』第35号 pp.14-16
- 長野県教育委員会 1971『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』―阿智・飯田・宮田地区―昭和45年―
- 長野県教育委員会 1973『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』―飯田市市内 その3―
- 長野県教育委員会 2000『大規模開発事業地内遺跡―遺跡詳細分布調査2―』
- 長野県埋蔵文化財センター 1997『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13』
- 長野県埋蔵文化財センター 2000『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15』
- 中野市教育委員会 1995『沢田鍋土遺跡発掘調査報告書』
- 日本考古学協会 2003『前・中期旧石器問題の検証』
- 野尻湖人類考古グループ 1987『野尻湖遺跡群の旧石器文化 I』
- 広島県教育委員会 1980『下本谷遺跡発掘調査概報』
- 藤森栄一・戸沢充則「茶白山石器文化」『考古学集刊』
- 本川根町教育委員会 2003『ヌタブラ遺跡発掘報告書』
- 宮守村教育委員会 1986『金取遺跡―発掘調査報告書―』
- 山本村誌編集委員会 1957『山本村誌』

報告書抄録

ふりがな	こくどう474ごう (いいたかどうろ) まいぞうぶんかざいはくつちようさほうこくしよ
書名	国道474号(飯橋道路)埋蔵文化財発掘調査報告書
副書名	長野県竹佐中原遺跡における旧石器時代の石器文化
巻次	1
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	75
編著者名	大竹憲昭
編集機関	財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター
所在地	〒388-8007長野県長野市篠ノ井布施高田963-4 TEL 026-293-5926
発行年月日	2005年3月18日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
たけすかかはら 竹佐中原	ながのけん いいたか 長野県飯田市 あけさ 竹佐182-1	20205	331	35° 27' 56"	137° 45' 40"	20001113-20001208 20010704-20011221 20020411-20021220 20030512-20031023	37,110㎡	国道建設に伴う事前調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺物	主な遺構	特記事項
竹佐中原	集落	旧石器	スクレイパー類 ナイフ形石器 斧形石器	ブロック3	日本後期旧石器時代ナイフ形石器文化を遺る可能性のある石器文化

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 75

国道 474 号（飯喬道路）埋蔵文化財発掘調査報告書 1

飯田市内その 1

長野県竹佐中原遺跡における

旧石器時代の石器文化

発行 平成 17 年（2005 年）3 月 18 日

発行者 国土交通省中部地方整備局

長野県埋蔵文化財センター

〒 388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田 963-4

TEL 026-293-5926 FAX 026-293-8157

印刷 信毎書籍印刷株式会社

〒 381-0037 長野県長野市西和田 470

TEL 026-243-2105 FAX 026-243-3494

